知識の應用であることを思へば、今後の民族の發展に理科が極めて必要なことは改めて云ふまでもない。我國の如きは從來他國の進んだ知識をその儘に輸入して短かい年月の間に驚くべき進歩をなし得たが、眞似をして居るばかりでは何時まで經ても手本には敵はず、其上、一等國と名乘るやうに成つてからは先方でも用心して秘する故、眞似することさへ中々容易でない。それ故、今後は自力で他に負けぬだけの速力を以て文明を進めなければならぬが、その爲には常に理科を奬勵し、各方面に理科知識を應用することが何よりも急務である。若し油斷して文明に進むことを怠つたならば、忽ち平和の戰爭に敗北して二等國、三等國或は四等國五等國の位置に下り、極めて苦しい境遇に陷るの外はないであらう。

暫時でも外國のことを目から離すと、兎角我國の今日の有樣を以て已に文明の極に達して居るかの如くに感じ易い。老人等は多くは斯く考へて居る樣であるが、之は何事も文明の進まなかつた昔に比べる

からである。卽ち東海道なども昔は十五日も掛つたのが今では汽車で十五時間で行ける。駕籠が電車や自動車になり、行燈が瓦斯燈や電燈になり、飛脚が郵便となり、その上電信や電話などの重寶なものが出來た。今では無線電信や無線電話も出來、寫眞を電信で傳へることさへ出來る。蓄音機で死んだ親の聲を聞くことも出來れば、活動寫眞で其の生きて居た時の擧動を再び見ることも出來る。近來は飛行機も完全になつて、人間に翼が生じたも同樣になつた。此等は何れも昔の人の夢にも見なかつたことで、若し話して聞かしたら必ず魔法と思ふたに違ひない。斯く考へると實に今日の文明は驚くべき進歩をしたもので、老人輩が感服するのは尤もな次第であるが、今日の列國競爭場裡に立つて、民族の發展を圖るに當つては、決して昔を標準として今の文明に安んずべきでない。我に優る一等國が幾つもある間に挾まつて、文明進歩の競爭に後れぬやうにするには、是非とも競爭の相手なる他の一等國に比較し、之よりも一層優つた文明を以て努力の目標とし

なければならぬ。通常の徒歩の競爭に於ても、自分が昔し這つて居た頃に比べて、今日非常に速に走れると云うて安心して居たならば、競爭に負けるは當然である。若し勝たうと思ふならば、必ず競爭の相手を標準に取り、彼れよりも優つた速力を出すやうに努めねばならぬ。また現在已に後れて居るならば先づ彼れに追ひ付かねばならぬが、追ひ付くには相手が一歩進む間に此方は二歩進み、相手が三歩進む間に此方が四歩進むと云ふ樣に、自分の速力の方が日立つ程に優つて居なければならぬ。然るに今日の有樣を見ると、我國の文明が他の一等國に後れて居るのみならず、文明に進む速力も彼に及ばぬ樣に見える。最近十數年來のことを考へて見ても、ヨーロッパ、アメリカの一等國には著しい發明が澤山ある。普通に人の知つて居るものだけを擧げても、レンチヘンのエッキス光線とか、ラヂウムとか、自動車、飛行機とか又は人造の藍、人造の樟腦、石英の硝子とか尙その他に數多くある。其の同じ十數年の間に我國では之に匹敵すべき發明が一つでも有つたかと云

ふに、恐らく何も無かつた樣に思ふ。化學知識應用の盛なことはドイツが一等優れて居るが、從來特殊の天產物からのみ製した物を人工で勝手に造り得るやうに成つたのが種々ある。今述べた人造の藍、人造の樟腦などは其の例であるが、藍の草を培養せずして眞の藍を造り、樟樹の無い所で眞の樟腦を造り得るやうに成つたのであるから、從來藍草や樟樹を特產物として居た國には急に强敵が現れた譯で、經濟上著しい打擊を蒙むることになる。染料や香料は今日已に種々のものが人造的に出來て、從來の如くに一々その植物を培養するに及ばぬやうに成つた。人造絹と稱する物は今日の所では眞の絹ではないが、追々研究が進めば何時眞の絹が蠶を飼はずして人工的に出來るやうに成るかも知れぬ。此等は總べて理科知識の應用に基づくことで、今後は各國ともに益盛に發達するであらうから、平素理科知識に對して冷淡で、其の進歩を充分に圖らぬ樣な民族は忽ち遠く追ひ越されて平和の戰爭に敗北するを免れぬであらう。

以上述べた通り、我國は現在他の一等國に比して、文明的新知識の應用に於て遙に劣つて居るのみならず、其の進歩の速力に於ても著しく劣つて居るのであるから、我が民族の將來の發展を圖るには、是非とも其の基礎となるべき理科方面の學科を大に奬勵して、農業、工業等に廣く之を應用するやうに務めることが必要である。今日とても此事が全く行はれて居ない譯ではないが、之を他の方面に比べると、甚だ振はぬ樣に見受ける。我國過去の歷史の然らしむる所であるかは知らぬが、國民擧つて文學の方に傾き、文學の雜誌ならば幾つあつても足らぬかの如くに續々出版せられ、小學校の生徒までが好んで作文を投書して居る。之に比すると理科に對する國民の趣味は極めて微々たるものである。我等とても決して民族の發展には理科だけが必要で、他は捨て置いて宜しいと云ふのではない。德育にも知育にも素より力を盡さねばならず、美術、文藝を進めて趣味を高尙にすることも勿論必要ではあるが、我國今日の有樣を見ると、青年等の文藝に對する趣味と理

科に對する趣味とが、餘りに權衡を失して居るやうに感ずる故、理科のみを取つて述べたのである。文學に關する雜誌は少年文壇とか、文章世界とか云ふやうなものが無數に書店から出版せられ、詩歌、小品文などを募集し名前を掲げて載せる故、少年、青年は之に釣られて夢中になる者もあつて、殆ど望ましい以上に其の方面に傾く者が多く出來るやうであるが、之は一面普通教育に於て理科の精神が徹底せぬための反響とも思はれる。民族間の競爭は日夜絶えず行はれて居ることで、此の競爭に負けぬためには物質的文明の進歩が必要條件であることを悟らしめ、且總べて實地に徵する方法によつて理科を授けて、何事も自身で直接に研究することの興味を起さしめたならば、たとひ一方文學の面白さを知つても、直に之に走つて之のみに偏する如き弊を避けることも出來やう。素より理科の奬勵が必要であると云うても、決して理學者ばかりを澤山拵へると云ふ意味ではない。純粹の學科を研究する者は何所の國でも少數より無く、また之に適する人間も澤山は無

いから專門の學者は少數で宜しいが、理科に對する趣味を持つて、自身には專門に理科を修めなくとも、常に理科の進歩發達を圖ることに力を添へると云ふ樣な人間が、今日よりは遙に多くならぬと、我が民族の將來の運命は決して長く隆盛であり得ぬであらうと考へる。

（明治四十三年二月）

一二　教育と迷信

一　教育の目的

教育學の書物には教育の目的に就いて、種々高尚なことが書いてある樣であるが、實際に於ては教育の目的は列國競爭場裡に立つて、立派に獨立して行けるだけの資格を備へた次代の國民を養成するに在ることは確である。若し此の目的に適はぬ樣な教育を施す國があつたならば、其の國の前途は頗る危い。されば教育に從事する者は此の實際的の目的を常に意識して一刻も之を忘れてはならぬ。

さて列國競爭場裡に立つて立派に獨立して行ける樣に次代の國民を養成するには、先づ他の國々と、自分の國とを比較して其の優劣を考へ、我方に劣つた點があるならば力を盡して、一刻も早く他の國に追ひつき、尙之を追ひ越す樣に務めねばならぬ。また我方に優つた點を見

出したならば、これは尙奬勵して何時までも優つた位置を保つ樣に心掛けねばならぬ。それには先づ他の國々に比して我國が現在如何なる狀態にあるかを熟知することが必要である。

二　我國の現狀

我國は一度は淸國と戰つて勝ち、次には世界の强國なるロシヤと戰つて勝ち、今は一等國の中に算へられる樣になつた。併しながら軍事以外の方面を英、米、獨、佛等の如き他の一等國と比較して見ると、如何に贔負目を以て見ても彼等に匹敵するとは云はれぬ。否二等國、三等國と云はれる國々に比べてさへ遙に及ばぬ點も甚だ多い。物產に就て見ても、我國の主要な輸出品は生絲、茶の如き殆ど天產物その儘のもので、他の一等國の如き精巧な機械、藥品、工藝品ではない。外國人に見せて自慢の出來るものは、富士の山か瀨戸內海の景色か乃至は藝者の手踊り位で、他の一等國の如くに、完備した博物館も無ければ、智力で造り上げた巧妙な製作品もない。內國博覽會を開いても最も評判に上る

ものは八千圓の造花とか、一萬圓の刺繡とか、單に根氣を要する指先仕事ばかりで、文明を代表すべき機械館には僅に玩具に均しい製麵機械が人を呼んで居るに過ぎぬ。斯樣に數へ上げれば際限が無い程に、今日の我國には他の一等國に比して、到底足許にも及ばぬ程に劣つて居る點が多い。然して其の根源は何にあるかと云へば、孰れも理科の知識の普及せぬこと、其の應用の發達せぬことである。法律が如何に完備しても、文藝が如何に隆盛に赴いても、理科の知識が今日の如き有樣に止まり、理科の應用が今日のまゝで進まなかつたならば、今後の我國は如何にして他の一等國と競爭して行くことが出來るであらうか。聊かでも國の將來を考へる者は決して平然と安心して居られる次第ではない。

三　理科の奬勵は目下の急務

昔は交通の開けなかつた爲に、我國の如きアジヤの片隅に在つて他國と遠く離れて居る所では、たとひ多少他に劣つた點が有つて

も、直に其のため不利益を蒙る如きことは無かつたが、今日の如くに二週間あればヨーロッパから來られる時代となつては、聊かでも他に劣つた點があれば、其のため忽ち窮境に陷る虞がある。國と國との間には干戈を交へる眞の戰爭の外に、常に平和の戰爭なるものがあつて、之に敗ければやはり國は衰へる。眞の戰爭のための軍備が常に必要であると同じく、平和の戰爭に對しても常に大に準備しなければならぬが、如何なる國が此の戰に勝つ望みが多いかと云ふと、無論理科的知識の進んだ國である。今日ドイツ國が英國をも凌駕して、世界各方面の商業に成功して居るのは、全く理科的研究の進んだ結果で、英國の新聞などを見ると、頻に此の事を論じて居るが、我國よりは遙に優れた英國でさへ其の通りであるから、我國の如きは、特に非常の奮發を以て理科の教育を進めなければ、今後他の一等國との平和の戰爭に加はることさへ出來ぬ樣になる。銀座邊の玩具店には他の外國製の玩具は餘り見當らぬがドイツ製のは澤山に竝べてあつて、然もそれが精巧に、堅固

に出來て居て、價が安い。蒸氣機關と發電器と電燈との雛型が一つの臺に据ゑ附けられてあるものが、僅に十圓位で買へる。之を價が高くて、忽ち破損する內地製の學校用理科器械に比べると實に雲泥の差で、眞に情ない感じが起るが、理科の知識が職工にまで普及して、單に外形を眞似るのでなく、眞に理窟を了解する樣に成らねば、斯樣なものは到底造れぬ。隨つて海外へ輸出して、他國の製品と競爭することなどは無論出來ぬ。近來淸國へ內地製の理科器械を輸出して、大に好評を得なかつたのは、一は職工に充分の知識が無かつた故で、必ずしも商人の橫着のみに原因した譯ではなからう。

我國が未だ一等國と呼ばれなかつた間は、他の一等國の研究の結果をその儘貰うて眞似することが出來た。彼等は恰も大人が小兒を見る如き心持で、我國を見て居たから、何をも隱さずに敎へて呉れたが、我國が露國に勝つて自ら一等國と名乘るやうに成つてからは、樣子が全く一變して、彼等は我國を競爭の相手と見做し、大に我國を買被つて、若

し工業上の秘密を漏らしたならば、卽座に之を眞似して忽ち自國を壓倒し得る力を有するものの如くに心得てか、視察員が來ても一切門を鎖して見せぬ樣になつた。されば今後は總べて我國で研究し、他國に劣らぬやうに、他國に勝る速力を以て理科の知識を進めねばならぬから、理科教育の奬勵は實に我邦目下の急務である。

四　理科の精神

理科教育を奬勵するには、先づ其の根柢なる理科的精神を養ふことが必要である。理科的精神とは何事も實物に就いて自身に研究し、若し疑はしいことが有つたならば、何所までも實物から解釋を求めるといふ心を指すのであつて、此の精神が無ければ理科は決して發達するものでない。單に書物で讀んだことをその儘に暗記し、教師から聞いたことをその儘に覺え込む如きは、理科的精神の正反對で、たとひ事柄は理科的のことでも、斯樣な學び方では眞の理科とは名づけられぬ。小學校で理科を授けるに當つても、若し單に事柄を教へるだけであつ

て、此の精神を養成することを忘れたならば、其の教育上の効果は誠に少ない。世には近眼者流があつて、理科は直に實用の出來るものでなければ、教へる價値が無いやうに思うて居るが之は大間違ひで、普通教育に於ける理科の眞價は寧ろ上述の如き理科的精神を養成して、研究心を起さしめる點に存するのである。また高等なる專門教育にても、基礎となるべき純正科學を飛び越して、直に其の應用を授けんとするのは、恰も土臺と下座敷とを略して、二階だけを建築しやうとする如くで、到底不可能である。農學校、山林學校、水產學校を幾つ立てても、其の教科目を見れば、やはり動物學や植物學が主要なる部分を占めて居て、此等の基礎學科の發達せぬ間は其の應用の方面も充分に發達する見込みはない。然るに我國では農學や水產學の大切なことを知つても、其の基礎となるべき動物學や植物學は無用の學の如くに見做して居るが、之は餘りに先の見えぬことである。元來科學上の大發見は電氣でもエツキス光線でも、總べて應用を顧みぬ純粹研究の結果に出來た

もののみで、初めから應用を目的とした研究には、之に匹敵する大發見は嘗てない。然し一旦大發見の出來た以上は直に之が種々の方面に應用せられるは云ふまでもないから、純正科學の發達は卽ち應用科學の發達の先驅であつて、純正科學の奬勵は、やがて其の應用方面の奬勵と成るのである。流石にドイツ國は此の明な理を知つて、純正應用ともに理科の發達に力を盡して居る。今回新に設けられたカイゼルウィルヘルム理科奬勵會の如きも、目下應用の有無に關せず、たゞ理科の研究を進めることを目的として居るが、顧みて我國の有樣を之に比べると、實に何と云うて宜しいやら心細い極みである。

要するに我國は他の一等國に比して、理科的知識と其の應用とに於て遙に劣等の位置にあり、今後餘程の奮發を爲なければ到底彼等と肩を竝べて競爭場裡に立つことは出來ぬ。然し理科的知識を進めるには、先づ其の根柢たる理科的精神を養成して、盛に研究心を起させることが必要である。斯樣に考へると、普通教育に於ける理科的訓練は我

國の將來に重大な關係を有するものであつて、決して今日までの如くに輕んぜられて宜しいものではない。教育の任に當る者で、苟も我國の將來を考へるものならば、大に此の點に注意して、全力を盡す覺悟が無くてはならぬ。

五　理科と迷信とは兩立せず

理科を發達せしめるには理科的精神を養成しなければならぬが、理科的精神とは前に述べた通り書物に書いてあることでも、他人から聞いたことでも、直に其儘に信ずる如きことを爲さず、出來る限り實物に就いて照し合せ、若し疑ふべきことがあれば、更に之を研究すると云ふ精神で、語を換へて云へば何事も先づ疑ひ、次に研究に依つて其の解釋を求めると云ふ精神である。卽ち信ずべき理由を見出せば信じ、疑ふべき理由のある間は疑ひ、何れともに更に研究を進めるのが理科的精神で、此の精神を以て自然界に對し、研究を怠らなければ理科は必ず進歩し、其の應用の途も必ず開ける。此の精神と正反對に位するものは

迷信である。迷信とは其の時代相當の知識を以て考へて、到底信ずべき理由のないことを猥に信ずるのを名づける。理科は疑ひに依つて始り、研究に依つて進歩するものであるから、話して聞かされたことを頭から信じて掛かる迷信とは、性質上到底兩立することは出來ぬ。理科に適する腦髓は迷信には適せず、迷信に適する腦髓は理科に適せず、同一の腦髓を以て理科と迷信とを兼ね務めることは出來ぬから、理科を奬勵することは、卽ち迷信を退けることに當る。尤も人間の知識は次第に進歩するもの故、今日眞理と見做されることが、將來には迷信と名づけられる時が來るやも知れぬ。歷史を見れば、多くの「眞理」なるものは初め異端の說として現はれ、暫時專ら行はれたる後、終には迷信として葬られるのが定例の如くであるから、今日の眞理も或は一時的の眞理かも知れぬが、これは止むを得ない。我等は時代相當の知識を標準として、迷信と見做すべきものを迷信として論ずるより外に途は無いのである。さて今日我國の狀態を見ると、迷信と見做すべきものの

行はれて居ることは極めて多い。これが卽ち我國に理科的精神の普及せぬ證據で、これを見ても理科教育を一層盛んにせねば成らぬことが知れる。數日前の或る新聞に、或る地方の寺で和尙と小僧とが喧嘩をして、小僧は鬱憤の餘り刀を以て寺の本尊なる木製の佛像を切つた所が、佛像の眼に涙が出たとの噂が擴まつて、其のため日々數千人の參詣者があつて、寺は大繁昌であるとの記事があつたが、斯樣なことを信ずるに適した腦髓を有する人が我國には未だ中々多い。先年鶴見近在の御穴樣の繁昌したときには、參詣人を相手にする永久的建築の店家が五百軒も出來て、線香の煙りが遙に隔つた所からもよく見えた。電車の中には占ひの廣告が竝んでありり、毎日の新聞紙上には九星運命の記事が掲げてある。何所の國でも全く迷信のない所は無いが二十世紀の一等國としては、我國は餘りに甚だしい樣に思ふ。斯樣な頭を持つた人間が大多數を占めて居る樣では、年々非常な速力で理科知識應用の進みつゝある他の一等國に敗けぬやうに競爭して行くことが

果して出來るであらうか。

六　昔の迷信政治

今日の立憲政治國には決して無いことであるが、昔は隨分迷信に依つて民を治めやうとした所がある。主權者を神の代表者なりと信ぜしめ、主權者の意志は卽ち神の意志であるから絶對に服從すべきものであると敎へ、之に叛く者は神の代表者なる主權者に依つて嚴罰に處せられると云ふ仕組にして民を治めやうとしたが、之は治める側から見れば極めて都合の好い仕組で、もし完全に行はれさへすれば、何の困難もなく長く治めて行くことが出來る。また治められる側から見ても主權者が餘り無法な事をせず、民を愛撫して吳れさへすれば喜んで長く治められ、泰平を謳歌して子々孫々無事を樂む事が出來るであらう。それ故、迷信に依つて民を治めると云ふ事は、其時だけの事を考へると、强ひて非難すべきものではなく、暫時なりとも、それに依つて國が治まり、民が安樂に暮せるならば、反つて賞讃すべき價があるかも知れ

ぬが、世が進み隣國との交通も開け、人民の思想が廣く成つて來ると、何時までも昔の儘に迷信を保たして置くことが困難になり、治める側に立つ者は勢ひ、或は坊主を傭ひ入れたり、或は敎員に命令を下したりして、迷信の保存に力を盡さなければならぬ樣に立ち至る。斯くして態態力を盡して迷信の保存を務めるやうになれば、自然の結果として、何事に對しても疑を起す如き傾向を防ぎ、人民の研究心を壓へることになるから、理科的知識の發達は是非ともその爲に障害せられ、文明の進歩は極めて遲くなるは止むを得ない。世の中に國が一つより無い場合には單に國が治まり、民が幸福でありさへすれば善いのであるから、若し迷信に依つて此の目的が達せられるならば、それで誠に結構であるが、地球上には澤山の國があつて、之が各、力を極めて互に劇しい競爭をして居る以上は、單に國內の平穩無事のみを目的として安心しては居られぬ。必ず他に敗けぬだけに進歩しなければならぬが、此の方面から考へると、迷信を以て民を治めると云ふ事には大なる害がある。

七　迷信利用の害

前にも述べた通り、昔の世の中では隨分迷信に依つて民を治めることも出來て、其の當時は治める者も治められる者も、暫く泰平を謳ふことが出來たが、世が進んで人の知識も自然に發達せんとする場合に、尙舊來の迷信を利用して民を治めんと圖ることは、其の國の將來に對しては甚だ不利益なことである。治める側の者はたゞ一途に國を思ひ、民を思うて舊來の迷信の保存に務めるのであるとしても、之は目前のことのみに重きを置いて、將來のことを度外視した誤つた考へである。時勢の進歩を顧みず舊來の迷信を强ひて保存しようとすれば、勢ひ理科的精神を壓へることになり、理科の發達を妨げ、理科的知識の應用を遲からしめて、文明の進歩を阻害することになるが、列國競爭場裡に在つて獨立を保つて行くには、此事は餘程考へねばならぬ。今日最も文明の進んだ英、米、獨等の如き强國は從來迷信を利用することの最も少かつた國々で、今日文明に後れて衰弱の狀に赴きつゝあるイスパニヤ

の如きは嘗て最も多く迷信を利用したことのある國ではなからうかと考へる。迷信を以て民を治めれば、治める者は骨が折れぬかもしれぬが、國の進歩はその爲に遲れる。之に反して民の研究心を勵ませば、治める者は骨が折れるが國の進歩は著しい。要するに迷信によつて民を治めんとするのは、現在のために將來を犧牲に供することに當るから、假に今日斯樣な政策を取るとしたならば、其の國の前途は實に危いものである。

八　教育上の注意

新聞紙の報ずる所によると、近來我國では教育の一手段として、神社佛閣等に參詣することが行はれ始めたやうで、何村の小學校では校長が生徒全部を率ゐて鎭守の社に參拜して御供物を戴いて歸つたとか、何學校の生徒團體が何寺に詣でたとか、云ふ記事を見ることが屢、あるが、之に就ては教育者の餘程注意しなければならぬ點があると思ふ。それは何かと云へば、卽ち迷信を避けることである。神社佛閣に參詣

することは我國從來の風俗であつて、我らの如き者でさへ、神社佛閣の在る所へ行けば必ず參拜することに定めて居るが、神社や佛閣の由來、緣起を書いたものを見ると、何れも昔の未開の時代に誰かゞ造つたものと見えて、今の知識を以ては明に迷信と見做さゞるを得ぬやうなことで充たされて居る。學校の生徒などに特に神佛を敬はしめやうと導く場合には、往々斯樣な迷信を迷信として退けることを躊躇する如きことがないであらうか。若し聊かでも迷信を退けることを躊躇し、生徒等をして聊かでも迷信に陷らしめる虞があつたならば、その國家の將來に及ぼす影響は決して好良なりとは云はれぬ。現在の宗教から迷信に屬する部分を引き去つて、殘餘の部分を尊崇するやうに導くことが出來るならば誠に結構であるが、神佛を敬ふ心を速に養はうと急るの餘り、知らず識らず迷信を傳へ擴げるやうなことが有つたならば、利よりも害の方が遙に多い。これは實際教育に從事して居る者の深く考へなければならぬ事である。

元來神佛を尊崇することを奬勵したならば、世の風俗が改良せられるであらうか否かが已に疑問である。今日教育ある一部の人々の間に宗教が全く勢力を失ふに至つたのは、現在の宗教が最早斯かる人々に適せぬ故であつて、到底之を恢復することは六ケしい。また昔から「椿の木と後生願ひに眞直はない」と云うて宗教に熱中する人に模範的人格を備へたものは却つて少ない。成田山に詣でる連中や太鼓を敲き御題目を唱へて練り歩く人達が盛に殖えたら、世の中の風俗が立派に成らうとは如何にも考へられぬ。知事が衣冠束帶して赤地金襴の覆ひ掛けたる唐櫃を奉侍して神社に詣でるとか、烏帽子、直垂の伶人、綾錦の水干に下げ髪の童子、紫衣の法主が練り出し、萬歲樂や延喜樂を奏するとか云ふことは、昔の風俗を保存するとしては宜しいかも知れぬが、之に依つて世道の敗頽を防がうと企てるのは最早今日の時世には適せぬことである。

「苦しい時の神頼み」といふ諺もある通り、何事でも種々の方法を盡し

ても効果の現はれぬ場合には神佛に賴るやうに成り易い。例へば病人でも彼の醫者にも診て貰ひ、此の病院へも入れたりしても著しく效の無いときは、終に加持や祈禱を賴むやうになるが、教育者が今頃急に思ひ立つたかの如くに、神社佛閣を崇める樣に成つたのは、或は世道人心の敗頽に對して種々の救治策を試みて、何れも效を奏せぬ所から終に神佛でも信心したら少しは御利益があらうかと考へるに至つたかも知れぬ。若し左樣なれば事情は大に察すべきであるが、未だ講究の餘地が有らうと思ふ。兎に角我國の現狀を顧みると、大に理科的精神を鼓吹して各方面の研究心を養成し、文明に進む基礎を造ることが目下の急務なることは明であるから、普通教育に於ては特に此の事に意を注ぎ、聊かでも之を妨げる虞のあることは絶對に避けなければならぬ。

（明治四十四年五月）

一三　誤解せられたる生物學

科學の中には教育のない人々から常に誤解せられて居るものが少なくない。例へば地質學の教室へ外國人を連れて來て、此所は土壤を分析して如何なる作物に適するかを調べる所であると、説明した案内者もある。また日々の天氣豫報は天文臺から出るものと心得て、星學者に向うて其の餘り當てにならぬことを盛に攻擊し掛けた紳士もある。然し是等は孰れも極端な例であつて、今日一通りの普通教育を受けた人ならば、斯く甚だしい間違ひをする者は無からう。然るに此所に一つ普通教育を受けた人々は勿論、教育の任に當れる人々までが誤解して居る如くに見える科學がある。それは外でもない、卽ち表題に掲げた生物學であるが、誤解の結果として此の學の眞の價値が認められず、極めて重要な性質のものでありながら、頗る等閑に附せられて居

ることは我等の常に最も遺憾に堪へぬ所である故、此所に聊か其の誤解せられて居る點、その誤解せられる理由、竝に眞の生物學とは如何なるものなるかを述べて置きたいと思ふ。

先づ第一に今日の所では生物學と云ふ名稱さへも世間には廣く用ひられて居ない。動物學と植物學とは常に鑛物學と合併して博物學と呼ばれ、中學校、師範學校の課程の中にも博物と云ふ科目はあるが生物學と云ふ名前は見當らぬ。斯くの如く博物學と云ふ名稱のみが世間一般に行はれて居る故、世人は動物植物の研究と云へば、總べて博物學の範圍内に屬することと考へて、別に生物學なる獨立の學科の存在することを知らぬ樣であるが、我等が最も明にして置きたいと思ふのは此の點である。元來博物學なる名稱は、自然物に關する學問の未だ幼稚な頃に造られたもので、今日の如くに學問の發達した時代から考へると頗る不適當な名前である。それ故今日では最早何所の國でも大學に此の名稱の學科の設けてある所はない。また新に出版せられ

る學術的の雜誌、報告類に此の名稱を冠らせたものは一つもない。今日の生物學なるものは從來博物學と稱へ來つた境を已に通り越して遙にそれ以上のものと成つて居るのである故、彼と是とは決して同一視すべきものでない、之を混同するのは大なる誤解である。

然らば博物學と生物學とは如何なる點に於て相異なるかと云ふに、其の研究の目的物は同一であるが、之を研究する方法が全く違ふ。從來の博物學は單に自然物を記載し、分類し、各種の用途、能毒等を調査するに止まつて、科學の眞髓とも云ふべき推理力を用ひる部分が殆ど全く缺けて居た。それ故、成るべく多くの自然物を識り、成るべく多く其の名稱を暗記して居る人ほど斯學の大家と仰がれ、博物學の書物と云へば徹頭徹尾自然物の記載のみであつた。教育學の書物などには今日でも往々科學を別けて記載の科學と、說明の科學との二組とし、動物學や植物學を記載の科學の中に入れてあるが、從來の博物學ならば全く其の通りに相違ない。然し科學なるものは元來實驗、觀察等の如き

經驗のみで成り立つものではない。また事實を度外視した思辨的推理のみで成り立つものでも無論ない。經驗と推理との二者が適當に配合せられて、始めて眞の科學が出來るのである。物に譬へて見れば經驗に依つて一個一個の事實に關する知識を獲ることは、恰も建築の材料となるべき一個一個の瓦や煉瓦を集めてたゞ貯へて置く樣なもの、また單に思辨的に推理力のみに依つて學問を造らうとするのは、恰も紙を擴げて其の上に建築の設計圖ばかりを引いて居る樣なもので、孰れにしても一方のみでは何時まで經ても決して實際の建築物は出來上らぬ。學問も全く之と同じく實驗、觀察等に依つて一個一個の事實を知り得たのみでは、如何に多く之が溜つたとて決して眞の科學の體裁を備へたものとは云はれぬ。また思辨的に推理力のみを賴んで考へたのでは、如何に立派な學說系統が組み立てられたりとも、これは全く紙上の空論であつて、昔の哲學、倫理學等の如く何の役にも立たぬ。今日の生物學は純正の科學として經驗と推理とを雙方ともに重んじ

て研究を進める故、その進步は迅速なりとは云はれぬが、進步しただけの所は餘程確實であり、隨つて他の學科に影響を及ぼす事も甚だ多大である。人類の思想界に空前の大變動を起した彼の進化論の如きも、斯かる研究法の結果である故、前の譬へに比べると今日の生物學の研究方法は、實驗と觀察とに依つて建築の材料を集め、推理に依つて之を組み立てて居ると云うて宜しい。

斯くの如く昔の博物學と今日の生物學とでは研究の方法が違ふ故、學科の組み合せ方も大に改めねばならぬ所が生ずる。單に自然物を記載し分類し、用途を講ずるに止まる間は自然物を調べる學科を博物學と名づけ、更に之を動物學、植物學、鑛物學の三部に分けて置くに何の不都合も無い。從來の博物學は此の程度にあつて、動物でも植物でも、鑛物でも、たゞ各種を記載するだけに止まり、別にそれ以上のことに論じ及ぼさなかつた故、總べてを合して一學科と見做して置いても何等の不條理な點も見出さなかつたのであるが、今日の如くに推理の力に

依つて一個一個の事實の間の關係を考へ、原因結果の理を明にしやうと務める階段に達した以上は、鑛物までをも込めて自然物の全部を一學科の研究の目的物とすることは到底不可能のことであり、隨つて從來の如き學科の組み合せ方は到底その儘に用ひ續けることは出來ぬ。何故かと云ふに動物と植物との間には共通の點が非常に多くあり、其の間の境界は全く不判然であつて、特に理論を講ずるに當つては、決して動物學の理論と植物學の理論とを分けることが出來ぬに反し、鑛物の方は生命なき結晶などである故、總べての點に於て動植物とは全く其の性質が違ひ、單に孰れも自然物であると云ふことの外には、殆ど一も共通の性質が無い。斯樣に相異なつたものを一つに合せて同時に之に通ずる理論を研究することの出來ぬは勿論である。されば今日の如くに經驗と推理とを合せ重んじて、眞正の科學を形造らうとする時代には博物學なるものは到底一學科として存在すべき理由がない。此の事は昔から生物を科學的に研究せんと試みた學者の皆唱へ來つ

た所であつて、生物學なる名稱を用ひ始めたトレヴィラヌスでも、スペンサーでも、ハックスレイでも皆この說を主張した。今日高等の教育で、最早博物學なる名稱が用ひられぬのは卽ち上述の如き理由に基くことである。尤も初等や中等の學校で、教員の受持時間數等の關係から、便宜上、博物學なる名稱を存して置いて、生物學と鑛物學とを其の中に雜居せしめて置くのも、强いて惡いこととは思はぬが、博物學なる名稱が今日の生物學を誤解せしめる一原因であることを考へると、斯かる無理なる組合せ方は成るべく避けた方が利益であらう。

以上述べた通り生物學が世間から誤解せられて居るのは、主として此學の歷史的の經過に基くことであるが、更に詳に云へば、其の原因は一は學科自身の性質に基き、一は從來の博物學者なるものの態度にも基いて居る。先づ學科の性質の方から論じて見るに、凡そ生物に關する自然の理法を探求せんとするには先づ第一に生物各種に關する正確なる知識を集めねばならぬが、その爲には是非とも各種の生物を採

集し、之に就いて實驗觀察する必要がある。然るに生物の種類の數は極めて多く、其の中で食物、衣服、裝飾等の材料となつて、直接に人生と關係を有するものは寧ろ少數であつて、其の他は皆普通の生活をする人間より見れば何の價値もない物ばかりであるが、生物學上より見れば何れも研究の材料として同じく價値を有するもの故、生物學を研究する者は如何なる種類の生物でも必要に應じて採集するが、之が世間一般の人々からは餘程奇態に見える。特に人間には何でも集めて樂しむ性質を備へた者が有つて、郵便の古切手やマッチの貼紙までを集める故、蛭や蚓蚯などを集めるのも、やはり右と同樣な一種の道樂の如くに思はれ、之を研究する學問ならば恐らく實際の人間社會とは何等の交渉もない極めて緣の遠いものであらうと推察せられ、生物學の眞の目的は如何なる邊に存するかを尋ねるに及ばずして遂にその儘に終るのである。

斯くの如く生物學自身に世人から誤解を招くべき處ある性質を帶

びたる上に、從來の博物家なるものの態度も大に生物學を誤解せしめることを助けた。全體世人が博物家と名づける者の中には眞に程度の低い者がある。世人は分數、比例若しくは開平、開立が出來たとて、其の人を數學家と呼ばぬが、網を持つて蝶やトンボを採集し硝子蓋の箱に竝べて、十箱にも及ぶと、既に其の人を博物家と名づけて、之と生物學者とを混同して居る。然も昆蟲を十箱集めただけでは、實は未だ生物學の門へも入らぬ位の所である故、到底數學中の開平、開立の位地には及ばぬのである。また眞に博物家と稱すべき人も多くは新種の發見に骨を折り、觸角の節の一つ多い甲蟲とか斑點の一つ少ない蝶とかを新種として記載する故、世間では動植物に關する學問は單に各種屬の分類記載、異同の識別等のみに止まる如くに誤解し、動植物學を記載の學問と名づくるに至つたのである。西洋諸國でも生物學と云ふ名前の稍廣く行はれるに至つたのは、實に近年のことである故、我國の如き生物學の研究の日尙淺く、其の研究者の數少なき所で生物學が誤解せ

られ居ることは實に止むを得ぬことでもあらうが、誤解は何所までも誤解として速に除かなければならぬ。分類記載も素より生物學の必要なる一部分である故、我等は決して分類の研究を排斥するのではない。我國では此の方面の研究もなほ極めて不充分である故、先づ此の方から始めなければならぬ。たゞ植物や昆蟲や介類を調べることを主とした從來の博物家の研究の態度から起つた誤解を速に除いて、生物學の眞價を弘く世に知らせたいと思ふのである。

さて生物學の誤解せられて居る點と、誤解せられる原因に就てはなほ詳に論ずれば種々述ぶべき事もあるが、此所にはそれを略して次には眞の生物學の價値効力を述べて見ると、前にも云ふた通り、此學は先づ實驗觀察に依つて各種の生物に關する一個一個の正確なる知識を集め、更に之を材料として推理に依つて、其間の關係を明にするのであるから、其の效力の方にも二段の別がある。卽ち生物各種に關する一個一個の事實が明に知れゝば、直に之を利用して人生の物質的方面に

益することが出來る。例へば昆蟲に關する知識が進めば、害蟲を驅除し、益蟲を保護して、農業山林等の殖產を助けることが出來る。然し、斯かる知識は全く專門的であつて、其の事に當る人々には大切なものであるが、一般人の思想に影響を及ぼす如きことは少しもない。之に反して生物學の理論の方は一面利用厚生の方にも有益なると同時に、人類の思想界全體に著しい影響を及ぼすもので、場合に依つては舊思想を轉覆せしむる程の結果を生ずるものである。直接に人生を益する方のことは今日醫術、農業、山林、水產、その他に生物學的知識が廣く應用せられて居るのを見て、世人も常に氣附いて居るであらうが、思想界に關する方は生物學に對する世人の誤解の結果として、全く忘れられて居る樣に見受ける。特に中等程度の學校の校長などには今日でも動植物學の教育上の效能は觀察力を養成するとか、分類整頓の習慣を造るとか云ふ樣な所謂形式的のものの外には單に利用厚生のみにあると考へ、受持教員に對して成るべく鰹節の造り方とか、鯣の乾し方とか

云ふ如きことを多く授けて貰ひたいと註文する人もあるとの事であるが、生物學の思想界に關する方面には全く心附かぬ人が多い。此の事も我等が日頃甚だ遺憾に思うて居る點の一つである。

抑、生物學なるものは種々の科學の中で如何なる位置を占むるものであるかと云ふに、自然科學に屬することは無論であるが、人間は生物の一である故、生物學の理論は人間に關する學科ならば孰れの學科とも密接な關係がある。人間の社會的生活に關する學科はこれまで精神科學などと云うて自然科學と對立するものの如くに見做されて居たが、生物學の進歩するに從ひ、何れも少からず其の影響を蒙ることに成つた。教育學の如きも近頃のライとかモイマンとか云ふ人の著書などには餘程生物學の理論が採つてある樣である。斯かる有樣で生物學は自身は自然科學に屬しながら、總べての精神科學の基礎となるべき性質のもの故、自然科學と精神科學との連鎖とも名づけて宜しい。恰も炭素が自身は無機物でありながら總べての有機化合物の基礎と

なるのと同じである。それ故、我等は生物學が充分に進歩して、總べての精神科學に其の影響が及んだ曉には、恰も今日有機化學が炭素化合物の化學と名づけられる如くに、總べての精神科學は必ず廣い意味に於ける生物學の範圍内に屬するものと見做されるに至るであらうと信ずるのである。

終りに我等の希望を一つ述べて置きたい。以上述べた通り生物學なるものは決して從來の教育學の書物にある樣な單に分類記載の學問ではなく、總べての精神科學の基礎ともなるべき科學である故、所謂精神科學に屬する學科を修める人は必ず之と同時に生物學をも兼ね學ばなければ不充分であるとのことに心附いて貰ひたい。生物學を知らずして精神科學を修めるものは恰も礎なしに家を建てる樣なものである故、何時倒れるやも知れぬと覺悟しなければならぬ。現に教育學なども生物學を加味した新教育學が出て來ると、從來の學説は一時如何程流行したものでも、之に對して對等の論戰が出來ぬ。何故か

と云ふに生物學の研究法は一歩毎に觀察實驗に依つて、實物に照して確めた上の議論である故、單に机の上で考へ出した空論とは論據の强弱の差が到底同日の論でないからである。素より我等は生物學が今日既に充分に發達したものであるとは云はぬ。たゞ其の研究の方法が確であり、且今日までの成績に徵して見ると將來も益々進歩すべきものであると考へざるを得ぬ故、精神科學を修める人々にも共々之を研究して貰ひたいと望むのである。

（明治四十一年八月）

一四　所謂自然の美と自然の愛

教育學の書物を開いて見ると、博物學の教育的價値を論ずる所に必ず次の一ケ條が掲げてある。卽ち「博物學を授ける目的の一は生徒をして自然の美なるを感服せしめ、隨つて自然物を愛するの情を起さしめるにある」と書いてある。我國の文部省の普通教育に關する法令の中にも、やはり此の説に依つたものと見えて全く同樣なことが載せてある。また博物學者の方にも同樣な考へを抱いて居る人が多數を占めて居る樣であるから、今日の所では此の説は世間一般に普ねく行はれて居るものと見做さねばならぬが、我等は此の説を聞く毎に常に可笑しく感じて居たのである故、今その理由を此所に述べて聊か教育學者及び博物學教授者の參考に供したいと思ふ。

「汝は何時盜賊を止めたか」と云ふ文句の中に「汝は盜賊であつた」と云

ふ意が含まれてある如くに「自然の美を感服せしめる」と云ふ文の中には「自然は美なり」と云ふ斷案が含まれてあるが、我等の考に依れば此の斷案が已に甚だ誤つたものである。虛心平氣で自然を觀察すれば、美なりと感ずる部分のあるは勿論であるが、それと同時に甚だ醜なりと感ぜざるを得ぬ部分も澤山にある。是は極めて明瞭なことで改めて例を擧げる必要もない。自然を觀察する爲に郊外へ出掛ければ、荒れ果てた草原に牛や馬の骨が亂れ轉つてある傍に腐り掛つた猫の屍骸が横たはり、皮膚は破れ腸は流れ出し全部甚だしい惡臭を放つて居る、其の側に美しい菫の花が咲いて居て、其の隣りに新しい犬の糞が堆つて居ると云ふ如きことを到る所で實見するが、これが卽ち小規模の自然の見本である。大なる自然の全部も此通りで美なるものも醜なるものも悉く其中に含まれて居る。人の掃除した所だけは暫時例外の如くに見えるが、捨て置けば必ず土に述べた如き有樣に成つてしまふ。

斯樣な實際の有樣を目前に見ながら、醜なる部分に就いては一言も

言はず美なる部分のみを非常に賞讃し、恰も自然は全部悉く美なるかの如くに說く者の生じたのは何故かと云ふに、これは我等の考へに依れば恐らく耶蘇教の影響を受けた故であらう。慈愛に富める神が我々人間のために此の世界を造り與へたと說き込むには、勢ひ先づ此の世界は美なる世界であると會得させて置かねばならぬ。蓋し慈愛に富める親爺は決して其の子に半分腐つた饅頭を與へぬと同じ理窟で、慈愛に富める天の父は決して我々に半面醜なる世界を與へる道理は無いからである。それ故、耶蘇教の傳道者は自然の醜なる部分を押さへ隱し、美なる部分のみを賞揚し、針を棒とし、また時としては火を水として、盛に自然の美を說き、斯くの如き美なる世界を我々に與へたのは實に宏大無邊なる神樣の御慈愛であると說き立てたであらうが、それが基となつて今日の教育學書にまで此の說が浸み込んだのであらう。特に西洋諸國に於ては從來教育と耶蘇教との關係が頗る親密で、昔は主として僧侶が教育を司り、今も宗教家で教育學の書物を書く人が多

數にある位故、當然斯くの如き有樣になつたのであらう。

我等の考へを有りの儘に云へば、自然には美なるものもあり、醜なるものもあり、美醜の中間のものもあれば、美醜以外のものもある。それ故、自然を論ずるに當つてその美のみを說くのは極めて偏頗なことであつて、決して正當とは云はれぬ。また自然の中には美なる部分があるからと云うて、直に自然は美なりと說くのは、恰も象の尾だけを示し、象には斯樣な細長い部分があるとの理由で、直に象は細長いものなりと說くのと同じく甚だしい誤である。されば博物學を授けるに當り、若し生徒をして自然の美を感服せしめるを以て目的とするならば、故意に醜なる部分を隱蔽し、美なる部分のみを擧げ、强いて事實を曲げて、自然に關し全く顚倒した觀念を生徒に與へる覺悟で取り掛らねばならぬ。公平に有りの儘に自然を紹介し、生徒自身に直接にこれを觀察せしめる普通の科學的の方法では、決して以上の如き目的を達することは出來ぬ。

博物學は自然を研究する學科であるが、其の目的は決して自然の美を探ることでもなく、また醜を發くことでもない。たゞ自然の有りの儘を知ることである。それ故、此學を修めた者は他の人等に比すれば一層深く自然を知る樣になり、他の人等が醜なりと認めるものを尙精細に調べて其中に美なるものを發見することもあれば、また他の人等が外面のみを見て美なりと賞するものの內部を檢査して醜なるものを見出すこともあり、美醜ともに他の人等よりは遙に深くこれを知る譯であるが「深雪ふる遠き山邊も都より見れば長閑に立つ霞かな」と云ふ歌にもある通り、遠方からたゞ表面のみを見れば非常に平穩に美しく見えるものも、近よつて細く檢すれば實際は醜くき大紛擾であることを發見することも甚だ多い。されば博物學を修めると自然の美なる部分を知ることも益深くなるが、それと同時に其醜なる部にも常に氣が附くを免れぬ故、多年此學に身を委ねても必ずしも他の人等よりも一層自然の美を感ずる樣になるや否や、大に疑はしいことである。

又一方には動物學や植物學を修めて一々の動植物を精密に調べると、餘り非詩的に成つて自然を漠然と眺めて居る者に比べると、遙に其美を感ずる力が鈍くなり、如何なる自然の美に觸れても心の琴の緒が振動せぬ樣になると說く人もあるが、これも決して左樣な理由はない。櫻は顯花植物中の雙子葉類に屬するもので、其の花は花粉の傳播のために昆蟲を呼び寄せる裝置であると知つても、櫻花の咲き揃ふたのを見て美しいと感ずることはその爲に少しも減ぜぬ。また蝶は昆蟲類の中の鱗翅類に屬し、其の吻は左右の小顎が延びて出來たものであると承知しても、菜の花に遊ぶ蝶を見て愉快に思ふ情はその爲に毫も變らぬ。醫は顏面の某筋肉と某筋肉との空隙へ空氣の壓力により皮膚が陷入つたもの、腰部の形好く丸みを帶びて柔いのは皮下の結組織に脂肪が堆つた故と承知して居る醫學生等も美人を見ればやはり美人に見える通り、凡そ美なるものを見て美と感じ醜なるものを見て醜と感ずることは、其物に關する知識の多少とは餘り直接の關係は無い樣

に思はれる。

抑、美と醜とは何に依つて定めるかと云ふに、其の標準は決して何時でも何所でも同一である譯ではなく、人種により古今により實に種々の相違がある。上唇に大きな孔を穿ち、其の中へ一杯に環を嵌め込み、笑へば其の環が立つて環の中に鼻が見えるのを美しいと思ふ人種もあれば、無理に足を小くして跛を引くのを可愛らしいと喜ぶ國もある。都の人は花も紅葉もない浦の苫屋を見渡して愉快に感じ、常に苫屋の中に住んで居る浦人等は却つて淺草の仲見世を嬉しがる。齒を黑く染めねば人中へ出られぬと思ふた時代もあれば、前髮を突き出して得意然と歩く時代もあつて、美醜の標準は決して常に確定したものではない。また人間は美を形に現はす爲には若い女の裸の像を造るが、若し犬に美を形に現はし得る技量があつたならば、恐らく若い牝犬の像を造り、豚ならば恐らく若い牝豚の像を造るであらう。詰まる所、自然にはたゞ有りの儘があるだけで、自然自身より見れば美もなく、また醜

もない。これを見て美と稱し、醜と稱するのは總べて我の方の働きである。而して今日我等の有する標準を以て公平に自然を測れば、前に述べた通り美なる部分もある代りにまた醜なる部分も隨分多く其の中に含まれてある。

次に假に一歩を讓つて自然を美なりと見做した所で、自然の美なるを感服せしめたならば、其の生徒が必ず自然物を愛する樣になるか否かが疑問であり、また自然物を愛することが果して奬勵すべき程の善いことであるか否かゞ更に疑問である。世間では家を愛し國を愛し人類を愛し宇宙を愛する心を皆同一の心の異つた階段と見做し、愛の範圍の廣いほど尊いものであるかの如くに云ひ囃して居るが、我等の考へは大にこれとは違ふ。家を愛し國を愛する事には生物學上正當の理由が充分にあるが、これに反して宇宙萬物を愛すると云ふに至つては、全く正當な範圍以外へ逼出した本能の錯誤的作用であると思ふ。抑、人間は所謂社會的動物であつて社會を造らずには一日も滿足に生

存は出來ぬが、凡そ團體を造つて生活する動物では多くの團體が相對して生存し各團體が生存競爭の單位と成る故、一團體內の各個體に利他の心がなかつたならば生存は全く覺束ない。斯くの如く利他心は社會的動物の生存に於ける必要條件である故、人間に限らず凡そ社會的の生活を營んで居る動物ならば必ず多少發達して居らぬことはない。蜂や蟻の社會的生活狀態を觀察すれば此事は極めて明である。されば利他心なるものは生存の必要上より社會的動物に生じた本能と見做すべきもので、人類に於ける利他心も素より此理に漏れる譯は無い。所が本能なるものは總べて多少盲目的で屢誤まるものである事は、聊かでも動物の習性を調べた者の充分に知つて居る所である。例へば或る種類の蠅は卵を腐肉の上に生み附けるが、之は孵化した幼蟲が直に充分の食物を得る爲で、種屬維持に取つては甚だ必要な本能である。然るに天南星科の植物には腐肉の如き臭氣を發する花の咲くものがあるが、蠅が其所へ來て往々卵を產み附ける。また草の間を

走り歩く蜘蛛の類は卵の塊を糸で包み恰も繭の如き形に造り、中から幼兒が孵化して出る迄は常に之を携へ保護して居るが、之は幼兒の安全の爲に頗る有益な本能である。然し若し人が試に其繭を奪ひ取り、其代りに紙片を丸めて投げ與へれば直に之を摑まへて繭であるかの如くに大切に保護し、甚しきに至つては鉛の玉を與へてもやはり之を摑まへ、保護する積りで一生懸命に引きずり歩いて居る。斯くの如く本能なるものは屢誤つた方向に向うても盲目的に働き、その爲動物をして往々目的に適はぬ所業をなさしめるものであるが、人類の有する利他心もやはり其通りで生存競爭の單位なる一團體の範圍内で働いて居る間は生存上甚だ有效なものであるが、宇宙萬物を博く愛するまでに其範圍を擴げると、恰も蜘蛛が鉛の玉を大切に保護して居るのと同樣な全く目的に適はぬ所業をする樣に成つてしまふ。强い光を放つ物體を視る時に、網膜上に其像の映じた所だけに光を感ずるのみならず、之に接する周圍の部分も同じく幾分か光を感ずるので光が實際

より大きく見えることを生理學ではIrradiationと名づけるが、我等から見ると自然物を愛すべく感ずるのは單に利他心のIrradiationに過ぎぬ。宇宙萬物を愛することは今日人道の最高程度の如くに思はれて居るが、以上の如き原因に基くもの故、實際はたゞ利他心と云ふ本能の一種の錯誤的作用に外ならぬのである。人類及び自然を虛心平氣に研究すれば從來神聖視し來つたものの實は餘り神聖に非ざることを發見することが屢あるが、我等は其度ごとに認識に達する途中には多くの恥を堪へ通さねばならぬ、此の事がなかつたならば認識の興味も極めて少ないであらう」と云ふたニイチェの言葉を思ひ出すを禁じ得ない。

なほ詳に考へて見るに自己を愛するばかりでは家は治まらず家を愛するばかりでは國が立たぬ故、家を愛し國を愛することは人間の生存上必要であるが、此の心は人間にては決して未だ發達し終つた譯ではなく僅に芽を出し掛けた程度に過ぎぬ。蟻や蜂の如き動物は力を協せて團體のために働くと云ふ本能が充分に發達して居る故、各個體

の生れながらに爲す所業は總べて團體の維持繁榮に適する樣に成つて居るが、人間では此の本能が甚だ不充分であつて、たゞ捨て置いては上下交々利を征めて國が危くなる故、人爲的に之を補はねばならぬ。其ため昔から自己を愛する心を廣げて自己を愛する如くに家を愛せよ、家を愛する如くに國を愛せよと云ふ教が出來て、愛の範圍が廣いほど尊いとの感じが生じたのであらうが、宇宙萬物を愛するを最高の德の如くに思ふのは、此の傾向が盲目的に正當の範圍を超えて、其外までも脫出した結果である。一方へ曲つた棒を眞直に直すには反對の側へ曲げる積りで力を入れねばならぬ如く、極度の利己心に司配せられて居る人間等を教へる爲には其の反對の端まで引く位の積りでなければ丁度適當の所まで來ぬ故、子供や無智の輩に向うては極度の博愛を說くことが必要の場合もあるやも知れぬが、宇宙萬物を愛するまで廣げた博愛はそれ自身のみに就いて云へば全く以上述べた如き性質のもので少しも尊いことはない。

また假に自然物を悉く愛することが善いとした所で、之が實際に行はれ得ることであるか大に疑はしい。我々は衣食住ともに自然物を用ひるの外に道はない故、生活して居る間は常に自然物に迫害を加へざるを得ぬ。家を建てるには樹木を切り倒さねばならず、餓を凌ぐには牛や鳥を打ち殺さねばならず、衣服を造るには蠶の蛹を何萬億となく蒸し殺さねばならぬ、また米を得る爲には無數の浮塵子を塵にせねばならず、單に薔薇の花を賞玩する爲にも數萬の昆蟲を殺戮せねばならぬ。其他日々我々が自然物に加へて居る迫害を數へ擧げたら實に際限はない。凡そ或る自然物が人間に利を與へる場合は總べて其物に向うて迫害を加へて居るのである。また或る自然物が人間に害を與へる場合には力を盡して其物を驅除せねばならぬ。利用厚生と云ふのは取りも直さず自然物に迫害を加へることに當る。此等は如何に自然物を愛する人でも苟くも生活して居る以上は止めることは出來ぬ。鳥獸や魚肉を食はずに精進して居ることは出來るが、其代りと

してやはり他の自然物に迫害を加へざるを得ぬ故、實は五十歩百歩で著しい相違はない。されば自然を美なる如くに說き、自然物を愛する情を生徒に起させ得たればとて、其働き得る範圍は人間に直接の利害の關係のない區域だけに限られる故、頗る狹くて殆ど態々奬勵する程の價もない。牛や豚を以て餓を凌ぐ以上は如何に之を愛したとて、だゞ從來五秒で殺した所を三秒で殺す樣に改良し得るのみで、やはり殺してしまはねばならず、牛馬に荷車を挽かせる以上は、如何に之を愛したとて、だゞ從來七度笞つた所を五度に減じ得るのみでやはり笞つことを止められぬ。人間は自己の利益を捨てて掛らねば此以上に自然物を優遇することは出來ぬ故、自然物を愛すると云うても、實際は單に感情だけに止まり、之を實行の上に現はすことは甚だ覺束ない。我國では牛馬が虐待せられて居るのを往々見受るが、之は最も拙な飼養法で人間に取つて甚だ不利益である故、成るべく速に改良する必要があるが、之は利害損得の上からの論であつて此所に述べる事とは全く問

題が違ふ。我等は素より自然物を無益に虐待するを贊成する譯でもなく、また他人の自然物を愛するのを妨げる考へもない。人間に利害損益の關係のない範圍に於て自然物を優待するのは高尚な慰として甚だ結構であるが、だゞ有りの儘を述べれば以上の通りである故、強いて之を以て博物學教授の一目的とするには足らぬと云ふのみである。

以上述べた如く我等の考へでは、博物學を授けて、生徒をして自然の美を感服せしめ自然物を愛する情を起さしめると云ふことは必要でもなければ、また出來ることでもない。博物學の倫理的價値は決して斯かることを人工的に生徒に說き込むのではなく、生徒をして虛心平氣に人類と自然とを觀察するの習慣を得しめて、人類と自然との有りの儘を知らしめる點にあるが、其の倫理的効力の大なることは僅に自然の美を感じ、一部の自然物を愛する如きと同日の論ではない。凡そ人間に關することを論ずるには先づ人間を知ることが必要である故、自然に於ける人類の位置を知るのは總べての倫理的思想の根本であ

るが之を知るには先づ自然の有りの儘と人間の有りの儘とを知らねばならぬ。而して之を敎へるのが博物學である。されば博物學と倫理學との關係は甚だ親密であるべき筈で、決して從來の如く殆ど知らずに離れて居るべきものではない。眞の倫理學は寧ろ博物學を基として其の上に建つべきものである。

眞善美は常に竝べ稱して人の理想とする所であるが、其の性質を比較すると眞と善美との間には著しい相違がある。前に述べた通り、自然は美でもなく醜でもなく、美も醜も共に其中に含まれてあるが善惡に關しても是と同樣で、自然は善でもなく惡でもない。善惡に就いて詳しく述べることは略するが、善と惡との標準は常に我の方に有つて自然の方にはなく、我々は自己の有する標準に依つて他物を測り其の美醜善惡を評して居るのである。是に反して獨り眞だけは標準が自然の方に有つて我の方にはない。自然自身の有りの儘が卽ち眞の標準であつて我々は唯是を知ることに向うて徐々と進み居るのみであ

る而して眞に向うて進む方法はたゞ虛心平氣に自然を研究するより外にはない。我々の知識は何れの方面に向うても實に僅で、其の境を超えれば全く知らぬことのみ故、中々以て自然の眞、卽ち有りの儘を知ることは出來ぬが、常に怠らず苦心研究すれば漸々一歩づつ眞を知る方面に進むことが出來る。地球の丸いことを知るに至つたのも、其の太陽の周圍を廻轉するを知るに至つたのも、微細な黴菌が種々の病を起すことを知るに至つたのも、皆眞に向うて一歩づつ進んだ結果であるが、科學の求める所は卽ち眞のみである。たとへ一歩づつなりとも眞を知る方面に進みさへすれば、それだけ我々の知識の範圍が廣く成る故、直に之を利用して生存競爭上他に優ることが出來る。博物學に於ても專心たゞ眞を知ることを目的として研究さへすれば、實用上にも學理上にも莫大な利益を得られるのである。されば此學を授けるに當つてもたゞ今日我々の有する知識の程度に從うて自然の眞を紹介し、生徒をして自身に自然に接して其の有りの儘を知らしめること

を目的とすれば宜しい。善と美との標準は時により國により異なることがあるが、眞の標準は永久不變であつて、之に近づくのが卽ち人智の進歩である故、或る目的のために故意に事實を曲げて敎へたればとて其の効能は僅に一時的に過ぎず、一般の人智が進めば忽ち細工が現はれてしまふ。

以上はたゞ所謂自然の美と、自然の愛とに就いて常に考へて居たことの概略を摘んで書いたのである。自然は美なりとか自然物を愛すべしとか云ふ考へは、敎育學者や世間一般の人々のみならず、自然を研究することを專門とする博物學者の間にも甚だ廣く行はれて居る樣であるが、我等は直接に自然を觀察したる結果として、自然は美でも醜でもなく、また自然物を愛しても之を實行し得るのは無益無害の小區域内のみに限られると考へざるを得ぬ故、他と異なつた此の意見を發表するのも或は多少の參考の資とならうかと思うて此所に掲げた次第である。

（明治三十八年三月）

一五　自然界の虚僞

天眞爛漫とも云ひ、「天に僞りは無きものを」とも云うて、天には僞りは無いものと、既に相場が定まつて居る樣であるが、其の天の字を冠らせた天然界は如何にと見渡すと、此所には詐欺、僞りは極めて平常のことで數限りなく行はれて居る。其の最も著しい例は小學校用の讀本にも出て居る故、普通敎育を受けた者なら誰も知つて居るであらう。

動物には自身を他物に似せて敵の攻擊を逃れるものが幾らもある。南洋に產する「木の葉蝶」、内地到る所に產する「桑の枝尺取り」などは其の最も知られた例であるが、「木の葉蝶」は翅の表面の鮮かなるに似ず、其の裏面は全く枯葉の通りで、葉脈に似た斑紋があり、蟲の喰ふた孔の如き所もあり、加ふるに翅の全形が木の葉の形と寸分も違はぬ故、翅を疊んで枝に止ると、たとひ目の前に居ても、眞の枯葉と紛らはしく、到底發見

することは出來ぬ。また「桑の枝尺取り」と云ふのは一種の蛾の幼蟲で、色も形も桑の短かい枝と少しも違はぬ故、この蟲が幹から或る角度をなして立つて居ると、誰が見ても、眞の桑の枝であるとより思はれぬ。百姓が時々之を眞の枝と間違へて、土瓶などを懸けると、素より柔かい蟲のこと故、グニャリと曲り、その爲往々土瓶を破つてしまふことがあるので、此の蟲を一名「土瓶破り」と云ふ地方のあるのは尤もなことである。これ等は決して珍らしい現象ではなく、昆蟲類では極めて普通なことで、蛾の類などには樹の皮に紛らはしい色彩、斑紋を有するものが幾らもある。現在其所に居ながら、恰も居らざる如くに裝うて、敵の攻撃を逃れるのであるから、恰も宅に居ながら、借金取りの攻撃を逃れるために不在を裝ふのと同じで、孰れも紛れのない詐僞である。

また動物には他物に身を似せて餌となるべき動物を引き寄せるものがある。樹の葉の上を徘徊する一種の蜘蛛は身體の色が全く鳥の糞の通りで、足を縮めて靜止して居るときには眞の鳥の糞と區別する

ことが困難である。然しながら若し其所へ蝶が飛んで來て、鳥の糞と誤つて其の上に止まると、蜘蛛は忽ち之を捕へ殺して血を吸うてしまふ。また同じく樹の葉の上に居る蜘蛛に「蟻蜘蛛」と名づける一種があるがこれは身體の形狀も、色の具合も全く蟻の通りで、一見した所では蟻その儘である。蟻は他の昆蟲と同じく六本の足と二本の鬚とを持つて居るが、蜘蛛には八本の足が有るだけで鬚は無い。然して普通の蜘蛛ならば、八本の足で歩く筈の所を、蟻蜘蛛は第二對以下の六本の足で歩き、第一對の足は恰も蟻が鬚を動かす如くに常に動かして居る。斯くして擧動までが蟻に似て居る故、蟻は知らずして其の側へ來り、忽ち此の蜘蛛に喰はれるのである。アンコウと云ふ魚は蝦蟇口に尾を附けた樣な極めて口の大きな魚であるが、其の鼻の邊からは恰も釣竿の如き物が出て、竿の先からは細い絲が垂れ、絲の端は稍太くなつて蟲の如くに見える。アンコウは海の底に靜止し、たゞ釣竿だけを動かすと、近邊に居る小魚等は絲の端の蟲の如き部の動くのを見て近づいて

來る。其の時アンコウは急に大きな口を開いて小魚を丸呑みにしてしまふのである。光線の達せぬ程の深い海の底に住むアンコウの類には絲の端の部が恰も螢の尻の如くに光り、暗夜に提燈を點じた如き有樣で他の小動物を誘ひ寄せるものがある。

他物で自身を蔽ひ隱して敵の攻擊を逃れるものは甚だ多い。海に住む蟹には甲の表面全體に海綿海草などを附着せしめて姿を隱して居る種類が幾らもある。斯かる蟹は靜止して居る間は到底その蟹なることを識別することは出來ぬ。壇の浦で有名な平家蟹などは八本ある足の中の四本を用ひて、蛤の如き貝の空殼を脊負ひ、他の四本で匍うて居る。靜止すると恰も泥の上にたゞ貝の空殼だけが落ちて居る如くに見えて、其所に生きた蟹が居るとは誰も氣が附かぬ。コチ、カレヒの如き魚類は身體の色が海底の砂の色と同じく、且砂に似た模樣があるから海底に横たはつて居ると中々砂と見分け難い。小さい魚などが知らずに近づいて來ると、急に跳ね出して之を捕へる。斯くの如

くに敵の攻擊を逃れるため、若しくは餌を捕へるために身體を隱すことは、人間社會でも頗る廣く行はれて居ることであるが、自身は實際其所に居ながら、他をして自身の居らぬ如くに信ぜしめるのであるから、素より總べて詐欺の範圍内に屬する。

なほ甚だしいのは自身は弱者でありながら、容貌を强者に似せて世を渡らうとする者である。之も昆蟲に其の例が多い。蜂は劍を以て刺す故、昆蟲界では强者であつて、大概の鳥類は之を恐れて啄まない。所が、此の點を利用して蜂と見誤られる爲に色も形も蜂に似せた昆蟲が蜂以外の類に頗る多い。例へば、蛾の中にも全く蜂と紛らはしい樣な種類が幾種もある、甲蟲の中にも頗る蜂に似たものがある。また蟻は一疋づつを取れば必ずしも甚だ强いとは云はれぬが、大きな團體を造つて力を協せて生活するもの故、全體としては頗る有力な昆蟲である。それ故、之に身を似せた昆蟲は甚だ多い。中にはイナゴの類で身體を蟻に似せて居る蟲があるが、其の體の色彩が頗る面白い、蟻は胴

の中程に極めて細い縊れた所があるがイナゴの身體には斯樣な細い部分はない。それ故イナゴが蟻に似る爲には胴の中程の細くなることが必要であるが、實際斯くすれば內部の臟腑の位置から變らねばならず、非常に困難で殆ど到底出來ぬことである。その爲イナゴは色彩で蟻の如くに見える樣に誤魔化して、實際の胴は太い所へ蟻の如き色の細い線が現はれ、横から見ると恰も蟻の如くに胴が縊れて居る樣に見える。また南アメリカの或る地方では一種の蟻が一疋毎に必ず綠色の少さな木の葉を口に啣へ、丸で人間が傘をさして居る如くにして歩るくが、其所には蟻と全く種類の違ふ昆蟲で、頭から背中まで綠色を呈して、木の葉をかざしたまゝの蟻と寸分も違はぬ種類がある。此等は人間に比べたならば、恰も盗賊が制服を着して學校の生徒控所などへ入り込むのと同じで、實に巧な詐欺の方法である。

ゴナイた似に蟻

昆蟲の幼蟲などには自分より強い敵に出遇ふたときに、虛喝を以て

之を追ひ退ける者がある。或る蛾の幼蟲には背の前部に左右二つの大きな著しい蛇の目の斑紋があるが、此の蟲は敵に遇ふと、忽ち體の前部を縮めて太くする。斯くすると、蛇の目の紋が左右列んで前へ向き、全部が恰も假面の如くになり、猿か猫かの顏の如き形を現はす故、大概の鳥類ならば忽ち驚いて逃げてしまふ。之も實際に何の力も無い弱い者が、非常に強き者であるかの如き姿勢を示して敵を欺くのであるから素より一種の詐欺である。

また死んだ眞似をして敵の攻擊を逃れる蟲もある。蜘蛛などは、誰でも自分で試して容易に知り得る如く、少しでも觸れると、早速巢から地上へ落ちて暫時は恰も死んだかの如くに少しも動かずに居る。昆蟲を捕へて食する動物は多くは昆蟲の生きて動いて居る時にのみ之を捕へるもので、蛙の如きも、動かぬ物には一切見向きもせぬ。それ故、蜘蛛なども死んだ眞似をして動かずに居れば多くの敵から免れることが出來る。獸類の中でも小形のものには往々この性質が備はつて

打たれても、蹴られても少しも動かず、敵の全く遠ざかるまでは何時までも全く死んだ如くに裝うて居るものがある。此の方法は「二人の朋友と熊」と云ふエソップ物語の話の中の一人が熊の攻擊を逃れるために用ひたもので、時に臨んでは唯一の有効な方法である。

以上少數の例を擧げて示した如く、詐欺、僞り、他を瞞すと云ふことは自然界には極めて普通なことで、到底算へ盡すことは出來ぬ。少しく詳に調べさへすれば、殆ど到る所に其の例を發見する。海岸へ行つて、浪打ち際の岩石の表面などを見ると、總べての動物が或は砂を被つたり或は色を似せたりなどして、一見岩と紛らはしい樣に裝うて居る。また船に乘つて沖へ出て見ると、海面に浮んで居る動物には、硝子の如くに無色透明で、目の前に居ても慣れぬ人には全く見えぬものが多い。さて斯樣に種々の動物が、詐欺に力を盡して居るのは何の爲であるかと云ふに、これは全く生活のため、自衞のためで、何れも他を食ふため、他に食はれぬために、斯く僞つて居るのである。自然界に於ける野生の

動物の生活を見るに、其の生活、自衞の方法は暴力に依ると詐欺を用ひるとの二つよりない故、この二者は結局同一の目的を達するための異なつた手段と云ふだけで、何れを優れりとも、何れを劣れりとも云ふことの出來ぬ對等のものと見做さざるを得ない。卽ち時と場合と相手とに應じて、或は暴力の方が有效なこともあれば、或は詐欺の方が得策なることもある。彼よりも我の方が力强いときは、暴力に訴へる方が勝負も速く結果も確であるが、我よりも彼の力が勝つて居ることの明な場合には詐欺より外に取るべき手段は無い。また我の力が遙に勝つて居るときにでも、暴力よりも詐欺に依つた方が、勞少くして效の多い場合も勿論あらう。

凡そ自然物を通覽するに同一の目的を達するために二種以上の手段が揃うて完全に發達して居る例は決して無い。好く飛ぶ鳥は足が弱く、好く走る鳥は翅が小さい。巧に游ぐものは樹に登り得ず、巧に枝を渡るものは地に穴を穿ち得ない。角あれば牙なく、鱗あれば髮がな

いと云ふ樣に、必ず一方の手段で或る目的を達し得られる程度までに進んで居るだけで、決して其上に同一の目的のための他の手段が竝び發達すると云ふことは無い。まして梅が香を櫻の花に移し、柳の枝に咲かせると云ふ樣な三方に充分なる如きは到底望まれぬことである。昔から天道は滿つるを虧き、足らざるを補ふと云ふのは此の意味であらう。されば生活自衞の手段なる暴力と詐欺の如きも此の理に洩れず、詐欺の方法の充分に整うて居る動物は概して弱く、また弱い動物が概して詐欺を用ひる。前の例に擧げた如き動物は何れも弱いものばかりで、詐欺に依らなければ到底世に處する途の無いものである。鯨の如き强い者は少しも詐欺を行ふの必要はない。

前の譬へに引いた「二人の朋友と熊」と云ふ話の中にある男は、熊が死んだ物を食はぬことを常から聞き知つて居て、自分の腕力が到底熊に適はぬことも明に知つて居た故、熊に出遇ふたときに死んだ眞似をして危險を逃れたのであるが、假に彼の男が熊よりも數倍も力が强くて、

一掴みに熊を潰し得たと假定したならば、彼は如何に處置したであらうかと考へるに、彼は決して詐欺に依らず暴力の方を採つて用ひたに違ひない。自然界に於ける動物の行爲も之と同樣で、或る動物は暴力に依つて他を食ふ樣に他に食はれぬ樣にと勉め、或る動物は詐欺に依つて他を食ふ樣に他に食はれぬ樣にと勉めて居るのである。これは苟しくも生活して居る以上は止むを得ぬことで、如何なる動物と雖も、其の生命を保たんとする以上は、暴力か詐欺かの中、何れか一を採るの外はない。されば虛心平氣に自然界を見渡せば詐欺は暴力と相竝んで生活自衞に必要な手段として存するので、野生の動物が常に其の中の何れかを用ひて居るのは素より當然のことである。

斯く論じて見ると暴力と詐欺との行はれぬ所は無い如くに聞えるが、實際に於ては天然界の中には暴力と詐欺との行はれぬ所がある。それは完結した團體生活をなす動物の同一團體內に於てゞある。斯かる動物では生存競爭の單位は團體であつて、團體と團體とが相對し

て爭うて居るのである故、同一團體内の各個體間に暴力や詐欺が行はれる樣では、其の團體は團體としての力が甚だ弱くなつて、到底敵なる團體に打ち勝つことは出來ぬ。團體生活をなす動物では生存競爭の結果、適する團體は益繁榮し、適せぬ團體は次第に滅び失せ、自然淘汰が行はれて團體を勝たしめた性質は一代毎に進歩し、終には同一團體内の個體間には少しも暴力と詐欺とが行はれず、總べての個體が力を協せて、外に向うて暴力若しくは詐欺を逞ふすることの出來る程度まで に達する。蟻や蜂は今日已に斯樣な階段に達して居るのである。要するに團體生活を營む動物にあつては、團體内の個體間に於ける暴力と詐欺との使用を抑壓するのは生存上最も必要な條件で、此の點で他に劣つたものは到底生存の望みは無い。斯かる動物の競爭は一面此の點で競爭して居るのである。生存競爭の單位なる一團體内に於て、個體間の暴力及び詐欺を抑壓することが幾分かでも弛んだならば、其の團體の前途は頗る危いものと云はなければならぬ。

以上述べた所を約言すれば、詐欺、僞りは暴力と共に自然界に最も廣く行はれて居ることで、それ自身のみに就いて云へば、單に生活自衞の一手段に過ぎず、善惡の二字を以て批評すべき範圍以外に位する。ただ團體生活をなす動物では、生存競爭の單位なる一團體の内で個體間に詐欺暴力の行はれることは、其の團體の維持繁榮のために頗る有害である故、若し或る團體動物が他に負けぬ樣に長く生存して勢力を發展させやうと思へば、適宜の方法によつて出來るだけ個體間の詐欺、暴力を抑壓することが何よりも先に必要である。右は動物界全部を廣く比較しての論であるが、最高等の動物のみに當て嵌めても理窟は全く同樣であらう。

（明治三十九年十一月）

一六　動物の私有財産

人間社會では財産は極めて大切なもので、殆ど生命に次で貴重なものと云うて宜しい。財産の無い者は些細なことさへも容易には出來ぬが、財産のある者は勝手次第なことを爲して毫も憚らない。獨逸語で財産のことを Vermögen（爲し得る）と名づけるのは全く此故であらう。試に Ein Mann ohne Vermögen（財産なき男）と書けば「爲し得るなき男」とも飜譯することが出來るが、斯くては最早人間一人前の資格は無い者と見做さねばならぬ。また治るべき病も財産の無いために治し得ぬこともあり、借金の返せぬために首を縊る男もあつて、生命が貴いか財産が貴いか判然せぬ如き場合さへ頗る屢、ある。財産なるものは人間社會では斯くまで重要なものであるが、さて他の動物では如何、他の動物では財産は如何に保護せられ、如何に蓄積せられるか、財産は何の役に

用ひられ、また何代目まで相續せられるか。人間と他の動物との財産制度を比較して見ると、如何なる點までは互に相一致し、如何なる點に於て相異なるか。また其ため人間社會には如何なる結果が生じたか。我らが今此所に聊か述べやうと思ふのは上の如き諸問題に就てである。

抑、私有財産とは天地間に存在する物の中から、自身一己の用に供するために、其の一部を區劃して占領したもので、他に奪ひ取られぬためには、常にこれを完全に保護し得ることが必要である。如何に自身一己のために用ひる積りであつても、自身に之を護ることの出來ぬもの、又相互の間に各自の所有權を尊重すべしと云ふ約束の成立つて居らぬ場合の如きは、決して之を私有財産と名づけることは出來ぬ。されば動物にも私有財産を有するものと、有せざるものとあるは勿論のことで菜の青葉を喰うて居る芋蟲の如きは、決して其の喰ひつゝある一枚の葉を所有して居るとは云はれぬ。何故と云ふに、他の芋蟲が匍う

て來て、之を喰ひ始めても、防ぐ方法が無いからである。然しながら動物の中には斯くの如き無財産のもの許りではない、廣く全動物界を見渡せば慥に財産を有する種屬も隨分澤山にある。簡單な例を擧げて見るに、一時に多量の人參を猿に與へると、猿は最初の間は實際之を咀嚼して嚥み込んでしまふが、一通り腹が張つてから後は、たゞ之を口の中に蓄へ、兩側の頰を風船玉の如くに膨らして、詰め込み得るだけ其の中へ詰め込む。斯く猿の頰嚢の中に詰め込まれた人參は、天地間に存在する物の一部を區劃して其猿が專有して居るのであつて、頰の中に完全に保護せられてあるから、他の猿は如何に欲しくても之を奪ひ取ることは出來ず、然して所有者なる猿は何時でも隨意に之を食ふことが出來るのである故、これは純然たる私有財産である。また犬が牛の骨を嚙つて居るとき急に主人が呼ぶと、喰ひ掛の骨を先づ自分の住む箱の藁の下に隱し、それから急いで主人の居る方へ走つて行くのを見掛けることが往々あるが、斯かる場合には此骨は藁の下に隱されてあ

るため他の者に奪ひ去られる患はなく、然も所有者なる犬は歸り次第再び之を嚙ることが出來るのであるから、之も慥に私有財産と見做して宜しい。私有財産は總べて保護を要するが、動物が各自之を保護するには、常に自身に之を携へて歩くか、又は一定の安全な場所に貯へて置くかの二法よりない。それ故、私有財産を有する動物には、猿の如くに之を己れの身體の一部に詰め込んで居るものと、犬の如くに己れの巣の中に隱して置くものとがある。以下この二種類に就て各々若干の例を擧げて見やう。

猿の頰にある人參や、犬の寢床の下にある骨を私有財産と呼ぶことは、如何にも業々しい樣で、常に某の財産は何千萬圓あるとか、某の身代は幾百萬圓あるとか云ふことのみを聞き慣れて居る讀者の耳には、殆ど滑稽に聞えるやも知れぬ。然しながら、凡そ、物の眞の性質を知らんとするには、先づ其の最も簡單な形を取つて研究することが必要である。斯くしてこそ、始めて物の本來の性質と、其の進歩するに伴ひ漸々

附け加はつてこれを複雜ならしめた部分との關係も知れ、隨つて全部を誤なく了解し得るに至るのである。畫工が人物を畫くに當つても、先づ裸體の像で充分に腕を磨いて置かぬと、衣裳を着けた姿が滿足に畫けぬのは、卽ちこれと同樣な理窟であらう。今此所に述べんとする動物の私有財產のことは、恰も財產制度の裸體畫とも云ふべきもの故、現代人類の財產制度の眞意義を調べるに當つては、先づこれと比較して見ることが最も必要である。斯くしてこそ始めて現代の財產制度の缺陷の範圍、程度も明瞭になり、其の缺陷の因つて起る原因も慥に知れ、其の結果として之を改める適切な方法をも案出することが出來る樣に成るであらう。

さて猿の如くに財產を自己の身體の一部の內に貯へる動物は、如何なるものが有るかと云ふに、其の種類は頗る多い。外國に產する鼠の類には、猿と同じく兩側の頰の中に穀物を詰め込むものがあるが、或る鼠では頰の囊が非常に發達して、頸の所を通り越し肩の邊まで達して

居る。斯かる種類では、食物を探し歩いて居る道で、折よく多量の穀物を發見した場合には、腹一杯に食ふた外になほ數日分の食料を頰の囊の中へ詰め込んで置くことが出來る。次に鳩の如き鳥類では、頰に囊の無い代りに、食道の途中に大きな囊があつて、多量の豆に出遇ふたときは、先づ此囊に一杯になるまで詰め込んで置き、腹の減るに隨うて順次その一部分づつを胃に送つて消化する。此囊は鳩の胸の前部にあつて、俗に餌囊と名づけるものであるが、切り開いて見ると澤山の豆が少しも變化せず其儘に貯藏せられてあるのを發見する。餌囊は頰囊に比べて單に位置が少しく下つただけで其他には何の相違もない故、猿の頰囊の中の人參を私有財產と見做す以上は、鳩の餌囊の中の豆をも無論之と同じく私有財產と見做さねばならぬ。また牛や羊の類では、食道の下端に當る所が胃に附屬して特に大きな囊となり、一度に多量の牧草を其中に貯へることが出來るが、之は元來、廣い野原で悠々と草の葉を咀嚼して居ては、猛獸の襲擊に遇ふ虞が多い故、先づ成るべく

短い時の間に成るべく多量の食物を取り込み、兎も角も其の所有權を確實にして置いて、然る後に安全な場所で緩々と之を咀嚼し得るための裝置である。上野動物園に飼うてあるアメリカ駱駝と云ふ獸などは、頸が極めて細長い故、此嚢の中に貯へられてある財産が時々一塊づつ食道を逆行して、再び口に出る具合が外から明に見える。此等はたゞ財産を貯蓄する嚢が鳩に比べると、更に一層身體の奥に移つたと云ふまでゝある。またアジヤ、アフリカの沙漠地方に住む普通の駱駝は、沙漠の船と云ふ異名をさへ附けられた重寶な獸で、胃の周圍には多數の小嚢が附いてあつて、水の澤山あるとき充分にその中へ貯へ込んで置く故、一回水を飲めば能く十日以上も渴に堪へることが出來る。隊を組んで沙漠を旅行する商人等が道に迷うて渴に迫つたときは、其の連れて來た駱駝を殺して腹の中にある水を飲み、僅に死を免れることは讀本などにも出て居る話であるが、斯かる場合に臨んでは一杯の水も實に千金萬金にも代へ難い貴重なもので、其の貴重なることが禍を

なして、駱駝は人間の暴力により、其の私有財産を生命と共に奪ひ取られるのである。更に下等な動物から例を取ると、蛭などは體の内部は殆ど私有財産の貯藏のみに用ひられると云ふべき程で、一度充分に血を吸ひ溜めて置けば、裕に一年間は之に依つて生活して居ることが出來る。

次に體外に私有財産を有する動物の例を擧げると、先づ畑に住んで麥作に大害を及ぼす畑鼠などが最も適例であらう。此の鼠は畑の畝道の土中に孔を掘つて巣となし、麥の穗を嚙み切つては巣に運んで、段々多く貯蓄して置き、必要に應じて之を食料に充てる。元來身體内に財産を貯へる動物では、財産を貯蓄すべき場所に狹い制限があつて、到底多額の財産を蓄積する譯には行かぬが、體外に財産を貯へる動物では斯樣な窮窟な制限がない故、獲る道さへあらば、如何程でも財産を溜めることが出來る。それ故、此の鼠などは麥作を害することが實に夥しいもので、先年茨城縣に此の鼠の繁殖した時の如きは、其の地方に大

恐惶を來し、毒團子を撒布するやら、鼠の傳染病の黴菌を蒔くやら、非常な騷ぎをした。又モグラの如きは常に土中に複雜な形の巣を造り、澤山の蚯蚓を捕へ來つて其中へ蓄へて置くが、蚯蚓を生きたまゝで置けば匍うて逃げ去る虞があり、殺して置けば逃げぬ代に腐敗する心配がある故モグラは蚯蚓の頭の先端の所だけを嚙み切り、匍ひ出せぬ樣にして、捕虜として蓄へ置くのである。此等は誰が見ても慥に立派な私有財産である。其他にも凡そ動物が一定の場所を定めて、自身の取つて來た物を蓄へて置く場合には、總べて私有財産と見做すべきである故、その例を數へ上げたら限りは無い。モヅが蛙やイナゴを捕へて食ひ、餘つたものを尖つた樹の枝などに刺して磔として置くことは、普く人の知つて居る所であるが、海邊に住むミサゴといふ一種の鷹は常に魚類を捕へ食ひ餘つたものは之を海岸の岩石の水溜りの中に漬けて蓄めて置く。俗にミサゴ鮓と名づけるのは之である。此等は貯蓄者の保護が行き屆かぬ故、嚴重な意味では私有財産とは云はれぬが、然も

善く似た性質のものである。

なほ動物が其の財産を入れて置く巣自身も、私有財産と見做すべきものである。單に地面に孔を穿つたり、岩の下に潜んだりして住んで居る動物の巣は財産とは名づけ兼ねるが、小鳥類の如くに、苦心して材料を集め、丁寧に細工を施して造り上げた巣は、正に一の私有財産であつて、若し他の鳥が之に近づけば所有主は極力これを排して、決して讓る如きことはせぬ。特に鴉の如きは、多數相近き所に巣を營んで居る場合には、同僚の所有權を尊重すべしと云ふ規約が自然に成立して、萬一他の鴉の巣から材料を盜んで自分の巣を造るに用ひる樣な者がある場合には、周圍の者が寄り集まつて忽ち罪鴉を啄き殺してしまふ。鴉社會の秩序は斯かる峻嚴なる制裁によつて常に保たれて居るのであるが、之を見ても、或る動物の社會には私有財産と云ふ觀念が明白に存することが知れる。

以上述べた如き例は何れも所有主自身の直接の用に供するためか、

若しくは其の一部を割いて子を養ふ爲に用ひる財産であるが、なほ其他に貯蓄者自身に取つては何の役にも立たず、全く子の爲にのみ有用な財産を造る場合がある。例へば蜂の中で似我蜂（ジガバチ）と名ける種類の如きは、日々遠方まで飛び廻つて蜘蛛、其他の小蟲を探し集め、之を巣に持ち歸り、卵一粒毎に若干宛を添へて置くが、斯くして置けば、たとひ親は死んでしまうても、卵から孵つた幼蟲は直に傍に備へ附けられてあつた食料を喰うて速に成長することが出來る。昔の人は觀察が粗漏であつた故、此蜂が斯く蜘蛛などを捕へて巣の中へ運び入れて置くのを見て、之は蜂が蜘蛛を養うて自分の子とし、我に似よと命じて巣の中に入れて置くと、終に化して蜂と成つて、養親の跡を繼ぐのであらうなどと想像を逞うして、似我蜂と云ふ名前を附けたのである。此の場合親が苦勞して造つた財産は其のまゝ子に讓られ、子は其の御蔭によつて安樂に成長し、終に獨立生活を爲し得る程度までに發達するのである。また鷄などは似我蜂の如くに特に餌となるべき蟲を卵の傍に添へて

は置かぬが、其代り親鳥が自身に多くの餌を食して、其中の滋養分だけを漉し取つて、卵の中へ込めて產むのであるから、之を似我蜂に比べると一は粗製の儘の滋養物、一は精製したる滋養物を子に供給するのであつて、其間の相違は、恰も潰餡と漉餡との相違に過ぎぬ。されば斯くの變形と見做すことが出來る。

今まで述べた僅少の例に依つても明に知れる通り、動物には私有財產を有するものが頗る多くあり、且つ私有財產は親より子に讓られ得るものであるが、動物の種類の數は百万以上もあること故、其中から私有財產を有する動物の例を求めたならば殆ど際限はない。然しながら普通に人の知らぬ樣な動物の名を數多く竝べ揭げるのは、單に讀者の倦怠を促すに過ぎぬ故、他の例を擧げることは全く省略して、之よりは人間と他の動物との財產制度を比較して其の異同の點を述べ、併せて其の得失、優劣を論じて見やう。

第一、私有財産を獲んとするため、相互の間に劇しき競爭の起るを免かれぬは、人間でも他の動物でも全く同樣である。此點に就ては人間と他の動物との間に毫も相違は無い。人間が私有財産を獲んとして日夜瞞し合ひ、擲き合ひ、罵り合ひ、殺し合うて居ることは今日の世の中の常態で、誰も目前に見て居る事實であるが、他の動物とても理窟は少しも違はぬ。例へば一定量の人參のある所へ猿が集まつて來たとすれば、猿は各自分の腹を充分に滿たした上に、なほ頰の嚢へも一杯に詰め込まうとするから、勢ひ人參の取り合ひのために劇しい爭が起らざるを得ない。世の中には、今日生存のために人々が競爭するのは社會の制度が不完全なる故である。社會の制度を改良さへすれば、競爭の必要が無くなるなどと唱へて、生存競爭の無い世の中を夢想して居る人も有るが、これは全く人間本來の性質を誤解した爲に起る謬りで、素より毫も根據の無い空論に過ぎぬ。人間の性質として、彼れの欲する物を我が持つか、我の欲するものを彼が持つかすれば、忽ち爭ひの起る

は當然のことで、この事は三歳四歳の子供等に數種の玩具を分ち與へても明に知れるが、生れながらにして斯かる性質を備へた人間が、多數相集まつて生活して居るのであるから、社會の制度ばかりを如何に改めたりとて、爭ひの絶える望は到底無い。その上「金持と灰吹とは溜まるほど汚ない」と云ふ諺の通り、人間の慾には決して際限が無い故、恰も無限大の頰嚢を有する猿の如くで、其間の爭ひの劇しく且つ長かるべきは素より覺悟しなければならぬ。動物の中には蜂、蟻の如く、若しくは苔蟲の如く、一團體內の個體間に少しも爭ひの無いものがあるが、此等の動物は夫々一定の進化の順路を經て、今日の有樣までに發達し來つたのである故、今の人間が一足飛に其の眞似を爲やうと望むのは、誠に無理な註文である。

次に私有財産の不平等なること、及び其の不平等ならざる可からざる理由も、人間と他の動物との間に少しも相違はない。同じモグラ同志の間にも嗅感の鋭い土を掘ることの巧な者もあれば、また嗅感の稍

鈍い、土を掘ることの稍、拙な者もあらうが、此等が同一の蚯蚓を追ふに當つては、前者が先づこれを捕へて己れの財産に加へ、後者はたゞ無益な勞働をしたのみで毫も獲る所の無かるべきは當然である。また一疋のモグラが終日働いて蚯蚓を捕へて歩く間に、他の一疋が怠けて巣の内に寢て居たならば、此の二者の間には、收入に多大の差異の生ずるは勿論のことである。また一疋のモグラが左に向うて穴を穿ち偶然多數の蚯蚓を掘り當てたに反し、他の一疋は右に向うて穴を穿つた爲に不幸にも終に一疋の蚯蚓にも出遇はぬと云ふ如き場合も往々あらう。斯くの如く動物の私有財産なるものは、各自生來の體質の優劣によつても、また各自日々の勤惰によつても、また偶然の運不運によつても、不平等ならざるべからざる理由は明白である。人間も此の規則に漏れず、體質の優れた者勤勉なる者、運のよき者が、體質の劣つた者、怠惰なる者、運の悪き者に比して一層多くの財産を蓄積し使用すべきは素より理の當然で、萬人が萬人悉く財産を平等にすると云ふ如きは、到底

出來ぬことである。世の中には不平等な私有財産の制を全く廢して財産を總べて共有とし、頭割りだけづつ平均に之を使用することを理想として居る人もあるが、これは現實の世には行はる可からざる一種の夢に過ぎぬ。人間は社會的動物であつて、社會を離れては一日も滿足に生活が出來ぬことは誰も知る所であるが、蜂、蟻、若しくは苔蟲の如き完結した社會生活を營む動物に比較して見ると、其社會性は至つて低度なもので、到底彼等の如き純然たる團體生活を營むには適しない。入り込みの座敷で食事をする際に衝立を以て境を造るのを見ても、借家を二軒竝べて建てれば、必ず其間に目隱しと稱する板塀を造るのを見ても、また新に邸宅を構へた人が、其の周圍に監獄然たる煉瓦の壁を環らして外界との連絡を絶つのを見ても、人間には相互に排斥する本能の著しく存して居ることが知れるが、斯かる根性が生れながらに存する間は、財産を全く共有にする如きことは頗る覺束ない。

次に私有財産は何代目まで讓られるかと云ふと、此點に就ては人間

と他の動物との間には著しい相違がある。私有財産を子に讓る動物のあることは前にも述べたが、斯かる動物では財産はたゞ子の代まで傳はるだけで、決して其先の孫や曾孫の代までには及ばぬ。然して子に傳はると云うても、單に子が一通り成長して生存競爭場裡に打つて出られる樣に成るまでの間、之を養ふの用をなすのみで、決して子が一生涯その恩澤を蒙つて安逸に暮すと云ふ如きことは無い。動物では親が子の世話をするのは、子が成長し終るまでの間に限られて居て、其の以上まで保護する如きことは決して爲ないのである。それ故、動物では生存のための競爭が至つて公平で、筋肉神經等の優つた者と、筋肉神經等の劣つた者とが競爭する場合には、前者は必ず勝ち、後者は必ず敗ける。先祖より讓られた財産に依つて神經筋肉共に劣つた者が驕り、榮え、神經筋肉ともに優つた者が、其のため苦しめ虐げられると云ふ樣な不條理極まることは、他の動物では決して見ることは出來ぬ。五尺の身體が完全に發達し終つてからも、なほ親の脛を囓つて安逸に世

を渡る息子、祖父の造つた身代を受け繼ぎながら道樂を盡して、終に賣家と唐樣で書く孫などは、實に人間社會の特産物である。

なほ人間社會にのみ存して、他の動物には決して無い特殊の財産制度は、物を貸して利子を取ることである。之は人間と他の動物との財産制度の絶對的に相違する點で、根本から全く異なつて居る故、動物界には之に比較すべき何等のものもない。或る雜誌に、或る時或る所で學者連が集まつて「人とは何ぞや」と云ふ問題を論じて居た際に、其所に居合せた甲法學博士が「人とは借金を拂ふ動物なり」と云ふた所が、側に居た乙法學博士が「否、人は借金の利子を拂ふ動物なり」と云ふたので一座哄笑したと云ふ逸話が載せてあつたが、實に利子を拂ふたり取つたりする動物は、人間以外には一種もない。隨つて他の動物には金貸し、地主、資本家などの如き、懷手をしながら贅澤に暮す階級は決して見出すことは出來ぬ。人間社會では一度或る手段に依つて、一定額の財産を造つて置きさへすれば、自分の一代は素より未來永劫幾百代の末ま

でも働かずに食うて行くことが出來て、なほ其の上に財産が追々殖えると云ふことを、他の動物等が聞き知つたならば、如何に不可思議に感ずるであらうか。或る數から或る數を減ずれば、其の殘りは原の額よりは少ないと云ふ數學上の明白な原理に反して、遣うても遣うても少しも減らぬのみか、なほ其の上に增加して行くとは、實に天地間にこれほど不思議なことは無いであらう。

さて以上述べた通り、人間と他の動物との財産制度上の相違の點は主として、子孫が親の遺産の恩澤に浴する程度の相違と、物を貸して利子を取る制度の有無との二つである。然も若し利子を取ると云ふ制度が無かつたならば、如何に刻苦勉勵しても今日の富豪の有する如き莫大の財産を一代に造ることは到底不可能で、たとひ巨萬の財産を積み得たとしても、子孫が働かずに喰ひ減らせば忽ち消滅する故、數代も數十代も後の子孫までが、懶手で贅澤に暮せると云ふことは無いから、人間と他の動物との財産制度上の相違は、詰まる所、利子を取るか取らぬかと云ふ一點に歸するのである。

抑、物を貸して利子を取ると云ふ制度が何故に人間社會にのみあつて、他の動物には全く無いかと云ふに、これは動物は何を爲すにも單に手足の如き身體の部分を用ひるのみなるに反し、人間は總べて道具を用ひるに基因する事である。人間は實に「道具を用ひる動物」と云ふ定義を下しても宜しい程で、汽車、汽船の如き大きな道具は暫く措き、口へ飯を入れるにも箸を用ひ、脊中の痒い所を搔くにも「孫の手」と名づける道具を用ひるが、他の動物ではたゞ猿が石を用ひて胡桃を割るとか、象が樹の枝を用ひて蠅を追ふとか云ふ如き僅少の例外を除けば、道具を用ひるものは皆無である。然して人間が道具を用ひる以上は、人と道具との二者が揃うて初めて、仕事が出來るのである故、若し一人が他人より道具を借りて或る物を收穫し得た場合には、之に對して相應の報酬を贈るは當然のことと思はれる。例へば甲が乙より釣竿を借りて若干の魚を釣り獲たならば、その中何疋かを釣竿を借りた禮として贈

るであらうが、之が卽ち釣竿なる財産に對する利子である。斯くの如き次第である故、物を貸して利子を得ると云ふ制度は、其の最も簡單なる場合に就いて論ずると、全く理に適ふたことで、毫も非難すべき點がない樣に見える。

然しながら此の制度を何所までも際限なく許容したならば、如何なる結果を生ずるであらうかと云ふに、之は現今の世の有樣が證明して餘りある如く、貧富の懸隔が年と共に益甚だしく成つて、富者は遊んで贅澤に暮しても、益富が增し、貧者は如何に日夜苦しんで働いても貧苦の境を脫し得られぬと云ふ不條理極まる狀態に陷るのである。富者の今日受取つた利子は明日からは基金に加へられ、之に對してまた利子が附いて、增加の率が始終進んで行く故、恰も物體が地面に向うて落ち來るときに、一秒每に速力を增加する如くに、忽ち驚くべき巨額に達する。戰亂の絕間なき騷動時代や、專制政治の行はれた半開時代などには、人の生命にも財産にも確な保障が無い故、到底一人が巨萬の富を

私するに至り難い事情があるが、段々世が進んで憲法も出來、生命財産ともに稍安全となり、如何に巨萬の富を積んでも、法律に依つて保護せられる樣に成つてからは、一旦何等かの方法に從つて富を造つたものは益財産が增加する許りである。此の事は米國などの有樣を見ればは極めて明白に知れる。然して一人を富豪ならしめるためには、數百萬人が其の犧牲となつて、貧苦に陷らねばならぬことは計算上明らかな理である故、一方に少數の者が巨萬の富を積む間には、他方に於ては幾千萬の人間は漸々貧困となり、餓に迫られては段々安い給金にも甘んじて、牛馬の如くに勞働せざるを得ず、終には露命を繫ぐことさへ容易でなくなる。斯かる狀態の世の中は、之を他物に譬へて云へば、恰も贅澤美麗を盡した重い馬車に少數の客を乘せ、數百千人の者が馬の代りに之を挽いたり、押したりして坂路を昇つて行く樣なものである。

現時の世の中は略斯かる有樣である故、これに對して不滿の聲の聞えるのは當然のことで、毫も怪しむには足らぬ。車を挽くものが車上

の客を眺めて、彼も人なり、我も人なり、特に我の方が筋力も知識も彼に比しては遙に優等である。然るに彼は斯く安樂に贅澤に暮し、我は斯く喘ぎ苦しまなければならぬのは如何なる理由に由るかと考へ出しては、一刻も不平なき譯には行かぬ。それ故、今日何れの文明國にも斯かる議論の起らぬ所はない。虛無黨と云ひ、社會黨と云ひアナーキストと云ひイルレデンタと云ひ、名稱も種々で理想とする所も樣々ではあるが、現代に對する堪へ難き不滿の念が凝り固まつて、終に表面に現はれたものなる事だけは同じである。

不滿の念が蔓り、罪惡が殖え、風俗が墮落するのを救濟するには、如何なる手段を取るべきかとは、世を憂ふる人の頗る苦心して居る問題であるが、此の問題に答へるには、先づ其の因つて起る原因まで溯らねばならぬ。我等の考へに依ると、此の原因は二つあつて、一は慾が限りなく深くて、他人の迷惑は毫も顧みぬと云ふ人間生來の性質、一は現今の社會の制度に無理な點があることである。前者の方は人間が持つて

生れる性質であつて、之を根本的に削除することは素より不可能である故、ただ單に瞞したり、脅したり、煽てたり、罰したりして制禦して置く外に道は無いが、之を爲すに當つて社會制度に無理な點があると大なる妨げを受ける。「地獄の沙汰も金次第」と云ふ諺さへある世の中に、貧富の懸隔が甚しくなつて、金の有り餘る富豪と、金のためには如何なる恥をも忍ぶ貧民とが相竝んで住めば、富者が惡事をしても金の威光で罰せられず、不正な事をしても金の權力で制裁を免れる如き場合が屢生ずるが、惡事が罰を受けず、不正な事が制裁を免れる實例を屢眼の前に見ると、惡を惡と感ずる世の人の心が次第に鈍り、終には惡を左まで惡と思はぬ樣になり、之を爲さぬ者を却つて馬鹿正直なる如くに考へるに至る。また二宮尊德などを擔ぎ出して、富は勤儉貯蓄に依つて獲られるものなる事を說き聞かせても、寢ながら巨額の收入を獲る者の實例が眼の前にある以上は、人間の弱點として、やはり濡手で粟の一攫千金を夢みる樣になるのも據ないことで、終には實着な勸業を旨とす

る博覽會でさへ、福引でなければ客が集まらぬ如き卑しい風俗が生ずるのである。

人口が增加すれば、生活の困難が增し、生活難が烈しくなれば、貧富の懸隔に對する不平の念が增進する。また列國と對立して行くには教育を盛にしなければならぬが、教育が進めば、不平を感ずる力も段々鋭敏になる。書物が讀めて飯が食へぬ人が一人でも多く增せば、それだけ現代に對する不滿の聲の高くなるのは、何所の國でも同一轍である。されば今日の儘の制度では、如何にしても現代に對する不平不滿の念を除くことが出來ぬのみならず、其の益、增加するのを傍觀して居なければならぬ。人間は之を防ぐ爲に倫理、教育、宗教等の各方面から世俗を改善しやうと務めるであらうが、上述の如き原因が存する以上は其の効力は勢ひ一定の範圍内に限られて、到底充分の効を奏することは出來ぬ。世は澆季なりとは昔より今まで常に人の云ふことであるが、世の常に澆季なるは、恰も黴菌が自己の繁殖のために生じた酸類のた

めに苦しむ如くに、自己の發達に伴うて生じた固有の制度のために苦しんで居るのに當る故、先づ免れ難い運命とでも思うて諦めるの外は無からう。

(明治四十年七月)

一七　所謂「文明の弊」の源

近頃の新聞や雜誌には文明の弊を論じたものが大分見える。物質的文明が進んだために世道が廢頽したとか、二十世紀の文明は人をして野獸たらしめざれば止まぬとか云うて、何れも今日の人心の墮落を以て、文明の進んだために生じた直接の結果である如くに見做して居るが、之に反對した議論が一つも出ぬ所を見ると、恐らく斯かる考へは新聞や雜誌に筆を執る人々の間に一般に存するものと思はれる。我等の見る所は大に之と異なる故、試に其の大要を此所に述べて見やう。若しも、それが眞に世を憂ふる人々の參考ともならば甚だ仕合せである。

現今世道の頽れ人心の墮落して居ることは目前の慥な事實で、我國の將來を考へると實に憂慮に堪へぬ次第である。世道とか人心とか、

品性とか人格とか云ふ議論の喧しいのは、皆世の墮落して居る證據で、誠に情ないことではあるが、また一面には此の墮落を憂ふる人のなほ多少世に存する徵と見做せば、聊か心强い如き感じも生ずる。然しながら凡そ一の弊を改めやうとするには、先づ其の因て起る眞の原因を究めて、之を除くことを圖らねばならぬ。若しも其の原因を究めることを忽にし、眞の原因でもないものを原因であるかの如くに思ひ誤り、之を基として矯正の方法を講ずる如きことが有つたならば、其の結果はたゞ世を益せぬのみならず、或は民族發展の上に取り返しの附かぬ妨害を生ずることが無いとも限らぬ。

今日多數の論者が、人心の墮落を以て物質的文明の進んだ結果と見做す理由は何であるかと尋ねると、單に我國では維新以後、物質的文明の進歩したと同時に人心も墮落したと云ふだけに止まつて、たゞ時が相重なり合うて居ると云ふのに過ぎぬ。同時に起る事柄の中には、互に原因結果の關係のあるものもあれば、また斯かる關係の全く無いも

のもあるは明なこと故、單に同時に起つたと云ふ理由だけで、一を原因と見做し一を結果と見做すのは頗る輕卒な議論である。物質的文明の進歩を以て人心墮落の原因と見做すのは、卽ち斯かる輕卒な皮相的の觀察である故、我らは到底之を承認することは出來ぬ。特に我國の如き、維新以來西洋の文明を急いで輸入することを務めたとは云へ、未だ顯微鏡一つ滿足には造られず、茶や生絹の如き天產物を輸出して機械其他の人造品を輸入し、首府に下水の設備さへ行屆いて居ない所で、物質的文明が進歩して居るとは如何にも云ひ難いことであり、また維新以前とても今日と同樣に賄賂も行はれ、淫風も盛であつて、人心は已に相應に墮落して居たのであるから、今頃になつて、急に思ひ付いたかの如くに文明の弊を論ずるのは愈、取るに足らぬことである。眞に今日の墮落を救はんと志す人は、更に一層深く且つ緻密に研究して、終極の原因まで探り求め、根本より改めることを圖らねばならぬ。

然らば所謂文明の弊なるものの眞の原因は何に存するかと云ふに、

我等の考へに依れば主として社會の制度、特に財產に關する制度に缺點があるに因るのである。元來人間には他人の迷惑は少しも顧みぬと云ふ性質が、生れながらに備はつて居るもので、汽車の客車內で長く横に臥ながら後から入り來つた人に座席を與へぬ如き、立食の宴會の席で、他人を押しのけ突き倒し、前に居る人の肩の上からフォークを持つた手を延ばして僅ばかりの肉を取らんとする如きは、其の最も手近な例であるが、之に類することは誰も自身に經驗のあること故、態々揭げるにも及ばぬ。斯かる根性を持つた人間が集まつて社會をなして居るのであるから到底、蟻や蜂の如き完全な社會が成り立つ理窟はない。道德も法律も皆人間に斯かる性質が備はつて居るために必要であり、警察や裁判所の繁昌するのも皆人間に斯かる性質が備はつて居るからである。若しも人間に聊かでも生れながらにして他人の迷惑を顧みて己の欲せざる所を他人に施さぬと云ふ性質が備はつてあつたならば、蟻や蜂の社會と同樣な眞に協力一致して毫も爭のない社會

が出來るであらうが、蟻や蜂の社會の斯く完全であるのは長い年月を歷て多くの代を重ねる間に、自然淘汰の行はれた結果として、漸々發達し來つたのである故、今日の人間が俄に斯かる境遇に達しやうと思ふても、之は到底出來ぬことである。禮儀作法によつて、少數の人々の間に恰も互の迷惑を顧慮する如き體裁を粧ふことは或は出來るでもあらうが、先祖代々遺傳し來つた腦髓を練り直して、急に本來の性質を改めることは到底不可能である故、先づ當分の間は、他人の迷惑を顧みぬと云ふ人間の性質は直らぬものと見做して置くの外に致し方はない。畢竟人心が墮落したとか、世道が廢頽したとか云ふのは、たゞ人間の此の性質を表面に現はす程度が、從來よりも尙一層劇しく成つて來たと云ふに過ぎぬ。今日まで人間が、他人の迷惑を顧みぬと云ふ本來の性質を或る程度まで押さへ隱して現さぬのは、全く社會の制度に基づくこと故、若し社會の制度に不備の點があつたならば、此の性質は忽ち劇しく現れ出ざるを得ない。英國の或る政治家の云ふた言葉に「政治の

要は容易に惡を爲し難き社會を造るにあり」とあるが、人間の此の性質が到底直らぬものと定まつた以上は、社會の制度の方を充分に研究して、其の缺點を調べ、若し爲し得べくば、之を改めて人間の此の性質の劇しく現はれ得ぬやうな社會を造らんと務める外に道はないであらう。

今日の社會は新に誂へて造つたものではなく、太古野蠻時代から漸々進歩し變遷して出來上つたのである故、その現在の制度の中には、太古野蠻時代からの遺風として存する不條理なものも決して少なくはない。之は恰も人間の身體に尾の骨や尾を働かす筋肉のなほ存して居るのと同じで、素より當然のことであるが、其中には、全く無害なものもあり、大に趣味あるものもある。然しまた甚だ有害であらうと思はれるものもある。特に財產に關する制度の中には、社會的生活に不適當であり、隨つて世道人心に取つて慥に有害であると我らの信ずるものが一つある。

我らは決して現今の財產制度を悉く有害と考へるのではない。他

人の迷惑を顧みぬ人間が集まつて、財産を共有することの出來ぬは見易い理である故、各個人が財産を私有すべきは素より當然なことである。僅に三四名の同業者が聯合して商賣を始めても、利益を等分に取ることにすれば、多く働いた者は損をした譯になり、怠けた者は得をした譯になり、結局働くは損と云ふやうな考へが生じて、忽ち紛紜が起る位である故、何百萬、何千萬の人が財産を共有にするなどとは夢にも出來ることでない。また人に賢愚强弱の別がある以上は、各個人の財産にも貧富の別あるべきは素より當然である。働いた者が富み、怠けた者が貧乏し、賢い者が瞞して儲け、愚なる者が瞞されて損し、若い時に苦勞した者が老後を安樂に暮し、若い時に道樂をした者が老後に困窮して暮すのは自然のことである故、誰も之に對して不服を唱へることは出來ぬ。また各個人が財産を私有する以上は親が財産を子に讓ることも素より當然である。親と子とは身體こそ離れては居るが、同一の生命の引續きとも云ふべきもの故、たとひ愚な息子が親の一生掛かつ

て溜めた財産を讓られたとて、他人が彼此云ふべき筋は少しもない。他の動物の中にも親が私有の財産を子に讓るものは幾らもある。

今日の財産制度の中で、社會的生活に適せず、隨つて人心墮落の原因となるものはたゞ土地、物品、金錢等を貸して個人が利子を取ると云ふ制度である。之も單に一個人に就て考へて見ると、別に不正なことであるとは云はれぬが、其の社會全體に及ぼす影響を調べて見ると、頗る有害なものであることは爭はれぬ。物を貸して個人が利を取ると云ふ制度の行はれて居る上は、或る手段に依つて一定額以上の財産を獲た者は、最早少しも働かずに贅澤に暮して行くことが出來るが、一社會の中に遊んで居ながら他人の造つた米を食ひ、他人の織つた衣服を着て、他人よりも贅澤に暮して居る者の存することは、其の社會のために有益であるや否や頗る疑はしい。特に其者の一生涯のみならず子孫代々、未來永劫まで遊んで贅澤に暮せると云ふに至つては、實に何と評して宜しいか解らぬ。また斯樣に財産を有する者等がなほ働いたな

らば如何に成り行くかと云ふに、其の結果は今日實際に見る通り、富者は益〻富み、貧者は益〻貧乏し、一方には遊んで居ながら贅澤の有りたけを盡す者が生ずると同時に、他方には日夜休まずに稼ぎ續けても飯の食へぬ者が無數に生ずる。社會が斯樣な狀態になつては、世道の廢頽し、人心の墮落するは素より避くべからざることである。

池や湖でも輕い塵は表面に浮び、重い埃は底に沈んで、常に最上層の水と最下層の水とが最も不潔であると同樣に、人間の社會に於ても最も墮落するものは何時も最上層の富者と最下層の貧者とであつて、世道の廢頽は先づ此の二層から始まり、漸次社會一般に移り弘まるのである。特に己よりもなほ一層上に位する者に倣はうとするは人間の通性であつて、上の好む所は下で直に眞似するゆゑ、上層の墮落は暫時の中に社會全部を墮落せしめるに至る。人は今日の世の中を黃金萬能の世と呼ぶが、實際其の通りで、黃金さへあれば隨分不正なことをしても社會の制裁を免れることがあり、代議士や新聞や博徒などを買收

して、無理にも自分の思ふことを押し通して實行することも出來る。斯かる有樣を眼の前に見て居る世間一般の人間が、黃金を渴望し、如何なる手段に依つてでも黃金を獲んと跪き狂ふは、人情の弱點として止むを得ない。唯でさへ人口增加のために次第に困難に成り行く生活が、富者が益〻富む結果として更に速に困難となり、富者の贅澤を目の前に見て、知らず識らず借金をしてまで表面を飾る風俗が生じ、衣食の足らざるために禮節を顧みるべき餘地がなくなつて、終に道義は地に墜ちるのである。

近來驕奢の風の盛になつたことは普く人の知る所であるが、之が上層の富者より起り始まつたものであることは誰も疑はぬ所であらう。また男女間の風儀も墮落したと云ふが、學校の教師が爲たならば忽ち免職になるべきことでも、富豪若しくば、之に關係ある有力者が爲ればなほ何等の制裁をも受けぬのみならず、新聞紙上に風流韻事として傳へられ、世人はたゞ之を羨むばかりである。其他、近頃世人の射倖心の盛に

なつたことも驚くべき程であるが、之も其の原因を尋ねれば、世に遊びながら贅澤を盡し得る境遇の人が在る故である。人は勤勉力行に依つて富は得られると云ふが、勤勉力行に依らずして、勤勉力行に依つて得べきより以上の富を有する人が有る以上は、人情の常として正直に勤勉力行するを愚なるが如く感じ、一攫千金の手段を考へざるを得ぬ故、今日の如く富籤が流行し、相場が盛に行はれ工藝の奬勵を目的とする博覽會の入場券にも富籤を附け、學校生徒の用ひる字引の書物にまで福引券を添へて賣り出すに至るのである。斯樣な類は數へ始めたならば實に際限がない故、此所に列擧することを略するが、以上述べた如く今日の人心墮落の原因は、主として富者が益、富み、貧者が益、貧乏になるやうな制度が存するのに因ると斷言せざるを得ない。

然らば今日の人心墮落と、物質的文明の進歩との間には、何等の關係もないかと云ふに、全く關係が無いとは云はれぬ。然し、其の關係は決して原因と結果との關係ではない。元來物質的文明なるものは、便利

を增すために人の苦心し研究した結果である故、何事をも著しく速にするものである。例へば昔歩いて一ケ月掛つて旅行した所も、今日では汽車に乘つて一日で行ける。昔一日掛つて手で細工した物も今日では機械を用ひて一時間に製造する。斯くの如く物質的文明なるものは、萬事甚だしく時を縮めるものゆゑ、財產制度に不備の點がある場合には、其の惡結果の現はれるまでに要する時日を著しく短縮する。土地、物品、金錢を貸して個人が利子を取ると云ふ制度が存する以上は、其の自然の結果として、富者が益、富み、貧者が益、貧乏することは到底免かれぬ故、たとひ物質的文明が進まなくても、何時か一度は世道人心に著しい惡影響を及ぼす時期が來るには違ひないが、物質的文明が進歩すれば、此の變化の速力を劇しく增し、忽ちにして少數の最富者と無數の最貧者とを生じて、人心の墮落が著しく現はれる故、恰も物質的文明が進んだ結果として直に人心が墮落する如くに見えるのである。これを物に譬へて云へば、恰も線香に火を點じて吹いて居る樣なもので、

線香に火を點じた以上は、捨て置いても終りまで燃え盡さねば止まぬものであるが、側からこれを吹けば、更に一層速に燃え盡すと云ふに過ぎぬ。

然らば物質的文明を一時見合せて、せめては人心墮落の速力を少しく緩めては如何と云ふ論が出るかも知れぬ。現に物質的文明の進歩を以て世道廢頽の原因と誤り見做す人々は「自然に歸れ」などと叫んで、現代の文明を呪ひ罵つて居るが、これは到底行はれぬのみならず、國力發展の上に頗る有害な議論である。抑、物質的文明なるものは、今日の世の中に於ける國家存立の必要な條件で、之を退けては生存が覺束ない故、一刻でも其の進歩を止めることは出來ぬ。若しも地球上に國が唯一つより無かつたならば、其の場合には物質的文明を進めるも廢するも隨意であらうが、多數の國が互に睨み合うて對立して居る現世では、物質的文明を止めることは卽ち亡びることに當るのである。今日の戰は決して大和魂のみでは出來ぬ。敵と味方との愛國心の度が略、

相均しいときには、一歩でも先へ文明の進んで居る方が勝つ機會が多い。國際公法が如何ほど研究せられても、萬國平和會議が何回開かれても、また各國の元首が打揃うて「列國間の關係が今日ほどに圓滿なりしことは嘗てなし」と乾盃辭を繰返して述べても、強い國の強く、弱い國の弱いことは變らぬ故、その間に戰爭の起つた場合には、必ず狼と羊との間の爭と同樣の結果に終るべきは勿論である。されば苟くも自己の屬する民族の維持發展を希ふ者は、今日の世の中では一刻も物質的文明の進歩を休めて安心しては居られぬものと覺悟せねばならぬ。他國で十里走る飛行船を造つたら、我國では三十里走る飛行船を造り、他國で三日間水中を潛る潛航艇を造つたら、我國では十日間水中を潛る潛航艇を造る位の心掛けを以て、軍事に限らず總べて他の方面にも物質的文明を進めて行かねば、今日の劇烈な競爭場裡に優者の位地を保つことは出來ぬ。特に我國の如き、物質的文明に於ては遙に他の數國に劣つて居る國で、早くも物質的文明を呪ふ者のあることは、將來の

國運進歩に對し、誠に憂ふべきことであらう。

物質的文明に進むことは國の存立上避く可からざる事であるとすれば、今日の如き土地、物品、金錢を貸して個人が利子を取ると云ふ制度の存する間は、富者は忽ち富み、貧者は益〻貧しくなり、隨て人心が墮落し、世道が廢頽することは到底免かれぬとして我慢するの外はない。凡そ如何なることでも原因を舊のまゝに存せしめ置いて、結果のみを除き去らうとするのは、勞多くして效の誠に尠いことである。斯く考へて、今日世に行はれて居る救濟の方法を見ると、何れも皆甚だ姑息なものばかりで、其の効力の僅少なるべきは素より當然である。學校教育に於ては特に訓育に重きを置くと稱して、品性を陶冶するとか、人格を高めるとか喧しく云うては居るが「論より證據」と云ふ諺もある通り、議論よりは實例の方が人心に深い印象を與へるもの故、不正なことをしても何の制裁をも受けず、甚だしい不品行なことをしても世間から尊敬せられて居る者の實例を、常　眼の前に見て居る生徒等に對して、倫

理の講義の餘り有効ならざるは言ふまでもない。如何に第一流の學者が集まつて、我國將來の德育の方針如何と論じても、如何に精しく孔子の道と老子の道との異同を知り、山鹿素行の倫理說と伊藤仁齋の倫理說とを比較し得る良教員を各學校に配布しても、品行を愼まざる富者及び有力者を社會の上位に立たしめ置く制度の存する間は、訓育上の好結果を得べき望は實に少ない。また勤儉貯蓄の奬勵を試みても、たゞ勤儉貯蓄のみに依つては、一生涯掛つても到底僅かな財產より造ることは出來ず、今日莫大な財產を所有して居る人々は、何れも勤儉貯蓄以外の或る方法にて富を獲たことを世人が承知して居るゆゑ、やはり一攫千金の道のみを求め、投機事業や不正な計畫に熱中する輩が跡を絕たぬ。或は宗教に依つて浮世の利慾を諦めしめ、他人は如何に贅澤に暮し、如何に世人から尊敬せられて居やうが、自分のみは淸貧に安んじ、世間以外に安心を求める樣に導かうとしても、これまた甚だ困難である。一人二人をして暫時斯く諦めしめる事は或は出來るかも知

れぬが、國民全體を斯樣に諦めしめて、風俗を改めるなどとは、今日の宗教家の力では無論不可能である。以上述べた如く、今日各方面から人心の墮落、世道の廢頽を矯正せんと力を盡して居るに係はらず、風俗の依然として改まらず、且なほ墮落せんとする傾の見えるのは、取りも直さず、人心墮落の眞の原因が、なほ依然として存して居る證據である。今日行はれて居る各種の矯正の方法は、一として人心墮落の眞の原因を除くに有効なものは無い故、その絶えず熱心に行はれて居るに拘らず、世の風俗は毫も改まらぬ。原因を舊の儘に存せしめ置いて、結果のみを除かうとするのは、恰も樹木の根に肥料を與へながら、梢の末端を摘み取つて居る樣なもので、たとひ一時若干の者を濟ひ得たりとするも、到底根本的に風俗を改め得る望はない。

また已に墮落した者や貧困に陷つた者を助ける爲には、今日多くの養育院、感化院もあり、慈善會なども開かれるが、之は素より極めて結構なことである。目前に水に溺れる者を見た場合に、何故に水に入つた

かと云うて、其の溺れるに至つた理由などを聞き糺す暇はない。理由に關する議論などは捨て置いて、先づ其者を救ふことが必要である。それ故、今日行はれて居る如き救助の方法も素より肝要なこととして奬勵しなければならぬが、毎日多數の墮落者を生ぜしむべき原因が社會の制度の中に存する間は、斯かる方法のみでは到底救助し盡せるものではない。今日多數の墮落者の生ずる有樣は、恰も中央の壞れ落ちた橋へ無數の群衆が押し掛けて來て、先きの危險なことは知らずに、後から無暗に壓して居る如くである故、落ちた者を救ふと同時に、後から壓す者を制止することが必要である。單に落ちた者のみを救うて居たのでは、一人を救ふ間には三人落ち、三人を助ける間には九人落ちて、到底手が廻らぬ。されば今日の慈善事業の結構なることは素より論を待たぬが、これに依つて世の風俗を改良しやうとすることは、頗る望の少ない樣に思はれる。

以上述べた通り、世の論者が文明の弊と見做すものは決して物質的

文明の進んだために生じた結果ではなく、其の眞の原因は別に他に存するのである。今日文明の弊なりと稱せられる人心の墮落、世道の廢頽に對して、種々の異なつた方面から、出來るだけ力を盡して矯正を務めて居ても、辛うじて一時若干の個人を救ひ得るのみで、社會一般の風俗を改めることには少しも効能が無いのは、卽ち今日行はれて居る矯正の方法が總べて、人心墮落の眞の原因とは何等の交渉もない證據であらう。世俗を善良ならしめんと務めることは、何時の世でも如何なる所でも、誠に結構なことゆゑ、從來行はれて居る如き方法も、益〻盛にすべきではあるが、眞の原因が他に依然として存する間は、其の効力は一定の極めて狹い範圍以外に出づることが出來ぬものなるを初めから承知して居らねばならぬ。特に今後は物質的文明が從來に比してなほ數倍の速力を以て進むであらうと思はれるから、人心の墮落を防止することは今日よりも一層困難になり、矯正事業や慈善事業の効力を買被つて居る人は、常に失望に陷るに違ひない。然して之を見て罪を

物質的文明の進歩に負はせる論者が、なほ絶えず續出するであらう。

終りに斷つて置くべきことは、我らは人間の財產に關する學問などを修めたことは全く無い故、之に關する知識は皆無である。隨つて野蠻時代から今日までに自然に發達し來つた利子を私有する制度を改めて、利子を取ることを國家の特權とする如き變化が、俄に出來得べきことか否かは全く知らぬ。また假に改め得べきものであるとした所で、之を實行した曉に、今日以上に人心を墮落せしむべき新な事情が生ずることが無きや否や、之も全く知らぬ。また現今の制度を其儘に据え置いて、唯その惡結果のみを除き得べき不思議の妙案が無かるべきものか否か、之も全く知らぬ。我らはたゞ他の社會的動物の生活狀態に比較して、今日の人心墮落の原因は、主として富者をして益〻富ならしめ、貧者をして益〻貧ならしめ、遊んで贅澤に暮せる者と、稼いでも生活の立ち兼ねる者とを社會の中に生ぜしめる現今の財產制度の缺點に存すると信ぜざるを得ず、隨つて世道の廢頽を以て物質的文明の進歩せ

る結果と見做す如きは、原因を取り誤れる頗る見當違ひの議論であり、斯かる論の廣く世に行はれることは、我が民族の將來に對して慥に不利益であると考へるが故に、此所に其の大略を述べたのみである。

（明治四十一年十一月）

一八　進化論と衛生

進化論と衛生と云ふ表題を掲げたが、實は生物進化の一大原因なる自然淘汰と衛生との關係に就いて述べたいと思ふ。抑進化論とは、今日世の中に在る生物は動物でも植物でも決して總べて世界開闢の時から今日の通りの形に造られ、其のまゝ少しの變化なしに子孫が殘つて、今日まで傳はつた譯ではなく、實は最初甚だ簡單な構造を有する先祖から分れ降つたもので、常に漸々變化し、代を重ねるに隨ひ、變化も次第に著しくなつて終に今日見る如き數十萬種の動植物が出來たのであると云ふ論で、之に對しては比較解剖學、比較發生學、化石學等に殆ど無限の證據があるから、今日の所では最早學問上では疑ふべからざる事實と見做すの外はない。而して生物種屬は何故斯くの如く常に進化し來つたかと云ふ問題に答へるのが卽ちダーウィンの自然淘汰說

である。

自然淘汰説の大體を述べれば、先づ如何なる生物にも三つの性質が備はつてある。第一は遺傳性と云うて親の性質が子に傳はること、第二は變化性と云うて同一の親から生れた子供でも其間には必ず多少の相違變化のあること、第三は無限の蕃殖で忽ちの中に非常の數に增加すべき傾を云ふのであるが、此三つの性質が備はつてある以上は其の結果として必ず生物種屬の進化と云ふ事が生ぜざるを得ない。抑生物の蕃殖する割合は幾何級數、卽ち所謂鼠算の割合で進むから、代々僅かづつ增加する如くに見えても忽ち無限に殖える事に成る故、決して生れた子孫が皆生存することは出來ぬ。假に此所に一本の草があつて、僅に二個の種子を生じ、翌年には此の二個の種子から二本の草が生じて各二個づつの種子を生じ、代々斯くの如くにして進んで行くと假定すると、十年目には千本以上二十年目には百萬本以上、三十年目には十億本以上と云ふ樣に驚くべき速力で增加する勘定になる。され

ば如何なる動植物でも生れただけの子孫が悉く生存し得る餘地は到底ないから、是非とも生存のための競爭が起り、勝つたものは生存して子孫を遺し、敗れたものは趾を留めず亡び失せてしまふ。其の場合に如何なるものが勝つて殘るかと云へば、無論生存に適する性質を備へたものに定まつて居る。若し同一種屬の個體が總べて寸分も違はず、全く同樣なものであつたならば、其間の勝敗はたゞ單に運次第と云ふの外はないが、前にも言つた通り生物には變化性と云ふものが備つてあつて、同じ親から生れた子でも其間には必ず多少の相違があり、隨つて同一種に屬する個體は皆幾分づつか相互に異なつた點がある故、競爭の場合には其中で生存に適する性質の最も善く發達したものが是非とも勝を占める事になり、此等のものが生存して蕃殖する時には、又遺傳性に依つて競爭に打ち勝ち得た性質を、子孫に傳へることに成るから、一代や二代の間には目に立つ程に現はれぬが、代が重なる間には各種ともに生存に適する性質が漸々發達進歩し、先祖に比較しては一

層進化したものと成る理窟である。

以上大略を述べた生物進化論、及び自然淘汰説は今日の所では最早確定した事實である。今より五十二年前にダーウィンが「種の起原」と云ふ書物を著して、初めて右の説を世に公にした頃は、反對論者が頗る多くあつたが、其後生物學各方面の研究が進むに從ひ、何れの方面よりも無數の證據が見出されて、今日では最早疑ふ可からざるものと成つた。即ち十九世紀の後半は生物進化論及び自然淘汰説の研究時代で、二十世紀に成つてからは、これを基として應用工夫すべき時代に達したものと見做して宜しからうと思ふ。

生物進化論、自然淘汰説が未だ研究中であつた時代には、進化論と衞生學との間には少しも直接の關係がなく、隨つて衞生學者が其の專門學科の上から、進化論や淘汰説に對して議論を發表する樣なことも無かつたが、今日では此等の學説は最早確定したものと認められ、之を基として國利民福を計る樣にと應用の工夫を凝らす時代に達したので

ある故、この學説の見地から衞生學を研究する人も出來、種々の議論が世に公にせられる樣に成り、續いて從來衞生學を專門とする學者からも、此等の新説に對する意見が、種々の雜誌上に現はれる樣に成つて來たが、其中には熱心に自然淘汰説に反對して各自論説を專門雜誌や普通の新聞に掲げて居る人がある。獨逸大學の衞生學教授などを務めて居て、專門家としては相當に名の聞えた人で、斯かる反對説を主張するものも有るため、一般の讀者は何れが正しいやら大に迷ふ如き傾もある故、自然淘汰と衞生との眞の關係を述べやうと思うて此題を選んだのである。斯かる人等の書いたものを讀んで見ると、明かに自然淘汰説を誤解して居る樣に見える所もあり、また自然淘汰説を人間に應用するに當つて明かに其の筋道を誤つて居る樣に思はれる所もあるが、素より此所には此等の人々の説を取つて一々批評しやうと云ふ譯ではない。たゞ一般の自然淘汰説から見て衞生と云ふことは、如何なる具合に考ふべきものかと云ふことを述べたいと思ふ。

抑近來に至つて從來の衞生學專門家が急に劇しく自然淘汰說に反對を始めたのは何故かと云ふに、ほぼ次の如き考へが基に成つて居るのではないかと思ふ。卽ち自然淘汰說では生存競爭に於て優つた者が生き殘り、劣つた者が死に絕え、自然に淘汰が行はれるので動植物各種が漸々進化するのである、不適者の滅亡といふことが萬物の進步する一大原因であると云ふが、醫術衞生の仕事は全く此の反對で、弱い者でも劣つた者でも助けて生存せしめ、自然に委ねて置いたら直に死んでしまふべきものでも、人工的の手當を施して生存せしめ蕃殖せしめるのであるから、自然淘汰說と衞生とは到底兩立せぬものの如くに見え、自然淘汰說に從へば衞生は有害無益なものであるかの如くに考へられ、若し世間に自然淘汰說が普く弘まつたならば、自分等の專門に研究し來つた衞生學が、全く立場を失ふに至りはせぬかとの心配から、斯く衞生學者が反對論を唱へ出した樣に思はれる。

然るに實際に於て自然淘汰論者の中に衞生は無用なものであるな

どと論じて居る者があるかと云ふに、左樣な暴論を吐く者は一人もない。自然淘汰說に反對する衞生學者は、自然淘汰論者は恐らく斯く論じて居るのであらうと自分で勝手に想像して、頻に之を攻擊して居るに過ぎぬ。卽ち優者の生存、劣者の滅亡は生物各種の進化の原因である。されば人間社會に於ても人種の進步改良を望むならば、劣者は悉く自然に打ち捨て置いて滅亡せしめるが宜しい。斯くすれば代々優者のみが生き殘る故、體質も漸々良くなるに違ひない。醫術や衞生に依つて劣者までも助けて生存せしめ、優者と同樣に子孫を後に遺さしめる事は、自然淘汰の働きを打ち消す事に當るから、人種全體の上から見ると實に無益なるのみならず、却つて有害なものであると、斯樣に論ずるものの如くに想像して、頻に之を攻擊して居るのであるから、全く想像的の敵と戰うて居る有樣である。それ故、敵の名を明かに指すことは出來ず、たゞ單に「進化論者は云々」と云うて論じて居るのみである。

優勝劣敗、適者生存と云ふ自然淘汰が生物進化の一大原因であつて、

人間社會の總べての事も決して此の原則に洩れぬことは明かである。自然淘汰を止めて優者も劣者も同樣に生存蕃殖せしめたならば、其の結果は如何と云ふに、之は進歩の反對の退化である。年中闇黑である洞穴内に住んで居る魚では、眼があつても全く物が見えぬ故、眼の發達の程度は生存競爭に於ける勝敗の標準とは成らぬが、斯樣な場合には眼は漸々退化して終には今日洞穴内に見る如き盲目の魚ばかりと成つてしまふ。人間もこれと同じ理窟で身體の虛弱な生存競爭に堪へぬ樣な者でも、又は社會に害を生ずる樣な惡い病氣を持つて居る者でも、人工的に保護して健全な達者な者と同樣に生存せしめ蕃殖せしめたならば、其の結果は其の人種全體の退化となることは疑はない。然し、これだけの事から直に人間は何でも全く自然淘汰に委せ置いて、弱い者は死なせてしまふが宜しいと簡單に論ずることは出來ぬ。

動物でも植物でも凡そ生きて蕃殖するものは生存競爭を免かれぬが、其の場合に競爭の單位となるものが、動植物の種類の異なるに隨ひ

決して一樣ではない。此の事を常に忘れぬ樣にせぬと色々間違ふた考へが起る。動物の中には一個體づつが生存競爭の單位となり、優つた個體が生存し、劣つた個體は死に絶えると云ふ樣に各個體が獨立の生活を營んで居るものも有るが、また他方には若干の個體が集まつて團體を造り、常に力を協せて團體の維持繁榮を計つて居るものがある。此樣な種類になると生存競爭の單位は團體であつて、適者生存、優勝劣敗などと云ふことも團體に對して行はれることに成る。卽ち生存に適する團體は勝つて生き殘り、生存に適せぬ團體は敗けて死に絶え、一個體づつに離せば敵より强いものでも、團體として弱ければ必ず滅び、一個體づつに離せば極めて弱いものでも、團體として敵より强ければ必ず勝つ。斯樣な場合には、また全團體の利益のために、各個體が自己一身のためには却つて不利益な性質或は構造を備へて居ることがある。例へば蜂の如き昆蟲は團體を造つて生活して居るもので、彼等の生存競爭の單位は團體であるが、其の各個體を取つて見ると、團體のた

めには有益で、自身一個のためには不利益な針を持つて居る。元來蜂には針があつて攻擊、防禦ともに之を用ひる故、蜂の團體は多くの敵に勝つて繁榮して居る次第であるが、此の針には逆に向いた鉤があつて、一旦之で人などを刺すとその儘に成つて拔けない。强ひて拔かうとすれば、針が根元から切れ傷口から臟腑が出て、蜂が死んでしまふ。斯樣な具合に團體生活をする動物と、單獨の生活をする動物とでは、種々の點で大に趣が違ふから、自然淘汰を論ずるに當つても、團體生活をする動物に就いては、生存競爭の單位が團體であると云ふことを常に忘れぬ樣にして理窟を考へなければならぬ。

人間は素より團體生活を營んで居る動物である故、その生存競爭の有樣は軍隊が相對して互に戰爭して居るのと少しも違はぬ。されば自己の團體の戰鬪力を減ずる樣なことは總べて不利益で、左樣なことを多く行へば終には亡びざるを得ぬに至る。前に述べた樣な、人間も自然淘汰に委せて置いて、弱者は構はず死なせてしまふが宜しいと云

ふ說の無理なることは、之を軍隊戰爭の場合に當て嵌めて見れば忽ち解かることである。斯かる暴論は之を譬へて云へば、軍隊が或る地に上陸する時に、其地の水の善惡なども檢査せず、勝手に兵士に飲ませ、惡い水を飲んで死ぬ樣な弱い者は構はず死なせるが宜しい、如何な水を飲んでも死なぬ達者な兵士のみが殘つて、全軍隊が益〻强壯になるからと云ふのと少しも違ふた所はない。如何に强壯な者ばかりが殘つても、非常に人數が減じては到底戰鬪に堪へぬ樣になつてしまふ。

斯樣な次第であるから、自然淘汰說から衛生のことを考へて見ると、決して衛生が不必要とか有害とか論ずることは出來ぬのみならず、自己の團體の自衛上極めて必要なものと云はねばならぬ。此點から論ずると衛生は今後益〻研究を重ねて、何所までも發達進步させなければ成らぬことは勿論である。

然しながら前にも述べた通り、自然淘汰は生物進化の一大原因であつて、之を妨げることは卽ち進步を妨げ退化を促すことに當る。人間

社會に於ても此の理窟には洩れぬ故、劣等な人間、有害な人間を人工的に保護して生存蕃殖せしめる樣では、其の人種の進歩改良は到底望むことは出來ぬ。身體が虛弱で後世同僚に迷惑を掛ける樣な劣等の子孫を遺す樣な人間を無理に生かして置くことは、一寸見ると如何にも博愛の精神に叶ふ立派な仕事の樣に見えるが、實は後世の人等に餘計な負擔を掛ける譯に當るから、現在のために未來を犧牲に供して居る次第であつて、前後を通じて考へて見ると決して結構なことではない。斯樣な場合には單に人權を重んずると云ふが如き空論には構はず、少なくとも子孫を後に遺さしめぬだけの取締は必要であると思ふ。單に目前のことのみを考へ、未來のことは全く不問に置き、たゞ一人のみのことを考へ、他の數千萬人の利害を度外視する如きは、實に物の輕重大小を顚倒して居ると云はねばならぬ。

それ故、若し衛生學者が未來のことも考へず、また全團體の利害も構はず、單に如何なる虛弱な者でも、惡病のある者でも、力を盡して生存さ

せ蕃殖させる樣にと務める次第であるならば、之は全く自然淘汰の理に通ぜぬ所から起る誤で、其の志は如何に尊くとも、其の所行は實際團體のためには有害に相違ない。自然淘汰說を基として人種全體の衛生を論ずる人は、誰も此事を說いて居る樣であるが、之は尤もの次第である。

國家とか人種とか云ふ團體は素より個人の集まりで、各個人が强壯であれば、これより成れる團體全體が强くあり、生存競爭に勝つ望みが多くある。然して個人の健康を保ち、身體を强壯にするのが衛生であるから、個人の衛生の必要なことは云ふまでもない。また水道、下水その他の團體の衛生に關する設備或は傳染病に關する規則等が大切であることも亦改めて論ずるに及ばぬ。たゞ自然淘汰說を基として衛生のことを考へると、各個人の健康を標準として衛生を論ずるだけでは未だ決して充分とは云はれぬから、衛生上の研究をする人はたゞ各個人の健康を注意するばかりでなく、自己の屬する全團體の健康のた

めに注意し現今の有樣ばかりでなく長い未來のことまでも考へ、常に自己の屬する團體の健康繁榮を目的として研究しなければ成らぬことと思ふ。

我々人間では先づ平均して、女が一人に就いて、一生涯に四人乃至五人位の子を生む割合に成つて居るから、若しそれが悉く生存し蕃殖したならば、二代目には人口が倍になり、三代目には四倍になり、四代目には八倍になる勘定であるが、勿論實際には其の通に增加することは出來ぬ。此點では人間も他の動物も理窟は同然で、多く產れる子の中からたゞ少數のみが生存し得るのである。斯樣な所で身體の虛弱な精神の痴鈍な、團體の厄介になるに過ぎぬ樣な人間を、どうなり斯うなりたゞ生かしてさへ置けば宜しいと、人工的に手を盡して生かして置くと云ふことは、一方から考へて見ると全團體のためには隨分不利益なことである。總べての人を生かして置くことが出來るならば如何に弱いものも助けなければならぬが、生れる子の幾分かより生きる餘地

がない樣な現社會で、斯樣な、團體のために不利益な人間を人工的に助けて置くのは、取りも直さず團體のためになほ一層よく働き得べき他の人の生存の場所を塞いで居る譯に當るから、全體から見るとこれは考ものであらう。また斯樣な人工的の手當に依つて僅に生命を保ち得る樣な虛弱な者が子を遺せば、之もまた親に似て決して丈夫ではなく、終には團體全部が人工的の保護がなければ、生存の出來ぬ樣なものになるかも知れぬが之が卽ち所謂退化である。斯かる有樣に陷ることを防いで、團體の健康を增進せしめるには如何なる方法を取らねばならぬかと云ふ問題を研究するのが近頃漸く始まつた人種衛生學、社會衛生學の仕事である。

以上述べたことを纏めて見ると、生物進化論が全く確定した事實と認められる樣になり、自然淘汰說も實際のことであると人が信ずる樣になり、從來はたゞ學說として研究して居たものを、今から實地に應用して人間社會の進步改良を計らうと云ふ段に達したので、衛生の方面

にも自然淘汰の原理に基いて團體の衛生を研究する人種衛生學、社會衛生學などと云ふ新らしい名前の學科が出來るに至つた。然して此等の學を研究する人の中には劣等の人間を醫術衛生に依つて人工的に助けるのは、自然淘汰の働きを妨げるから其の人種の退化を引き起すものであると云ふ所謂人種退化論を説く者がある故、從來衛生學專門の學者が大に之に反對し、人種退化論に反對する餘りに自然淘汰説までに劇しく反對して來た樣に見えるが、實は衛生と自然淘汰説とが全く相反するものでないことは前にも述べた通りである。

兎に角自然淘汰の原理から考へて見るに、人間の生存競爭に於ては、國とか人種とか云ふ團體が競爭の單位であるから、衛生を論ずるに當つても常に此事を眼中に置き、自己の屬する團體の現今及び將來の健康繁榮を目的として方法手段を研究し、それと衝突しない範圍内に於て出來るだけ各個人の生存、健康を計る樣に務めねばならぬことと思ふ。

團體の現今及び將來の健康を計ることになると、其の關係する範圍が極めて廣くなるから、其の研究は中々容易なことではない。衛生學、病理學、生理學、生物學等の如き學科の外に、法律にも警察にも教育にも其他種々の方面に關係があるから、單に個人の衛生を計るのに比しては頗る困難である。それ故、人種衛生學とか社會衛生學とか云ふ學科も、今日の所では未だ研究の手始だけで、中々確定した學説などは無い樣に見えるが、斯かる折には往々極端の説を唱へる人が出ることを免かれぬ。また此等に反對する從來の衛生學專門の學者の議論も、前に述べた通り自然淘汰説の誤解に基づくことが往々ある樣に見える。此等の議論は何れも普通の新聞雜誌などに引用して揭げることもあるが、何れを讀むにも先づ自身に自然淘汰の原理を充分に了解し、それを基として批評し判斷する積りで讀まねばならぬ。

（明治三十八年六月）

一九　民種改善學の實際價値

此所に民種改善學と云ふのは、近來西洋諸國で盛に用ひられるEugenics と云ふ字を譯したものである。此字には善種學とか、優良種族學とか、人種改良學とか云ふ譯語もあるが私は數年前から、民種改善學と云ふ字を當てて、之が最も適當と考へるから、其まゝ用ひることにした。此の學問は有名なチャールス、ダーウィンの從弟に當るフランシス、ゴルトンの唱へ出した所であるが、此人は今より十年前に「法律にも感情にも逆はずに人間種族の改良の出來得べきこと」と云ふ題で一回の講演をした。又それから三年を經てユージェニックスと題する小さい書物を書いて民種改善學の範圍、目的、方法等を明かに述べたが、之に依つてユージェニックスと云ふ語が定められ、一般に用ひられる事になつた。ゴルトンは若い時から種々の方面の學問研究に骨折つた人で

特に遺傳に關して古人の未だ云はなかつた新しい學說を出して學者間に重んぜられて居たが、ユージェニックスと云ふ語を造つたのみならず、ロンドン大學のある所に自分の費用で、民種改善學の研究所を創立し專門家にそれ〴〵研究せしめて、其の研究の報告の公にせられたものが今日までに已に十五六册も出て居る。其他英國には民種改善教育協會と云ふものも出來て、之からは稍通俗的に書いた雜誌を發行して、民種改善學に關する知識を普及することを務めて居る。獨逸では近來人種の衛生といふ事を喧しく唱へるやうに成つたが、之も民種改善と略同じ意味の語である。ゴルトンは今年一月十七日に日本流の勘定にすると九十歲の高齡で死んだが、其の遺言によつて、ロンドン大學に民種改善學の講座が新に設けられたといふ事である。斯樣な次第で、民種改善といふ學問は極めて新しいに拘らず非常な速力で評判が高くなり、近頃は多少流行的に盛に唱へられて居るが、今日東京で流行する縞柄が數ヶ月の後には邊鄙な地方へも流行し及ぶ如くに、西

洋で喧しく唱へられる學說が、數年遲れて日本で隆盛を極めることは從來の例に依つても確である故、恐らく民種改善學も此所一二年の間には、我國でも急に盛に唱へられ、何の雜誌を見ても、必ず一つや二つの此學に關する論文を見る時が來るであらう。然して從來の例に依ると我國では如何なる學說でも盛に流行する間は、誰も彼も之を唱へるが、半年か一年の後には全く之を忘れて顧みるものも無くなるのが規則の如くであるが、其の原因を尋ねると一は國民性の然らしむる所で到底避くべからざる事かも知れぬが、一は流行の當時に其の學說の眞價を究めず、無暗に有難がつて買ひ被り過ぎるに基くやうである。凡そ學說として世に公にせられる程のものならば、皆相當の理窟のあるは勿論のことで、其點だけを聞くと如何にも尤もに思はれるから、其の眞價を判斷するだけの眼識のない輩は忽ち之に雷同して、一時は其說が天下を風靡するといふ有樣になる。然しながら之を實地に應用して見ると、素より豫期しただけの効果が現はれる筈は無い故、暫時にし

て前の反對に、其の學說の全部を捨てて顧みぬやうに成るのである。純粹な理論上の學說で、實際の生活社會と緣の遠いものならば、如何なる學說が流行し、如何なる學說が衰へやうとも敢へて問ふに及ばぬが、民種改善學の如き我が民族の將來に偉大な影響を生ずべき實際的の學問が、他の學說と同樣に一時流行して後に忽ち忘れられるやうでは誠に遺憾である故、未だ流行の盛にならぬ中に其の實際的價値を冷靜に論じて、流行後、忽ち捨てられる如き事を防ぐの一助としたいと思ふ。

人種を改良しやうといふ事は、今から二十數年前に我國でも一度唱へられた事があつたが、其時の人種改良は、日本人よりも優つた西洋人と雜婚して西洋人の血を日本人に加へて、人種を良くしやうといふ考へであつた。之は西洋風の舞蹈が奬勵せられ、日本語の發音にも西洋人を眞似る程に、萬事西洋を崇拜した心醉時代であつた故で其後は最早斯樣なことを論ずる人は無くなつた。この度唱へらるゝ民種改善學も、人間を改良することを目的とするのであるが、昔の人種改良論と

は全く違うて、外國から良い人種を連れて來て雜種を造るのではなく、在來の人間の中から身體、精神ともに優良で、次代の國民を造るに最も適當なりと認められる人々だけに生殖せしめ、身體精神ともに劣等で、必ず劣等な子孫を遺すに相違ないと思はれる人々には生殖をさせぬ樣にして、一代毎に漸々人間の種族を改善して行かうと云ふ考へに基いたもので、一言で云へば、生物學上の理を人類社會に應用しやうと企てるのである。十九世紀の後半に於ける生物學研究の結果として、生物の進化といふことが確實になつて以來人の飼養し、培養する動植物は、此理に從うて盛に改良せられ、比較的短かい年月の間に已に驚くべき結果を得て居る。中にも北米カリフォルニヤ州のバーバンクと云ふ人の如きは、種々の植物を人爲的に改良して、刺の無いシャボテンまでも造り出した。斯くの如く、動物でも植物でも、一代毎に種を選んで生殖せしめさへすれば、其の種類を改良することは必ず出來るのであるから、動物の一種なる人間も無論この方法によつて改良の出來る筈

である。民種改善學は此の根本の理窟を基として、實際の社會に此理を應用すべき途を講究する學問であるが、之には先づ遺傳の現象を研究して、其の法則を採り求めることが必要である。それ故今日、民種改善に關する研究と云へば大部分は遺傳の研究である。ロンドンの民種改善學研究所から出した報告の如きも其通りである。

さて人間が社會を造り國家をなして多數相對立して居る以上は、身體、精神の優良なることは何よりも大切である。他に如何に優れた點があるとしても、身體及び精神の健康狀態が他國の人に比して劣つて居ては、今後の列國競爭場裡に有利なる位置を占めるべき見込みはない。されば、身體、精神の健康如何と云ふことは、國家、民族に取つて最も重大な問題であるが、民種改善學は學理の示す所に從うて、其の向上を圖るものである故、政治の局に當る者も教育に從事する者も、一日も忽せにすべからざる性質の學科と云はねばならぬ。近來此學が西洋諸國で非常に喧しく唱へられて居るのはそれ故である。

民種の改善を圖るには、何故に先づ詳細に遺傳の現象を研究する必要があるかと云ふに、人間の身體及び精神に現はれる種々の缺點の中には、子孫に遺傳するものと、遺傳せぬものとがある。子孫に遺傳せぬものは、其の缺點が親一代限りで消えて子に傳はらぬから、別に其の缺點のある者の生殖を止める必要はないが、子孫に必ず傳はると定まつた病を有する者は、嚴重に其の蕃殖を防がねばならぬ。また病氣自身が遺傳せずとも、其の病氣に罹り易い素質が遺傳すれば其の子孫は多くは其の病氣に罹る故、病氣が遺傳したも同樣である。果樹の苗を仕立るときに、病に罹つた苗を見出せば皆之を燒き捨てるが、之は最も完全な方法で、若し人間にも此の方法が行はれたならば、數代を出ずして人類の病氣を大部分根絶することが出來るであらう。されば、身體に就いても精神に就いても、如何なる病氣、如何なる畸形は子孫に遺傳するかを研究して、確に遺傳すると定まつたものに對しては、其の生殖を取締る必要がある。斯くの如く一方では、國民の身體精神ともに平均

の狀態を漸々高めて行くことを圖ると同時に、十萬人に一人とか百萬人に一人とか、極めて稀に現はれる異常の天才に就ても、よく其の系統を調べ、之に依つて天才の現はれる原因、機會等を研究し、若し天才の現はるゝ場合を豫期することが出來たならば、之に適當な境遇を與へて全國民のために、其の偉大なる能力を發揮せしめることを圖らねばならぬが、之また遺傳現象の研究に待つの外はない。

以上述べた通り、民種改善學の基づく所の理窟は極めて明瞭で、若し適當な方法が考へ出され一般に實行せられたならば、國民の身體、精神ともに次第に改善せらるべきは毫も疑ないことである。また今日直に實行し得べき方法も多少無いこともない。現に北米合衆國の多くの州では、已に種々の法律を設けて、遺傳性の病氣のある者の生殖を制限して居る。例へば、精神病に罹つた者は全治してもなほ三年間は結婚を禁ずるとか、醫師の證明書がなければ結婚を許さぬとか、癲癇や常習的酒呑みには結婚をさせぬとか云ふ如き規則の設けてある所が頗

る多い。此樣な種類の規則ならば、別に今日の社會の組織や政治の仕組を改めなくても直に行ふことが出來る。

民種改善學の立場から現今の社會の狀態を見ると、甚だ遺憾に思はれる事が少なからず行はれて居る。醫は仁術なりと云ふが、若し進歩した醫術の力に依つて、先天的に極めて虛弱な體質を有する者を助け生存せしめ生殖せしめて、更に虛弱なる子を遺させる如きことがあつたならば、決して次代の國民に對して仁なりとは云はれぬ。次代の國民は斯かる虛弱な厄介者を引き受けたるために、各自の負擔が重くなり、却つて醫術の進まなかつた昔を慕ふかも知れぬ。慈善は素より結構なことであるが、單に目前の感情に動かされて、社會的生存に適せぬ精神上の不具者を憐み助けて生殖せしめ、更に一層の不具者を遺させる如きことがあつたならば、之また決して次代の國民に對して慈悲なりとは云はれぬ。次代の國民は斯かる不具者の存する爲めに非常な迷惑を蒙り、却つて先代の殘酷なる慈悲を咒ふかも知れぬ。其他財產

門閥等の關係から、虛弱な愚物が生存し蕃殖し、身體、精神ともに、それより遙に優つた者が却つて生活難のために子を遺し得ぬことも常に見る所であるが、此等も純粹に民種改善學の上のみから云ふと、何とかして位置を取り換へて遺りたいものである。要するに今日の民種改善學は未だ單に實驗、觀察、統計によつて遺傳の現象を精密に調べて居るだけで、直ちに實行の出來る事項は甚だ少ない。若し民種改善學の要求する所が全部實行せられたならば、人間も他の動植物と同じく、比較的短かい年月の間に著しく改良の出來るべきは無論であるが、社會の制度が大體に於て現今の儘である以上は、之は到底實現の望のない空想に過ぎぬ。然して實際行はれ得べきことは、僅に今日アメリカの諸州で實施して居る如き結婚に關する取締り位だけであらうが、之だけでも勵行さへすれば相當の効果は顯はれる筈である。近年の統計に依ると、文明諸國では精神病者、自殺者、犯罪者等の數が年々增加して、人間の平均の狀態が慥に退化するやうである故、各國ともに退化問題が

學者間に喧しいが、今後の列國競爭場裡に獨立の國民として立つて行くには、一刻でも我が種族の退化を防ぎ、一歩でも他の種族に優つた狀態に蹈み止まるやうに務めねばならぬが、民種改善學の要求する所は、たとひ一部分でも行はれさへすれば必ず、それだけの效能はあらう。前に民種改善學は民族の將來に關して極めて重要な學問であると云ふたのは卽ち此の意味に於てゞある。

凡そ如何なる學說でも、其の實際の價値を判斷するには先づ其說の實行の出來る範圍を考へて掛らねばならぬ。如何によく考へられた學說でも到底實行の出來ぬものならば、其の實際の價値は皆無である。民種改善學の如きも、其の理窟は極めて明瞭で、若し行はれさへすれば、著しい效果の擧がるべきは確であるが、社會の制度が今日の儘であり人間の性質が今日の儘である間は、實行の出來る範圍は甚だ狹からざるを得ず、隨つて最初その效能を過重視する者は後に至つて必ず失望するを免れぬ。結婚に關する取締りの如きも、人間の性質が一變して

次代の國民のためには何物を犧牲に供するも敢へて辭せぬと云ふやうに成らぬ以上は、充分な效果を豫期することは出來ぬ。內緣の夫婦が何の制裁もなく子孫を遺し得る社會では、公の結婚を取締つたとて、民種改善のための效能は眞に少ないに違ひない。然しながら之とても、種々の方面から或は敎へ或は責めて、出來るだけ實行を促したらば、やはりそれだけの效能は現はれるであらうから、其の基礎となるべき事項を學術的に精密に研究する必要は充分にある。人類及び其他の生物に於ける遺傳の現象を調査し、其の結果に基づいて自己の種族の退化を防ぐことは實に今日に於ける急務であつて、不充分ながらも之を除いては他に良法は決して無い。

以上述べたのは決して今日西洋諸國で盛に唱へられて居る民種改善學の價値を輕んじた譯ではない。我が民族の將來に取つて重大な影響を及ぼすべき學問であると信ずる故、近く其の流行を見る際に、初め之を過重視し忽ちにして之を捨て去る如き人の成るべく少なから

んことを希望するの餘り、其の實際の眞價に就いて考へる所を簡單に述べただけである。

（明治四十四年三月）

二〇　人類の將來

一

何事に限らず「未來を說くのは決して容易ではない。昔から「一寸先は暗」と云ふ通り、次の瞬間に如何なることが起るかは、前以て知ることの出來ぬが常である。多少學術上の根據を有する天氣豫報でさへ當らぬことが多い故、世間からは當るも八卦、當らぬも八卦と同樣に見做されて居る。されば今日の所では未來の豫言は到底普通の人間には出來ぬことで、若し之を爲し得る者があつたならば、其者は必ず人間以上の所謂豫言者の類でなければならぬ如くに思はれて居る。

然しながら、未來のこととても、總べてが全く豫言の出來ぬもののみとは限らぬ。來年の曆に何月何日には日蝕が有つて、何時何分何秒に始まつて、何時何分何秒に終ると明記してあるが、それが必ず確に當る。

今年現はれるハレー彗星なども幾十年も前から既に今年現はれるべきことが天文學者には知れてあつて、今後また何十何年目に再び現れ出ると云ふ事までが明かに解つて居る。他の方面に於て豫言が總べて不可能なる如くに見ゆるに反し、天體に關してのみ斯く正確に豫言の出來るのは何故であるかと云ふに、之は決して特別な秘密がある譯ではなく、たゞ既往に於ける天體の運動を、正確に測定し、其の運動を支配する法則を探り求め、之を將來に當て嵌めて、豫言するのみである。されば他のこととても、天文學で將來を推測するのと同一の方法によつて考へたならば、多少の豫言の出來ぬことはない。我らが今此所に聊か人類の將來に就いて論ずるのは、決して豫言者を以て自ら任ずる次第ではなく、單に天文學者が天體を觀測し研究するのと同一の態度を取り、生物界の既往の變遷を調べ、それより生物各種の榮枯盛衰を支配する法則を探り求め、之を人類の場合に當て嵌めて、其の將來を推測しやうと試みたに過ぎぬ。天體の運動の簡單なるに反し、生物界に起

る現象は極めて複雜であつて、到底數學的に計算は出來ぬから、時を指して豫言することは素より出來ぬが、唯その進み行く方向と、終に達すべき終局點とだけは恐らく誤りなく推測し得るであらうと信ずる。

之より先づ、人類が如何にして生存競爭場裡に他の動物に打ち勝ち、今日見る如き優勢の位地を占め得るに至つたかを考へ、次に地質學上の各時代に全盛を極めた諸種の動物が、如何にして一時斯かる勢力を得るに至つたか、また何故それが遂に亡び失せたかを調べ、それ等を基として人類の將來に就いて我らの推測する所を順次述べて見やう。

二

さて人類は他の動物に比して如何なる點が優つて居たので總べて他の動物に打ち勝つて、今日の位地を占め得るに至つたかと考へるに恐らく誰でも直に氣の附くことであらうが、それは思考力、推理力の器官なる腦髓の發達せることと運轉の自由自在なる手を有することである。假に人間の手に屈伸自在の指がなくて、其代りに馬や牛に見

る如き蹄が着いてあつたと想像して、それでも人間が今日の位地まで達し得たであらうか、否かと考へれば、人類の進歩に取つて手が如何に缺くべからざる物であつたかゞ直に知れる。手に指がなかつたならば、第一、物が握れぬから如何なる簡單な器械をも使ふ事が出來ぬが、若しも人間に器械を使用する能が無かつたならば、到底他の動物に優るべき目醒ましい働きは出來なかつたに違ひない。人間が他の動物に打ち勝つたのも、文明人が野蠻人を征服したのも全く器械の力に依るのである。人間の外にも幾分かの器械を用ひる動物が全くない譯ではないが、人間の如くに一から十まで器械ばかりを使ふものは他にない故、實に「人間は器械を使ふ動物なり」と云ふ定義を下しても差支へはない。また腦髓の方が充分に發達しなかつたと想像すると、此の場合にも人間は決して今日の位地に達し得なかつたに疑ない。凡そ如何なる器械でも、之を用ひるに當つては手を使ふと同時に必ず腦をも使ふもので、器械を造るに當つては更に多く腦を用ひる。腦で工夫した

器械を造つて使用して居れば、手はその爲に漸々熟練して益精巧に働き得る樣になり、手を働かして經驗が積れば腦はそのため更に進歩して前よりも一層よく考へ得る樣になり、兩方で相助け合うて、兩方ともに益發達する。腦の思考力、推理力が進めば、自分に比して遙に筋肉の強いもの、感覺の敏いもの、爪牙の鋭いものに對しても智力によつて容易に打ち勝つことが出來るが、人類が他の動物に打ち勝つたのも、文明人が野蠻人を征服したのも總べて此の方法に依つたのである。

元來如何なる器官でも突然一足飛びに發達するものではなく、必ず其の履むべき順序を經て漸々進み來るもので、人類の腦なども手と器械とに依つて獲る經驗の重なるに隨うて發達したのであるが、之と大關係の有るのは言語である。今日の所では言語を有する動物は人間のみである故、或る人が「人は言語を有する動物なり」と云ふ定義を下したのも尤もである。通常言語は口で云ふものの如くに見做されて居るが、實は口は單に言語に必要な音聲を發するだけの器官であつて、眞

に言語を使ふ器官は腦であるから、我々は常に腦で物言うて居ると云ふた方が寧ろ正しい。言を換へれば、言語なるものは腦の働きに使ふ器械であつて、手が種々の器械を用ひて働くが如くに、腦は言語を用ひて働くのである。器械も初めは石斧や石棒の如き粗末なものであつたのが、終に自動車やライノタイプなど頗る精巧なものが出來た如く、言語も初めは至つて粗末なものであつたのが、漸々進歩して精巧なものとなり、腦は其の精巧な言語を使うて、益推理の力を進め智力を增し、何事をもよく工夫して、終に他の諸動物に打ち勝つて今日の優勢なる位地に達したのである。

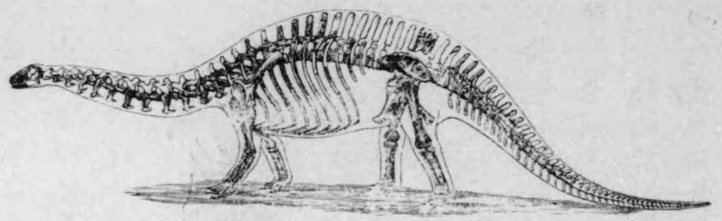
人類の起りを想像するに、恐らく今日より何百萬年か何千萬年かの昔に其頃生存して居た猿類の中の或る一種が樹上の生活より地上の生活に移り、後足のみで體を支へ直立して歩み、斯くして自由になつた前足を用ひて簡單な器械を使ひ始め、或は石を拾うて敵に投げ、或は枝を折つて敵を防ぐべき棒となし、或は石を打ち合せ、割れて鋭い刃の生

じたものは之を斧または刀として用ひ、小さい片は鏃として矢の先に結び附け、石を打ち合せ或は木を摩り合せて居るとき偶然火を發する事を屢〻經驗する間には、遂に自由に火を造る方法を覺え、隨意に火を用ひ得る樣になつた以上は、之によつて土器を燒くことも出來、次には鑛物を熱して青銅、鐵さへも採つて、種々の武器を造り得るまでに進むであらうが、此の程度まで進んだ以上は、最早人類の敵として恐るべきものは一つも無く、自分に危害を加へる獸類は悉く退治し、自分の種屬は漸々蕃殖して全世界に擴がり、終に戰と云へば人類相互の戰のみを意味する今日の有樣までに進み來つたのであらう。また斯く手を用ひて爲ることが進歩する間には、經驗の重なるに連れて、腦の働きも速かに發達し、終には困難な無形の事柄をも抽象的に思考するまでに進み來つたのであらう。我々人類は斯くの如く腦と手との働きに依つて、今日占め居る位地までに達したのであるが、さて今後は如何に成り行くであらうか。

三

「歴史は繰り返す」と云ふ諺がある。之は恐らく時の古今を問はず同じ原因があれば必ず同じ結果が生ずることを云ふたものであらう。然らば或る事の將來を論ずるに當つては、嘗て既往の歴史中に起つた似寄りの事件の成り行きを調べて、參考し比較する事は甚だ必要である。今人類の將來を論ずるに當つても、先づ人類より以前に此の地球上に全盛を極めて居た各種の動物が、終に如何なる運命に遇ふたか、また何故その樣な運命に遇ふたかを詳しく研究して參考せねばならぬ。

人類以前に地球上に全盛を極めて居た動物の例を擧げれば、古生代に於ける魚類、兩棲類、中生代に於ける爬蟲類、第三期に於ける獸類などである。此等は各〻その時代に於ては、恰も今日の人類の如くに絶對に優勢なる位地を占めて、假にも之に敵し得る動物は決して他に無かつた。特に中生代の蜥蜴類の旺盛を極めて居た勢は殆ど想像も及ばぬ程で、近頃發掘せられた化石のみに就いて見ても北アメリカから出た



中生代の大蜥蜴アトラントサウルス

アトラントサウルスといふ蜥蜴などは體の長さが十六間もあつて、今日の最大の鯨よりも更に大きい。こんな動物がうろ〳〵と陸上を匍ひ廻つて居たときの實際の樣子は如何であつたらうか。また其頃の海の中にはイクチオサウルス、プレシオサウルスなどと名づける鯨のやうな大きな蜥蜴類が無數に游いで居た。また空中には翼を有する蜥蜴類が澤山に飛んで居たが、其の中で、プテラノドンと云ふ種類などは翼を擴げると三間半もあつて、今日最大の飛ぶ鳥なる南米のコンドル鷲に比べて殆ど三倍も大きい。斯くの如く、其の時代に於ては陸上を走るものも、水中を游ぐものも、空中を翅けるものも悉く蜥蜴類のみで、聊かでも之に匹敵すべき動物は他に無かつたのである。次に第三期に於ける獸類もそ

の通りで、單に身體の大きさのみに就いて云うても、ヂノテリウムと稱する象類の如きは頭骨だけでも長さが一間近くある。マケロヅスと云ふ虎には牙の大さが殆ど短刀ほどあり、鹿には左右の角が二間以上に擴がつたものがある。されば此の時代に於ける獸類は中生代の蜥蜴類と同じく、如何なる動物が出て來やうが到底亡ぼされる如きことは夢にも有り得べからざる勢であつた。然るに其の成り行きは如何と見ると、中生代の大きな蜥蜴類も、第三期の恐ろしい獸類も、兩方ともに實際に於ては忽ちにして亡び失せ、次の時代には殆ど全滅の姿と成り終つたのである。

第三期の巨獸ヂノテリウムの頭骨

一時絶對の優勢を占めて向ふ所全く敵なしとも云ふべき有樣にあつた此等の動物が、何故に忽ち衰へ亡びるに至つたかは、大に研究すべ

き問題である。此の問題に就いては、古生物學の書物にも何も論じてなく、生物學者等の間には何の說もない樣で、普通には唯これ等の動物よりもなほ一層優つたものが現はれた爲に、生存競爭に敗れて亡びたのであらうと簡單に思はれて居るが、我らの考へでは此の問題は斯樣に簡單に解決せらるべきものではなく、更に深く研究を要する。第一、既に優勢の位地に立つて居ると云ふことは、生存競爭上その動物に取つて大に有利な點である故、假に同等の競爭者が現はれたと想像しても、決して容易に負ける理由はない。一種の動物が絶對に優勢の位地を占めて居る以上は、殘りの動物は之に比して悉く劣等の位地に立つて居ることは勿論であるが、今まで劣者の位置に立つて居たものの中から或る一種が突然急速力を以て進步し、今まで絶對に優勢を保つて居たものを追ひ越し、忽ち之を全滅せしめると云ふことは容易に有るべき事でない。山が海となり、海が山となつて天地も覆るかと思ふ樣な大變動が地球の表面に起つた場合はいざ知らず、斯かる天變地異が

無い以上は、其時の劣者の中から、其時の最優者を忽ち亡ぼすべきほどの力を有するものが現はれやうとは容易に信ぜられぬ。然らば前に述べた如き一時全盛を極めた動物種屬が何故に忽ち滅びたかと云ふに、我らの考によれば、其の動物種屬自身の內に、自ら滅亡すべき原因が生じて此の原因が內から働くのと、外から攻める敵の力とが相合して遂に之を滅亡せしめたのである。

凡そ物が亡びるには二通りの原因がある。一は外に在つて外から働く原因で、他は內に生じて內から働く原因である。我國の歷史に就て見ても、平家が亡びて源氏が興つたのは、決して平家が引續き健全に發達して優勢を占め居るべき筈の所へ、源氏が更にそれ以上に優つたものとなつて、競爭の結果これを倒したのではない。若しも平家に內から亡びるべき原因が無かつたならば、競爭上遙に不利益な位地にあつた源氏が、後より之を追ひ越して倒す望みは到底無かつたであらう。彼の驕れる平家が久しからずして亡びたのは、平家の亡びるべき原因

が既に內から働いて、最早危く成りかゝつた所を源氏が外から突き倒した故、恰も內部の朽ちた枯木が些細の風にも倒れる如くに、容易に亡びたのである。常に生存競爭の劇しい世の中にあつては、如何に一時優勢を保つた動物でも、內から亡びる原因が働いて、其の運命が傾いて來た場合には、今まで劣等の位地にあつたものの爲に、忽ち倒されてしまふことは當然である。中生代に天下を我物顏に橫行したイクチオサウルスやプレシオサウルスが僅に一時代限りで滅び失せたのも、第三期の恐るべき猛獸、驚くべき巨象が暫くで全く死に絕えて後に子孫を遺さぬのも、全く平家の亡びたのと同樣の理由に基づくのである。

一時絕對の優勢を保ち得た動物種屬を內から働いて滅亡せしめた原因は何であるかと云ふに、我らの見る所によれば、何れの場合にても必ず初め其の種屬を急に勃興せしめた原因と同一のものである。之は一寸聞くと甚だ不思議に思はれるであらうが、少し詳しく調べると其の理由が明かになつて來る。凡そ何事でも一利あれば必ず一害あ

るは免れ難い事で、人の傳記などを讀んで見ても、同一の性質が其人の長所であると同時に、また短所でもあると云ふやうな文句を往々見るが、動物の有する諸種の性質にも之と同樣なことがある。或る動物は體の大きく筋肉の强いことに依つて他の種屬に打ち勝ち、或る動物は武器の鋭いことに依つて他の種屬に打ち勝ち、其他それ〴〵異なつた方面に他に優れた所があつた爲に、優勢の位地に達し得たであらうが、假に身體が大きく力が强かつた爲に他に打ち勝つた動物に就いて見るに、體の大きく力の强いと云ふことは確に生存競爭上他の動物に勝つに都合の好い性質ではあるが、また生活に多量の食物を要すること、成長に多くの年月を待たねばならぬこと、蕃殖の遲かるべきこと、働作に敏捷を缺くこと、其他なほ種々の不利益なことが必然に附帶して來る故、一定の度を超えれば、體の大なることは却つて生存競爭上に都合が惡くなる譯である。また牙や角の大きく鋭いことは之を用ひて敵を倒すには無論極めて有利な性質であるが、之とても、牙や角だけが單

獨に發達し得るものではなく、之を載せるための頭骨、顎骨も、之を運用すべき筋肉も、其の筋肉を養ふべき血管も共に發達せざるを得ぬ故、牙や角が大きくなれば、それだけ、其の動物の負擔が重くなつて、之も一定の度を超えると、恰も不相當に多くの海陸軍を造つた貧乏國が、武器を維持するために重稅を課する結果として、總べて他の方面が疲弊し、終には國全體が衰へざるを得ぬ如くに、やはり生存競爭には却つて不適當なものと成つてしまふ。凡そ或る性質を備へたるが爲に總べて他の種屬に打ち勝つて、絕對に優勢の位置に進んだ動物は、後には更に其の性質を用ひて相互に競爭するを免れぬもので、筋力で天下を取つた種屬は後には自己の種屬內で相互に筋力を以て爭ひ、牙で優勢を占めた種屬は後には自己の種屬內で相互に牙を以て鬪ふ故、益體の大きなもの、牙の强いものでなければ生存することが出來ず、斯くして初め其の種屬をして他に優らしめた性質は何所までも際限なく進まねば止まぬ有樣となるが、前に述べた通り、如何に初め生存競爭に都合の好か

つた性質でも或る程度を超えると却つて生存競爭に不利益なものとなり、且つ身體が或る一定の生活法に適する樣に專門的に遠く變化すると總べて他の方面には、それだけ不適當なものと成らざるを得ず、隨つてそれだけ融通の利かぬものと成り、終に生存競爭上不利益な位地に陷つて、漸次他の種屬のために滅されるに至つたのである。

以上述べたことを、尙詳しく論ずれば、多くの實例を擧げて證據立てることが出來るが、斯くては餘り專門學の範圍に深入りすることと成る故、此所には略する。たゞ我らの考への要點を述べれば次の如くである。卽ち地質學上の各時代に優勢の位地を占めて居た諸種の動物が後に至り忽ち亡び失せたのは、決して單に他の種屬のために攻められて敗けた譯ではなく、寧ろ其の亡びる原因が內部に生じたのに因るのである。然して、其の內部に生じた原因と云ふのは、卽ち初め其の種屬をして總べて他の動物に勝つて優勢の位地に達せしめた原因と同一のものである。シヤミセンガイやオウムガイの樣な何所の隅に生

きて居るか分らぬ程の微々たる生活を營んで居るものは、却つて古生代から今日まで引續いて細長く生存して居るに反し、一時急に盛になつて、暫くは絕對に優勢を保つて居たやうな動物が、悉く次の時代に滅び失せたと云ふことは、我らが此所に述べた如き原因によると考へるの外には到底說明の仕樣は無い樣である。

斯くの如く化石學上の例の示す所によると、一時地球の表面に優勢の位地を占めて居た動物種屬は、何れも初め其の種屬をして他の動物に打ち勝つて、優勢の位地に達せしめた其同じ性質が、やがて却つて禍をなして、その爲に悉く亡び失せてしまふたが、さて人類は如何であらうか。人類だけは獨り他の動物とは全く違うて、人類をして、今日の優勢なる位地に達せしめた腦と手との力に依り、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく益榮え行くであらうか。將また他の動物と同一の法則に從うて、嘗ては人類をして他の動物に打ち勝たしめ、文明人をして野蠻人を征服し得せしめた其の腦と手との働きが、やがて却つ

て禍をなして、人類をして、恰も空に向うて投げた石が降ち來るときの如きパラボラ線を畫いて一刻毎に速力を增しつゝ滅亡の運命に向うて進ましめ居る如きことは無いであらうか。

四

前に述べた通り人類が今日の有樣までに進んだのは、全く言語と器械とを用ひて働く腦と手との力に因つたものであるが、此の力の發達に伴うて如何なる事が起つたかと云ふに、凡そ器械を用ひる以上は所有權と云ふものが生じ、財產なるものが現はれ、同時に財產を貸して利子を取る制度も起るが、其の必然の結果として、終に貧富の懸隔が甚だしくなり、富める者は益〻富み、貧しきものは益〻貧しく、一社會の中に、遊びながら贅澤の極を盡す少數の極富者と、如何に働いても生活に必要な衣食さへも充分に獲られぬ無數の極貧者とを生ずるに至る。西洋諸國では今日既に此有樣に達して居るが、世の進むに隨ひ此傾向は益〻烈しくなるに違ひない。金の有り餘る富豪と、生活の爲には如何なる恥

をも忍ぶ貧民とが竝び存すれば、其間に宜しからぬ現象の起るは當然の理で、之のみでも世道の頽廢、人心の墮落の原因としては充分である。

富者の華美な生活を見、金力によつて殆ど何事をも爲し得ざることなき有樣を目擊する多數の人々が、同じく一生を送るならば我も斯くの如くにして暮したいと思ふは無理ならぬこと故、世間一般にたゞ金錢にのみ重きを置く樣になり、如何なる苦しみを忍んでも金錢を溜めやうと決心する事を奮發と名づけ、何等かの方法に依つて金錢を溜め得たことを成功と稱し、父兄は行末を思うて子弟に奮發を强ひ、雜誌は成功者の例を擧げて盛に靑年を煽動するゆゑ、益〻金錢のための競爭が劇しくなるが、一人をして富豪ならしめる爲には、數萬人が貧苦を忍ばざるべからざるは計算上明かである故、總べての奮發者が悉く成功することは到底望むべからざることで、實際には其の多數は何時までもたゞ劇しい競爭を續け、苦しみながら遂に一生を終るのである。肉體の慾には何れも際限があるが、金錢に對する慾には際限が無いから、富

者は其の生存競爭に有利なる地位を利用して、更に富を增さうと努め、貧者は益〻之に苦しめられ、終には毎日朝から晩まで牛馬の如くに働いても、生存に必要な食物、衣服さへ充分に獲られぬ程になる。要するに、今後は貧富の懸隔が益〻甚だしくなり、一度貧困に陷つたものは如何に奮發しても容易に頭を上げることは出來ず、金錢のための競爭が何所までも劇烈になつて、從來の道義や人情を顧みては居られぬ樣な世の中に成り行くものと思はねばならぬ。

また人間は何事にも器械を用ひる結果として、生活が次第に自然の狀態に遠ざかり、火を點じて、夜も明るくし、炭を焚いて冬も暖くする。更に進んで夏も氷を造り、電氣扇を囘轉せしめて暑を防ぐが、斯く器械の力に依つて天然に反した生活をすると身體は次第に天然に對する抵抗力が減じ、段々懦弱になつて、僅の寒暑に曝されても直に病氣に罹るやうになる。西洋人が靴下を脱ぐと風を引くと云うて恐れるのは既に其例である。また火を用ひて食物を煮て食ふ樣になつてからは

剛い物を嚙む齒の力が漸々減じて、齒は弱く且惡くなる。野蠻人に比しては文明人の方が一般に齒が弱く、同じ國の內では下等社會よりも上等社會の方が一般に齒が惡いことは齒醫者のよく知る所である。料理の法が進めば胃がそれだけ弱くなつて、終には食時毎にタカヂヤスターゼを飲まねば飯が消化せぬ樣な人も生ずる。出產の如きも元來普通な生理的の作用であるから決して困難な筈なく、獸類の牝に出產の際に同僚の助けを求める者のないのは無論のこと、人類でもアフリカやオーストラリヤの土人は姙婦が旅行中に出產する場合には暫時同伴者と離れ、藪蔭で出產を濟ませ、傍の小河で幼兒を洗うて、直に自分の背に乘せ、早足で同行者に追ひ附いて、平氣で旅行を續けるが、本來かく輕便であるべきものが、文明國になると、生死にも關する大事件となり、必ず產婆、看護婦、產科醫者の助けを借りなければ產めぬ事に定まり、其上に難產の割合が次第に增して行く。斯く身體が段々弱くなつて、防寒具、避暑具、防濕具、頸卷、手袋、耳覆ひ、呼吸器、塵除け眼鏡、ゼム、清心丹、

タカヂヤスターゼ其他種々雜多の物の中、何か一つ缺けても忽ち病に罹るやうに成れば、生命を保つに必要な物の品數が非常に多くなり、それだけ生活費が高くなつて、生活難が度を增し、生存の競爭になほ一層の努力を要することに成る。特に葬式に其の日だけ看護婦を傭ひ込んで、車で供をさせる程に虛榮心に滿ちた人間が、富豪の贅澤な生活を常に目の前に見て居るのである故、幾らあつても尙その上に金錢の不足を感じ、一にも金錢、二にも金錢と唯それのみを思ひ煩うて一日も安んぜぬ樣に成るに違ひない。

生存競爭が劇甚となつて、烈しく競爭せねば自分の生存が危いと云ふ不安の念が一刻も念頭を離れぬ樣になると、無意識的に競爭して居たときとは違ひ、唯それだけでも甚だしく神經を刺戟するが、人間が便利或は娛樂のために造る器械も、また烈しく神經を刺戟するもの計りである。今日でも一寸外へ出れば直に電車か汽車に乘るが、其の喧しい響きは聽神經を通じて强く腦の中樞を刺戟する。慣れると餘り喧

しく感じなくなるが、之は唯その響が意識に入らぬだけで、實際耳と神經と腦との刺戟せられて居ることは毫も減じない。活動寫眞を見る人は單に畫が動く如くに感じて居るが、實際は一秒に十回以上の割で劇烈な光と暗黑とが交る交る眼の網膜と視神系と腦とを刺戟して居るのである。斯く神經系に對する刺戟が多過ぎるために神經は次第に衰弱し、其の働きが過敏となり、病的となつて些細な事をも甚だしく氣に掛け、僅なことをも非常に心配し、少しく逆境に立つと忽ち失望落膽し、或は自暴自棄となつて、輕々しく自殺し、若くは重罪を犯すやうになる。今日でも統計の示す所に依ると、精神病者、自殺者、犯罪者の數は一年毎に增して行くが、今後は其の原因が增加するに隨ひ、更に一層甚だしくなるものと覺悟せねばならぬ。

また教育が進んで腦の働きが發達すると、萬事自身の智力で判斷し識別する力が增す故、若しも社會に不條理な制度が存在するときは忽ち之に氣が附き、劇しく其の不都合を感じ、其のために不利益な位地に

立つて居るものは堪へ難い不平を起すに至る。無智の野蠻時代や半開時代には何樣にかして餓ゑず凍えず、安全に暮し得るものは、それで滿足して、貧乏な自分の隣りに富裕な人が稍贅澤に暮して居ても、各、その分である如くに心得て、敢へて何故に彼と我との間に斯くの如き貧富の差があるかと考へもせぬが、世の中が進み、知識が開けるに隨つて、何事に就ても其の理由を知らうと欲し、若し不條理極まると思ふこと、を發見した場合には、之に對して不平、不滿の念を禁じ得なくなる。我よりも體格腦力ともに慥に劣つて居る彼が、何故社會に於て我よりも上に位して居るか、我れが毎日衣食を得るために斯く苦しみつゝあるに、彼は何故、快樂に耽りながら安らけく世を渡つて行くか、正直に働く我に一顧をも與へざる世間は、何故に强慾不正なる彼を斯くまでに尊敬するかと考へては、益、劇烈な不平が起り、過多の刺戟のために神經が過敏になつて居るところへ此の不平の念が現れるから、愈、我慢が出來なく成る。今日の虛無黨と云ひ、社會黨と云ひ、無政府黨と云ふは、何れ

も此の不平の爲に生じた結社で、西洋の文明國には一國として此類のものの無い所はないが、不平の原因の消滅せぬ間は、今後も益、盛に蔓るものと思はねばならぬ。また此の不平と、生活難と、世間からの壓迫とが一度に重なり合ふと、鬱憤の餘り如何なる蠻行をも敢てする輩が續出する。今日までも暗殺、謀反等が屢、行はれたが、今後はなほ一層頻繁に起るに違ひない。

野生の動物には生存競爭の結果、常に自然淘汰が行はれ、筋肉體力の劣つたもの、感覺の鈍いもの、其他、生存に不適當のものは亡びて、適者のみが生存する故、生存に適する性質は代を追うて僅かづつ發達し、決して退歩することは無いが、人類には、何物とても交換の出來る貨幣が流通する樣に成つた後は、自然淘汰の働きが中絶した。人類に於ても生存競爭が劇烈で、敗者は生存が出來ぬのであるから、確に一種の淘汰が行はれて居るには違ひないが、今日人類の生存競爭に於て勝敗の定まる標準は必ずしも身體の勝れたこと、精神の優つたことではなく、多く

は全く別種の關係から勝敗が決する故、常に極めて劇しい生存競爭がありながら、優者のみを生存せしめると云ふ淘汰は起らぬ。身體も健全で智力も相應に發達した者が貧に迫つて自殺することもあれば、病身な愚物が醫者と看護婦とを傭ひ得る金錢の力で、無事に生存して子を遺すこともある。立派な人間に育つべき體質の嬰兒がたゞ貧家に生れた計りに、榮養不良で夭死することもあれば、兩親の何れに似ても碌な者には成りさうもない月足らずの兒が、贅澤な定溫哺育箱の助けに依つて安全に成長することもある。斯くの如く今日の人類には身體の健全と、精神の優秀とを標準とした淘汰は全く行はれぬが、淘汰が止めば其時まで淘汰の標準であつた點が直に退化し始めるのは、生物學上動かすべからざる確な事實である。暗黑な洞の內に在つて眼の優劣を標準とした自然淘汰が無いと、其の動物の眼は次第に退化する。追ひ掛ける獸類の居ない所に住んで、飛ぶ力の優劣を標準とした自然淘汰が無いと、其鳥の翼は次第に小さく弱くなる。アメリカの大洞內

に居る盲魚や、ニユージーランドに產する無翼鳥は斯くして出來たものである。されば人類も肉體及び精神の優劣を標準とした淘汰が行はれぬ結果、兩者ともに漸次退化すべきは數の免かれざる所で、今後は必ず著しく退化の現象が現はれるであらう。現に今日でも西洋諸國では既に人類の退化現象の少なからぬに氣が附き醫者、法律家、社會學者などが集まつて、喧しく之を論じ、其ために專門の機關雜誌をも發行して、之を防止する方法を講じて居るが、淘汰の行はれぬ限りは退化は止むを得ぬ故、到底致し方は無いのである。

以上略述した通り、人類は初め諸動物に打ち勝つ際に、大に役に立つた腦と手との働きが、其後何所までも發達した爲に、其の必然の結果、生活が自然の狀態に遠ざかつて、身體が弱くなり、貧富の懸隔が甚だしくなつて、生存競爭が烈しくなり、神經は衰弱し、不平は增進して、世道人心は益〻墮落するの外なきに至つたが、此等は總べて廣い意味に於ける退化の現象に屬する。今日とても既に世道の廢頽、人心の墮落を歎く人

は幾らもあるが、其の原因が人類自身の性質の內部に起つたものである以上は、今後も引き續いて同一の方向に進むであらう。さて斯かる退化の現象が今日以後、更に歩を進めたならば、人類の身體上、精神上、社會上に如何なる變化を生ずるであらうか。之は我々が今から愼重に研究して置くべき大問題である。

五

先づ生活の困難、人心の墮落が今後身體上に如何なる結果を生ずべきかを考へるに、第一に影響を蒙るのは性慾に關する方面である。生活の費用の高まるに隨ひ、結婚して一家を支へ、妻子を養ふことは段々容易でなくなり、相應の資產を造つた後でなければ結婚が出來ぬ所から、自然に晩婚の風が生じ、中年以後まで結婚せぬ者も段々多くなる。然るに性慾は人類自然の肉慾の中で最も力强いもので、靑春燃ゆるが如き時期に當つては、到底理性に依つて冷かに制御し得べきものではない。それ故、公に結婚の出來ぬ場合には、何等か他の方法に依つて其

の滿足を求め、其の結果として裏面の風儀が次第に亂れるは止むを得ぬ。亦女子は身體の構造上、資本を要せずして金錢を儲け得べき方法が備はつてある故、生活の困難な場合、若しくは虛榮心を滿足せしむべき金錢の不足を感ずる場合には、暫時肉體を貸して之を補はうとするに至り易い。甚しきに至つては學校の授業料を得んが爲に、密かに稼ぐ女學生までも出來る。斯くして公然の結婚に依らずして性慾の滿足を得べき簡便な方法が到る所に出來る上は、靑年は悉く之に依つて滿足を求め得て、晩婚は素より一生獨身で暮す男子も多くなり、今日でも西洋諸國では既に、嫁ぐべき相手が無いために據なく獨身で暮す女子が非常に澤山にある。斯樣な世の中になれば梅毒、痳病、軟性下疳などの花柳病が忽ち擴がつて止まる所を知らぬであらうが、梅毒は甚しく身體を弱くし特に神經系を犯せば痲痺性癡呆などと云うて、長くても二三年で必ず死ぬ恐ろしい精神病を生ずる。その上、梅毒は必ず子孫へ傳はる故、この病が世の中に蔓延すると、一代毎に一般の健康が衰

へるは云ふ迄もない。先年ドイツ國ベルリンの大學で學生中に花柳病に罹つて居ない學生の稀なるを知つて大に愕き、特に講義を開いて花柳病の恐るべきことを學生に說き聞かせた。性慾の發動を講義に依つて停止することが出來たか否かは知らぬが、性慾に基く病が確に世の進むと共に勢を得て益擴がり行くは疑を容れぬ。西洋人が「開化(Civilization)は梅毒化(Syphilisation)なり」と云ふのは全く實際に的中した言葉である。

また公に結婚する者も、生活難の增すに隨ひ、其の目的が一變して、從來の如く淸き家庭を造つて、健全なる後繼者を產み育てる爲ではなく、男は富者の娘を娶つて出世の手掛りと爲やうと圖り、女も富者に嫁して、生活難の心配なく且つ榮燿に世を送らうとするから、隨つて結婚の自然の結果なる姙娠を嫌い、あらゆる方法を考へて之を避けやうとする。性慾の滿足は家の內外に求めながら、子を育てる面倒を免れやうとする者が增加すれば、一般の產兒の數が漸々減少するのは當然のこ

とで、現にフランスの如きは、其ため國力の衰へる虞があるので、種々その救濟の方法を講じて居る。また兒を產んでも、其の養育を人手に委せて、自身は樂を爲やうとする女が多くなると、乳を分泌する性質が退化して、西洋では今日既に兒を產んでも乳の出ぬ女の數が年々多く成つて居るが、今後は此の現象も更に進むであらう。

人類の生活が次第に自然の狀態に遠ざかるに隨ひ、身體が漸々薄弱になり、神經が過敏になることは前にも述べたが、生存の競爭が劇しくなるに伴うて、自分の生存が何時危くなるかも知れぬといふ心配が瞬時も念頭を離れぬと、常に不安の念に堪へ得ず、漸々苦悶の狀態に陷り、若し何等かの手段に依つて一刻でも壓迫の烈しい現實世界を忘れて、借金取りも鶯の聲に聞える夢幻の境に遊ぶことが出來れば、之を無上の快樂と感ずるに至る。酒や煙草が到る所に盛に用ひられるのは其のためである。初めて文明人に接觸した野蠻人が、何よりも先づ酒と煙草とを欲しがるのも、恐らく無意識的ながら、器械を用ひて責めて來

る文明の壓迫を暫時だけでも忘れたい爲であらう。酒も煙草も有毒な成分を含むで居る故、多量に續け用ひると中毒を起す。酒精の中毒によつて震戰性譫妄症に罹り、煙草の中毒によつて視力を鈍衰することは世人の知る如くであるが、更に恐るべきは子孫の體質を害することである。醫學上の統計によると精神病者、低能者、體質異常者は殆ど悉く其の父母もしくは祖父母等に酒客を有するものである。然し酒と煙草とは極めて重い税を課して、經濟上容易に飲めぬやうにして外部から强制的に防ぐことも出來、また煙草には製造者が如才なく芋の葉や蓮の葉を乾して刻み込むから、其の害毒は或は恐れるに足らぬかも知れぬ。

世の開けぬ中は農產物が其まゝで直接に費消者の手に渡る故、飲食物に混ぜ物が無いが、製造工業が盛になると飲食物も一ケ所で多量に製造し、一時貯藏して置くために防腐劑を加へることもあり、また法外の儲を得やうとして、容積重量を增すために種々の物を混ずることも

ある。酒にサリチル酸を加へ、砂糖、溫飩粉に房州砂を混ぜ、醬酒にサッカリンを入れることなどは今日既に盛に行はれて居るが、これ等も長い間には少しづつ身體を害せぬとも限らぬ。

また製造工業の發達に伴ひ、人の仕事が益細かく分業的になつて、身體の働きも一方に偏する樣になり、耳を用ひる職業の者は耳のみを過度に用ひ、眼を使ふ職業の者は眼のみを過度に使ひ、其ため各職業に固有の病も出來て來る。其上に職業によつては年中絶えず綿屑を吸ひ込むとか、鹽酸の煙を嗅ぐとか、自然の生活には決して無い有害物に觸れる故、之によつても身體は漸々惡くなる。田舍が衰微して都會が盛大になる程、この害の範圍は廣くなり、其の結果も著しく現はれる。

六

以上は主として不自然の生活より起る身體の退化を述べたのであるが、次に智力の進歩に伴うて精神上に如何なる變化が生ずるかと考へるに、教育が進み知識が增せば次第に何事に就いても其の理由を知

らうと欲し、且つ自身の判斷力に訴へて其の當否を鑑別しやうと試みる樣になり、從來たゞ他動的に教へられて其まゝ信じ來つた事に對しても疑を挾む樣に成つて來る。之は從來單に、知識上の權威に服從して居たのが、其の支配から脱して獨立に考へ樣とするのであるから、精神的解放とも云ふべき事で、其の結果として總べての方面に懷疑の念が生ずる。其中で精神上に最も著しい影響を及ぼすのは道德上に關する懷疑である。尤も金錢の遣り取りに忙しい多數の人々は從來とても、たゞ習慣に從うて行動するだけで、道德上の議論などは丸で眼中に置いて居なかつたし、また今後とても、多數の人々は實際の生存競爭に追はれて、此樣な問題を考へる暇も無く世を渡るであらうが、少しく學問でもする人は道德の說く所と目前の事實とを對照して疑を挾まざるを得ぬ樣になる。例へば書物には善人は終に榮え、惡人は終に亡びる如くに書いてあるが、實際には貧富の懸隔、生存競爭の劇甚のために、善人が亡び惡人が榮える方が却つて多い樣に見え、正直に一生懸命

に、働いて居た者が不意に災難に遇うて悲慘極まる境遇に陷ることもあれば、不正直な橫着極まる事をして莫大の財產を造つたものが、自分一代は云ふに及ばず、孫の代まで富み榮えて居る例もある。積善の家が忽ち斷絕して、積惡の家に却つて餘慶のある事もある。斯樣な事實を目前に見ては、道德とはそも何物であるかとの疑念が起るは當然で、「善は善なるが故に爲すべし、惡は惡なるが故に爲すべからず」と云ふ如き不得要領な說法には到底承知が出來なくなり、從來の道德は根柢から改めて吟味せねばならぬとの觀念が浮ぶ。一方で理論上道德に關して疑を抱く者の生ずる間に他方には更に一步を進めて、實際の處世上、道德なるものを安く見縊り、自分一身の損得から打算して、生存競爭上、道德に從ふを利とする場合には道德を尊重し、道德を破るを利とする場合には道德を捨てて顧みぬ輩が多數に生ずる。西洋諸國で、他の方面の道德が甚しく衰へたに拘らず、商業上の道德が堅く守られて居るのは斯樣な動機から起つたことであるから、これを以て他の方面の

徳義を測るの標準とすることは出來ぬ。人心が斯かる程度に達した上は、道徳が彼等に對して何の威嚴をも保ち得ぬは勿論である。

生存競爭が烈しくなれば、目的のために手段を擇んでは居られぬ樣になり、不正な事も聞き慣れては日常の如くに思はれ、一旦成功さへすれば、世間は其の光輝に暈まされて、如何なる手段に依つたかは忘れて問はぬ。斯かる例が無數に現はれるに隨ひ、道徳の價値は益〻認められなくなつて、終には過去の時代に存した古物の如くに思はれ、實際の生活には全く度外視せられるに至るやも測り難い。世には往々、今日は舊道徳が破壞せられ、新道徳が未だ定まらぬ過渡時代であるから、世道人心が多少混亂の狀態にあるは止むを得ぬと說く人もあるが、以上述べた如くに考へると、所謂新道徳なるものは、何を根柢として何時出來上るものであるか眞に心細い次第である。

生活難の增すに隨うて、往々宗教の叫び聲が一時多くなることもあるが、我らの考へに依れは、之は決して或る人々の論ずる如き信仰の復

活と見做すべきものでは無く、たゞ競爭場裡の不安の念に堪へずして何物にか攝み附いて慰安を求めやうと試みるのであるから、恰も溺れんとする者が浮かんで居る藁にも攝み附かうとするのと同じであつて、無智の爺婆が安心して信仰して居たのに比すると全く趣が違ふ。人が地獄極樂をその儘に信じ得た時代には、宗教は風教の維持にも失意者の慰安にも有效であつたらうが、一旦智力が進んで懷疑の念を生じた者に對しては、到底多くの安心を與へる力はない。特に他人を救ふ前に、先づ自分を救ふべき必要のある今後の宗教家によつて、道徳が幾分でも維持せらるべきことは頗る望が少ない。

斯くて道徳も宗教も、今後は生活難と智力の增進に伴ふ懷疑、不安の念を鎭めることは出來ず、生存競爭の方は一刻も休まず追ひ立てる故、人心はたゞ墮落の方向に進むの外に途なきに至るであらう。

七

人類が社會を形造つて生存して居る以上は、互に力を協せ相助ける

ことが何よりも大切であるが、生活難の加はると共に人心が墮落すると、此事が次第に薄らいで行く。各個人の間の競爭が劇しくなると、自分一身の生存を圖ることに全力を盡してもなほ不足を感ずる程である故、勢ひ他を顧みることなどは出來なくなり、隨つて何事を爲るにもたゞ自分一身の利害損得から割り出して計畫せざるを得ぬ樣になつてしまふ。元來人類の如き協力一致の本能の頗る薄弱なるものには制裁を設けて互に相誡め、協力一致の破れぬやうにする仕組が必要である。昔は道德、宗教等に依つて多少之を爲し得た。然るに今後は貧富の懸隔、知識の增進等に伴ふ利己の私慾主義が勢を得て、宗教道德は共に衰へるの外はない故、たゞ强制的に働く法律の外には、人類に協力一致の働きを爲さしめ得るものは無くなる。斯くなれば世は私慾と法律との競走となり、私慾は巧に法律の空隙を潛り、法網に觸れずして大に儲け得べき方法を講究して實行し、之を防ぐ爲には更に密なる新法律が造られ、法律の數は限りなく增すであらうが、錠前が改良せられ

る毎に盜賊の錠前破りも精巧になる如くに、法律が密になれば、それだけ之を潛る術も進歩し、私慾は相變らず總べての方面に盛に働き續けるであらう。

各個人が悉く私慾に依つて働く世の中になれば、協力一致を要する事業は素よりよく行はれる望はない。たとひ協力一致の外形だけは繼續しても、其の內容は私慾の集まりと變つてしまふ。例へば團體の自治の如きも、元來は多數の人々に適當と認められ選出された者が衆に代つて議員となるべきに、今後は私慾主義の拔扈するに隨ひ、其の位置を利用して儲けやうと思ふ者が、自分の方から候補者と名乘つて盛に運動し、うるさく選擧者に迫り、あらゆる手段を取り、時には兇器を持ち出してまでも、他を排して自分が當選しやうと努める樣になるに違ひない。福澤氏が嘗て「世界國盡し」の中に「政體ありて主君なく、天下は天下の天下なり」と謳ふた北米合衆國の人に云はせると、米國は共和政治と云ふ理想的の政體で、各個人は貧富上下の別なく、憲法によつて平

等に政治上の權利を與へられて居ると云ふが、今日既に上述の如き有様に進んで居る故、假に自分がニューヨーク市の住民になつたと想像すると、自分の實際に有する政治上の權利は、たゞ自分の好まぬ候補者を選むか、棄權するかの二途の中、一つを隨意に選び得ると云ふ權利のみに過ぎぬ。されば今後は協力一致を要する働きは漸々困難になり終には殆ど不可能になるやも知れぬ。

智力が進めば道德に向うて懷疑を挾む様になると同じく、從來の傳說によつて存する社會の制度に對しても、單に盲目的に服從して居らぬ様になり、批評的の態度を取つて之に望むから、不條理なりと思ふことには反抗の念を起さゞるを得ない。單に祖先の御蔭によつて、愚劣な子孫が何時までも社會の上位を占め得る印度の世襲的階級制度などに對しては、第一に斯かる反抗の念が起るであらうが、之れが劇しく蔓つて現在の制度を倒さうと試みる者が盛に現はれては、社會の秩序安寧が破れる憂がある故、國を治める局に當る者が力を極めて之を押

へやうとするのは無理もない。然しながら斯かる思想は外部から壓して發表させぬ様にすることは出來るが、心の中に思ふことまでを防止することは出來ぬ故、今後は智力の進むに隨ひ、なほ一般に擴まるは免かれぬであらう。「泣く兒と地頭には勝たれぬ」と云ふ諺も有つて、時の强者に反抗するは損である故、大抵の人は自身の利害から考へて、容易に公には名乘らぬが、西洋諸國では今日既に之に類する念は殆ど總べての人の內心に存する様に見受ける。なほ此等に就いては論ずべき事が澤山にあるが、餘り長く成るから止める。

八

人類の將來などと云ふ問題は到底四十頁や五十頁で詳に論ぜられるものではないから、此所には素より極めて大體の筋道だけを述べたに過ぎぬが、之に依つても人類が今如何なる方向に進みつゝあるかと云ふ事だけは多少明かに知る事が出來やう。即ち人類は其始め腦と手との力に依つて他の動物に打ち勝ち、絕對に優勢な位地を占めるこ

とを得たが、其の腦と手との働きの進んだ結果、今後は貧富の懸隔が甚しくなり、生活の困難が增し、身體は退化し、神經は過敏となり、不平懷疑の念が進み、私慾のみが盛になつて、協力一致の働きが出來なく成るべき運命を有するに至つたのである。人類の場合に於ても、初め生存競爭上最も有效であつた其の同じ性質が限りなく發達して、後には却て禍をなして、今後は滅亡の方向に進むの外なくなつたのであるから、彼の中世代のアトラントサウルスが初め他の動物に勝つ際に有效であつた體力が過度に發達し、終にはその爲敏捷を缺いて滅亡したのと全く同一の徑路を進みつゝあると推測するの外はない。されば其の終局も地質學上の各時代に一時全盛を極めて居た他の諸動物と同じく、恐らくは次の時代までに略、全滅するを免かれぬものと見做すが適當であらう。

斯樣に考へて見ると、今日の人類は恰も不治の病の初期に罹つて居る有樣で、各民族は未だ輕いながらも到底全快の見込みのない不治の

病人に比較すべきものである。一個人が不治の病の初期に罹つた場合には、他事を投げ擲つて安樂に靜養する事も出來るが、地球の表面に於ける各民族は常に互に睨み合うて、僅の際でもあらば相倒さうと待つて居るのであるから、專ら病を養ふのみに掛かつては居られぬ。必ず外に向うては武備を固めて敵の侮を防ぎ、內は出來るだけの方法を講じて一刻でも病勢の進むことを止めて壽命を長くすることを務めねばならぬ。今後に於ける各民族間の競爭は恰も不治の病人が相鬪うて居る樣なもの故、武備の劣つたものが先づ敗ける憂があるは明であると同時に、病氣の急に進んだ者も忽ち敵に倒されるは疑ない。されば各民族ともに全力を盡して、此の兩方面に於て常に他の民族に優るやうに務めることが必要である。

小醫は人を醫し、大醫は國を醫すと云ふが、若し人類の不治の病なる世道の廢頽を醫し得る者があつたならば、これこそ大醫の更に大なるものである。世は澆季なりとは三千年の昔から絕えず人の云ひ來つ

たことであるが、其間に之を憂へて、世を救はうと志した人は素より多數に有つた。その中で死後の崇拜者に擔がれて今日まで名を傳へられたものにはキリスト、孔子などがあるが、此等の人々の教へた事は根本は極めて簡單で且つ同一である。即ち「己の欲する所、之を人に施せ」若しくは「己の欲せざる所、之を人に施す勿れ」と云ふことに歸着するが、此の訓へは實行が出來さへすれば、世道の廢頽も人心の墮落も即座に撤回することが出來て、世は忽ち極樂淨土と成る筈であるから極めて結構であるが、惜しいかな今の世の中では實行が到底覺束ない。今日まで之に依つて世道人心の墮落を防ぎ得なかつたことは、過去の歷史の證明する通りであるが、今後とても同樣である。生存競爭の劇烈な世の中では、一刻でも他に先んじて此の訓へに從ふた者は忽ち取り返しの附かぬ苦境に陷る虞がある故、一民族內の總べての個人が、一、二、三の號令と共に悉く打ち揃うて此の訓へを守る樣になる時の外は到底その實行を望むことは出來ぬ。

根本的の治療法が無いとすれば、其他の方法を求めるの外に道はないが、他の方法は今日既に文明諸國に澤山に行はれて居る。養育院、感化院、孤兒院、慈善會、出獄者保護會、安價食物供給所、無錢宿泊所、勞働者養老金、貧困者慰問其他種々の救濟法は皆この類である。此等は病の原因を除くのではなく單に現れた症狀に對する療法である故、素より姑息なるを免れぬが、適當に行はれゝば、其だけの効は充分にあるべき筈である。時としてはトラスト征伐、累進的相續稅法等の稍〻外科的治療に類する方法が案出せられることもある。また身體の退化を防ぐためには、米國の或る州で現に行うて居る如くに、遺傳性の惡病患者には强制的に生殖を禁ずることも出來る。之に就て人權云々と論ずる人もあるが、斯かる論は足の先が壞疽に罹つて腐り始めたときに細胞權を云々して患部を切斷することを躊躇するのと同樣な迂論である。人類の過去に鑑み將來を慮れば、前に擧げた如き諸種の救濟法は何れも今後益〻奬勵して出來得る限り協力一致の精神を失はぬやうに努め

ねばならぬ。これが軍備の充實と共に、他の民族の間に介在して他の民族に敗けぬための唯一の手段である。

終りになほ一言したいことがある。我等は一昨年の一月中央公論紙上に「所謂文明の弊の源」と題する一篇を掲げたが、其後或る人から斯樣な論は讀者をして悲觀に陷らしめる患はないかとの注意を受けた。今此所に述べたことに對しても或は同樣の懸念をする人が無いとも限らぬが、我等は斷じて左樣な心配は無用であると考へるのである。

人間には一定の壽命があつて早晩死なねばならぬことは、誰も承知して居らぬものはないが、其のために悲觀に陷つたと云ふ人は嘗て聞かぬ。また此の地球は其の始め火の塊であつたのが、漸々冷却して固形の地殼が生じ、凹んだ所へ水が溜り、其の後諸種の生物が生じて、今日の有樣までに進み來つた。今後は更に冷却して今日の月に見る如く、水は凍つて氷となり、土は凍つて石となり、空氣も凍つて液體となり、更に固形體となるであらうが、斯くなつては生物は到底生活は出來ぬ故、

今見る如き生物は其前に總べて消え失せて趾を留めぬであらうとは、地球を論じた書物には悉く明記してある。また太陽と若干の稍大きな遊星と無數の小遊星とより成る太陽系なるものも、其の初めは今日望遠鏡で實際幾つも見える如き星雲であつたのが、漸次凝固して今日の姿までに成つたのであるから、今後もなほ變化し續けるべきものである。其の上、太陽はこれに附屬する無數の星と共にヘルクレス星座の方へ非常な速力で進みつゝあるとのこと故、終には如何に成り行くか分らぬ。年々歲々何の變化も無い樣に思ふのは、人の命が短かいために變化を知るべき時間が無いからで、恰も大きな圓の周邊の一小部が直線と異ならぬのと同じ理である。我等が此所に述べたのは、たゞ人類は腦と手との働きの進んだ結果、今日既に滅亡の方向に進みつゝある故、地球が冷却して生物が全滅すべき時期を待たず、それより遙に前に滅び失せるであらうと豫言したのみである故、從來人の云ひ來つたことに比して期限の少しく違ふ外には餘り多く異つて居らぬ。盛

者必滅とは常に人の唱へ來つたことで、始めあるもの必ず終りあるは、これ生滅の法である。天長く地久しくとか、天地無窮とか、終り無き世とか云ふのは梨子を「有りの實」と唱び硯箱を「當り箱」と名づけるのと同じく縁喜を祝ふ假の言葉で、數日の後には必ず枯れるに定まつた松の切り枝を立てて常磐の榮を願ふ徵しとするのと同じ心持で常に唱へて居るに過ぎぬ。

總じて、來るか來ぬか分らぬ危害は、全く來ないものと見做し、來ることは確であつても、其の來る時の定まらぬ危害は當分は來ぬものと見做して、氣に掛けずに生活して居ることが健康な人の常態である。汽車に乘つて旅行すれば何時衝突して顚覆せぬとも限らぬが、乘つてから降りるまで絶えずこれを心配して居る者は一人もない。また人間は老少不定と云うて何時死ぬか分らぬものであるが、毎日この事を考へて悲觀し續ける者は一人もない。斯樣なことを常に憂ひて暮すのはたゞ幽鬱性の精神病患者のみである。されば萬一この文を讀んで

悲觀に傾く人があつたならば、其の人は已に現時流行の神經衰弱症に罹つて居ると診斷せざるを得ぬ故、我等は其の人に向うて、病勢の募らぬ内に速に療養に取り掛ることを切に勸告する。

（明治四十二年十一月）

追加一　生存競爭と相互扶助

一

生存競爭と云ふ言葉は前から聞き慣れて居たが、近頃は之と相對するものとして、相互扶助と云ふ言葉が盛に用ひられる樣に成つた。二三年前までは新聞や雜誌にも餘り見えなかつた此の言葉が、斯く遽に流行し出したのは何故であるかは知らぬが、察する所、先般の大戰爭の動搖に促されて、從來の社會の制度に種々の無理が有ることに心附き、この儘では到底我慢が出來なく成つた人達が、世の中の改造を企てるに當り、此の言葉を一つの標語として用ひ出した爲かと思はれる。

現代の文明生活には何れの方面にも甚だしい缺陷の有ることは苟くも物を考へ得る頭を持つた人間には明かなことで、何とかして之を合理的に改めたいものであるが、さて如何に改造すべきかと考へるに

當つては、先づ今日の缺陷の生じた眞の原因を最も深い所まで研究して掛からねばならぬ。而して其のためには生物界に行はれる生存競爭とか、相互扶助とか云ふことをも充分に調べて見る必要が有らう。これ等は何れも總べての考案の根柢と成るべきもの故、若し此の邊の考へ方が誤つて居る樣では、其の上に如何なる名案を築き上げたとしても悉く空中樓閣たるに過ぎぬことは云ふまでもない。

近頃雜誌などに出て居る文を讀んで見るに、生存競爭と相互扶助とを恰も相對立するものの如くに論じたものが澤山にある。例へば生物の進化は生存競爭によるよりも、寧ろ相互扶助によつて生じた者であるとか、十九世紀の文明は生存競爭に基礎を置いた文明であつたが、今回の大戰爭によつて全く破產した。今後は宜しく相互扶助に基いた新文明を建設せねばならぬ抔と云うて生存競爭と相互扶助とを全く對等のものであるかの如くに論じて居る。卽ち生存競爭と相互扶助とは恰も酸とアルカリとの如く、若くはプラス五とマイナス五との

如くたゞ方角が違ふだけで、それ自身には同等の價値を有するものと見做して掛かる人が多い樣である。

然るに我等の考によれば、これは全く誤解であつて、生存競爭と相互扶助とは決して斯く竝べて論ずべき性質のものではない。生物界に相互扶助の行はれて居ることは、生物界に生存競爭の行はれて居ることと同じく、何れも明かな事實であるが、相互扶助は如何なる者の間に行はれて居るかと云へば、何時も必ず共同の敵を有する者の間にのみ行はれて居ることを思へば、生物界には先づ生存競爭が有り、然る後に競爭の一手段として相互扶助が現はれたものなることが容易に認められる。言を換へて云へば生物界には第一義としては、たゞ生存競爭が有るのみで、相互扶助は單に敵と爭ふための策略として味方同志の間に行はれる副次的の現象に過ぎぬ。卽ち生存競爭と相互扶助とは決して東の大關と西の大關と云ふ如くに對等の資格で相撲を取るべき性質のものではなく、相互扶助は生存競爭の仕事の一部分として當